

# 青年期心理とアイデンティティの形成過程

—宮澤賢治の伝記資料と作品を通して—

## The formation process of adolescent psychology and identity —From a view point of Kenji Miyazawa's biography and his literary works—

森 恭子

愛知みずほ大学人間科学部人間科学科

Kyoko Mori

*Division of Human Sciences, Department of Human Sciences, Aichi Mizuho College*

### Abstract

The present study focuses on the formation process of adolescent psychology and identity through examining Kenji Miyazawa's biography and his literary works. Adolescence is a transitional period from childhood to adult in which people go through a critical psychological condition which is peculiar to adolescence. Through the process of overcoming this critical condition, adolescents become adults while forming their identity. Kenji Miyazawa also experienced this psychologically critical condition when he confronted the pressure to choose his career and his way of living. He was trying various careers or ways of living in order to seek an ideal of self-realization. However, he gave up on the way and did not realize his goal of achieving self-realization. In addition, he tried to cope with the problems adults should overcome, while he retained the problems adolescents should take care of during that earlier stage. Unfortunately, however, he passed away at the age of 37 before overcoming the problems he should have achieved. In other words, Kenji could not become an adult by realizing his identity. Young people nowadays are more likely to have a longer "moratorium period" in his lifetime, and it takes more time to make the transition from adolescence to adulthood. This is considered one of the social problems that we should take care of in contemporary society. Kenji spent his adolescence in the Taisho Era. This paper also contrasts and compares the adolescence stage in the Taisho Era with the Heisei period, considering the historical background of the Taisho Era.

Key word : adolescence psychology; identity; moratorium; biography material; Miyazawa Kenji.

### 1. はじめに

本研究では伝記資料を通して、宮澤賢治の青年期心理とアイデンティティの形成過程について分析を行う。

青年期はライフサイクルの中で最も大きな変容が起きる時期である。言い換えれば、誰もが青年期には危機的な状況を経験する可能性がある。

このような青年期の心理を著名人の伝記を通して分析するという伝記的研究は、Erikson, E.H.によるマルチン・ルター<sup>1)</sup>やガンディー<sup>2)</sup>等、西平直喜による石川啄木<sup>3)</sup>やマックス・ウェーバー<sup>4)</sup>等、鑪幹八郎による森有正<sup>5)</sup>、大野によるベートーベン<sup>6)</sup>等がある。

伝記的研究については、科学性に関する問題が指摘されているが、西平は研究上の限界や短所を謙虚に受け止めながらも、「伝記の発見は、人間科学的心理学における人間発見の、もっとも重要な一コマである」と述べている。

また、大野は西平をふまえ、「①伝記資料が十分に吟味されており、歴史学における資料に匹敵する信頼性を持つ。②伝記の資料的価値として、a) 一生涯の時間的展望の中で青年期の言動を読み取ることが可能、b) 歴史的・社会的背景が明確であり、関係人物の調査も進んでいること。③このような質的内容をもつ資料から、心理的力動性の因果性やアイデンティティの形成過程などについて、伝記資料のいくつかの事例から共通した布置を見いだすことによって心理社会的、心理歴史的に理解することが可能である」<sup>7)</sup>と述べている。

さらに、宮下は大野の伝記資料を利用した研究を「臨床心理学の事例研究に匹敵する内容と含蓄を備えている」<sup>8)</sup>と述べている。このように伝記研究を事例研究として位置づけるならば、事例から個を超越した普遍性を見出すこともできると考えられる。

本研究で取り上げる賢治に関しては、信頼性の高い伝記資料が存在している。また、文学者、哲学者等の専門家から賢治の友人や在野の研究者まで、多くの人々が多方面から研究を行い、心理学や精神医学の観点からも研究がなされている。たとえば、病跡学的な研究では、福島章<sup>9)</sup>が賢治の青年期の危機を躁うつ病であるという視点から分析している。矢幡洋<sup>10)</sup>は賢治の心理を、関係嗜癖をモデルとして理解しようと試みている。また、賢治の作品の心理的分析は、「銀河鉄道の夜」<sup>11)</sup>「やまなし」<sup>12)</sup>(白石秀人)、「セロ弾きのゴーシュ」<sup>13)</sup>(森恭子)等がある。しかしながら、青年期心理とアイデンティティの形成過程に焦点を当てて、宮澤賢治について心理学的な分析を行う試みはなされていない。

長いモラトリアム期間、アイデンティティの模索、経済面での親への依存、生涯、独身で親の家に留まったこと等、現代の若者に共通する青年期心性が、賢治をにもあったと考えられる。このような賢治の伝記的研究は、現代の若者の心性を理解する一助となるのではないだろうか。さらに、その背景として、大正時代の若者が抱えていた問題を探り、現代の若者の問題との類似性についても言及したい。

## 2. 方法

賢治の伝記については、『新校本 宮澤賢治全集第十六巻(下) 補遺・資料 年譜篇』を中心に、宮澤清六『兄のトランク』、関登久也『新装版宮澤賢治物語』、森莊巳池『宮澤賢治の肖像』、佐藤隆房『新版宮澤賢治—素顔のわが友—』を参考にする。新校本は宮澤賢治の実弟宮澤清六が編集に関わっており、信頼性の高い資料と考えられる。また、関は賢治の親類(父方祖母の弟の子)であり、森、佐藤は賢治の友人であり、賢治と親しく接した人々の証言として彼等の著書も信頼性は高いと言える。

賢治は日記を残していないので、書簡と日記代わりと言われる短歌を中心に、詩や童話、覚書、手帳等についても分析を行う。

## 3. 賢治の発達段階—先行研究の検討

宮澤賢治に関しては、前述したように多数の研究があり、全てを網羅することは難しい。ここでは、賢治の発達段階に言及している幾つかの研究を取り上げて検討したい。

賢治は37歳で亡くなっているが、彼の人生が志半ばで未完のまま終わったと考える研究者は多い。しかし、賢治の未完の人生をどのように考え、賢治がどの発達段階に到達していたと捉えるかは、研究者によって意見が分かるところである。

福島は賢治の多彩で豊かで広大な体験領域から、「賢治の精神のありようは、人間がこのような限定、狭縮、干渉をうける以前の、生命体としての人間存在の原初の姿を保ったままに、つまりいささかも人為的な制限を受けることなく、大人の年齢に成長してしまった稀有のケースと考えられる」<sup>14)</sup>と述べ、精神分析的な発達理論からいえば、エディプス期以前の前エディプス的な段階であると指摘している。福島は賢治の作品に表現された精神から考察しており、実際の賢治の発達段階については言及していない。

見田宗介<sup>15)</sup>は『『大人』のする二つの仕事—生殖と生計の営為にその身体を汚さぬということによって、<子供でありつづけること>を、賢治はひとつの思想として選んだのである」と、賢治を子どもとして捉えている。さらに、賢治自ら子どもとして生きることの意義を見出していたと考えている。

同様に吉田司<sup>16)</sup>も「生まれてから死ぬまで政次郎の掌の中から一歩も外に出れなかった“三十七歳の子供”と、賢治を子どもと捉えている。吉田は賢治が父親から自立できなかったという視点から子どもと考えている。

佐藤通雅<sup>17)</sup>は「ふつうなら、とりわけ地方圏なら三十はもう分別のあるいい大人である。賢治はその常

識のわくからはみだし、『すでに三十歳になっているのに大人になりきれない賢治』だった。わくを一举に飛び越えて、舞いあがるとことは、少年そのものだった。地上の場に身を置こうと意志しながら、けっしてなりきれないのも少年性ゆえだった」と述べ、賢治を少年として捉えている。

吉田和明<sup>18)</sup>は「賢治の作品を読んでいると、<ああ、ここに永遠の少年がいる>という思いに、僕はいつも捕らえられてしまう。<純真さ>という言葉でしかいいあわせない何かを身にまとい、たたずんでいる賢治の姿を、僕はそこに見ないわけにはいかないからだ。いや、少年の彼ではない。正確にいうならば、それは少年から青年への、その過渡期における一時期にたたずんでいる彼の姿でこそある」と児童期から青年期過渡期として捉えている。

山下聖美<sup>19)</sup>は「家出、フリーター生活を経て定職についたものの、転職を繰り返し、パラサイトシングルのまま三十七年の短い生涯を閉じる。さらに付け加えるなら、極度のシスコン」と述べ、賢治を青年と捉えている。

このように、研究者によって賢治の発達段階の捉え方は異なっている。賢治の作品を分析した場合、賢治の精神の純粋さや純真さなどによってより幼い子どもと認識される傾向が見られるし、賢治の人生を検討した場合、青年として位置づけられる傾向があるのではないか。また、福島以外は子ども、少年、青年の定義はなされておらず、曖昧なまま使用されている。大人にはなっていない状態を表す言葉として、各々が子どもや少年、青年を使用していると捉えることができる。

さらに、吉田の言う<永遠の少年>は分析心理学で用いられる永遠の少年の概念とは異なるものである。ユングは人類に共通した普遍的無意識に見られる心象を創り出すパターンとして元型を考え、その1つとして、「永遠の少年」を、子ども元型を表すものと考えた。この子どもは肯定的には救済者として、対立するものを統合させる可能性や生命力、創造性を持つが、否定的には破壊的な面も併せ持つ象徴である。フォン・フランツは、母親とのつながりが強くいつまでも大人になれない男性を永遠の少年と呼んだ。永遠の少年は常に自らの可能性や夢を追い求めて新しいことを何度も始めても、責任や束縛を嫌い、忍耐強く続けることが困難であったり、理想の女性を求め続けたりする。つまり、夢を追い続け、現実との折り合いをつけないため、周囲と軋轢が起こし、自分自身が精神的に追い込まれ、精神的な病に陥ることもある<sup>20)</sup>。

賢治は可能性や夢を追い求め、現実と理想の間でもがき続けたことは確かである。しかし、自分を犠牲にしてまで他者のために働いており、自己中心的な永遠

の少年とは異なるだろう。また、母親コンプレックスが強かったために、大人になれなかったとは言えないのではないだろうか。後述するが、むしろ、父親との複雑な関係の中で大人になることが困難であったと考えられる。

これらの先行研究は必ずしも心理学を基盤としていないので、発達段階の捉え方が曖昧であることも無理はないだろう。また、心理学の分野でも児童、青年、成人をどのように捉えるかは議論のあるところであり、研究者によっても定義が異なるのが現状である。

青年期は第二次性徴による身体の変化により始まるとされており、児童期から青年期への移行は、明確である。しかし、青年期から成人期への移行については、明確な基準は存在しない。大人になるための青年期の課題としては、親からの自立、性役割同一性の獲得、職業選択などをあげることができる。本論文では主にErikson, E.H.が提唱したアイデンティティの確立をもって、成人への移行と考えたい。

賢治は経済的には親に依存していたし、親の庇護の元で生活していたが、後述するように父親に反抗し、父親から自立しようとする試みは行っていた。また、職業の選択についても、転職を繰り返してはいたが、生涯、自らの適職を模索し続けていた。このことから、賢治は成人には達していなかったにしても、児童期からは脱しており、青年期の段階にあったと考えることが妥当である。

#### 4. 賢治のアイデンティティ—先行研究の検討

アイデンティティとは、Erikson, E.H.の人格発達理論における青年期の心理的社会的概念を示すもので、「幼・児童期に経験してきた変化する多様な自己像と、若者たちに対して選択と傾倒のために提供される様々な役割機会とを、徐々に調和させていくものである」<sup>21)</sup>とErikson.は述べている。子どもから大人への移行期にある青年は「自分は何者か」「自分が目指す道は何か」等の問いかけに対する答えを自分なりに導きだすことが求められ、その答えを出すことが、アイデンティティの獲得と言える。

賢治のアイデンティティは生涯を通して変化しており、彼のアイデンティティをどのように捉えるかは、研究者によっても異なっている。賢治はアイデンティティを獲得できなかったという立場もある。山下は「彼は、終生『ほんたう』へとたどり着くことができなかったのである。『ほんたう』に行き着くための『迷いの跡』こそが、彼の歩んだ道である」<sup>22)</sup>と述べている。また、菅原千恵子は「賢治の短い人生は迷いの中にあつたといえる。それは偉大ではあるが、どこへ行ったらよいかわからない切符を持った賢治の宿命であつた

かもしれない」<sup>23)</sup>と述べている。両者とも、賢治は一生「自分は何者であるか」と言う問の答えを見つけようとしたが、結論にたどり着かず、むしろ、問い続けることが賢治の人生であったと捉えている。

八幡は「彼は、父親の監視通りに育てられた生活から、自分自身である人生への烈しい跳躍を止めようとしなかった。しかし、彼の弱い体や、彼の目指す理想と経済的収入が合致しないなどの悪条件のため、ついに彼はそれを成就することができなかった」と述べ、「父親のまつわりつくような間接的コントロールから脱出」<sup>24)</sup>できなかったために、自分自身の人生を歩むことができなかったと捉えている。

職業的な側面から、山折哲雄は外面的にみれば、賢治は、天体物理学、地質学、土壌学、音楽、天文学等に対してディレッタント（好事家）の態度を崩さなかったと指摘し、「彼はむしろそれらのすべてのものになろうとした、途方もない欲望をかかえこんだ人間だった。そういう修羅のごとき蕩児だったところにその生き方の本質があったのではないかと思うのです」<sup>25)</sup>と述べている。つまり、すべて中途半端に終わってしまったものの、実現不可能な見果てぬ夢を追い求めたことを賢治のアイデンティティと捉えている。

佐藤は「おそらく宮沢賢治は、文学者でも科学者でも宗教家でもないもっと別の〈宮沢賢治〉に向かって疾走しながら、その姿自体が思想であるような何かを残したのだ」<sup>26)</sup>と述べ、既成の概念ではとらえられないアイデンティティを想定している。

一方、堤忠一は「わずか三十七歳で亡くなるまで、彼はおのれを生かす職業を求めつづけたが、ついにこの世ではみつからなかった。賢治が亡くなったのち、凡庸な世間は、彼が不世出の詩人であり、おそらく絶後の童話作家であることに気付いた」<sup>27)</sup>と述べている。堤は賢治を文学者と位置づけているが、あまりにも偉大であったために、世間が彼を認めることができなかったと指摘している。千葉一幹も「賢治の残した作品を見れば、それは、詩であり、童話であり、小説であり、そうしたものがほとんどだ。つまり賢治は、どこまでも文学者である」<sup>28)</sup>と賢治を文学者として捉えている。

賢治の内面に焦点を当て、「自分は何者か」という問に対して、山内修は「存在すること自体が悪であるかのような自己にとって、真に生き得る世界とは何かを追求してきた賢治は、観念のイーハートヴを構築し、それを現実の岩手に架橋するために羅須地人協会活動へと足を踏み入れた。しかし、そうした力業にすべて挫折したとき、『デクノボー』たることを祈念したのだともいえよう。これが彼の生き得る最後の願望であった」<sup>29)</sup>と述べている。

小沢俊夫も「弱きものの生きる道を、他人の為に尽すところにみとめようとする点に度しい消極的なその人生観を成した。しかし、それが更に止揚され昇華すると、所謂デクノボウの人生にまで至るのであるといえよう」<sup>30)</sup>と述べている。二人とも賢治が最終的に目指した自我理想として「デクノボー」をあげている。ただ、賢治が「デクノボー」になる前に力尽きてしまったので、アイデンティティの確立はなし得なかったということになるだろう。

多くの研究者が指摘するように、賢治は「自分は何者か」「自分の目指す道は何か」を求め続け、多角的な才能を発揮して様々なことに取り組んだために、彼のアイデンティティを一言で表すことは難しい。賢治が臨終の間際まで新たな道を探っていたことを考えると、賢治は生涯を通してアイデンティティを模索し続けたと捉えることができる。筆者は人生の各段階で賢治はアイデンティティの確立を模索したが、様々な理由で挫折してしまっただと考えている。賢治の生涯を辿りながら、アイデンティティを中心に賢治の精神的な発達や心性について分析したい。

## 5. 賢治の生涯—基盤としての子ども時代

### (1) 誕生

賢治は明治 29 (1896) 年 8 月に岩手県にて父政次郎、母イチの長男として誕生した。出生時には、父は商用で関西本面へ旅行中であつた。佐藤は「父の政次郎さんは、お産前から関西の方に商用で出張していて、お産も知らずに三十一日には大阪で洪水にあい、それから丸亀まで旅をのぼして、九月の中旬頃帰郷し、鍛冶町でわが子に初対面をしましたが、父が留守だったので、政次郎さんの弟の治三郎さんが叔父としてその子に命名してくれたのです」<sup>31)</sup>と述べている。

父が賢治の出生時に仕事のために不在で、賢治の誕生も知らなかったこと、父ではなく叔父が長男の命名をしたことから、父が長男の誕生をどのように捉えていたかが伺える。子の誕生を待ち望んでいたのなら、商用の時期を変更したり、大阪から帰郷するという選択肢もあったのではないだろうか。あるいは商用で出産の時期に戻れないことが解っていたのなら、予め名前を考えておくことも可能であつたろう。政次郎は子どもの誕生とそれに伴い、自分が父親になることを無意識のうちに避けていたのではないだろうか。また、叔父の名前の一字をもらって命名された長男に対して、父はどのような感情を抱いたのだろうか。父と賢治との複雑な関係は、賢治の誕生時に暗示されているかのようである。

### (2) 幼児期

宮澤家は浄土真宗を信仰しており、父は熱心な仏教徒グループに属し、夏期仏教講習会を運営していた。日常生活でも、「キン（祖母）はのべつに称名し、政次郎の姉ヤギは賢治に『正信偈』や『白骨の御文章』を子守唄とした。朝夕のお勤行は欠かさない」<sup>32)</sup>とされている。賢治の仏教信仰はこの家庭環境から生じたことは理解に難くない。

また、母イチは幼児を寝かしつけながら「ひとというものは、ひとのために何かしてあげるために生まれてきたのす」といつも語り聞かせたという<sup>33)</sup>。母の言葉は、賢治の生き方に大きく影響したと考えられる。森は「後年この母が、『どうして賢さんは、あんたに、ひとのことばかりして、自分のことは、さっぱりしないひとになったベス』と深いなげきをこめて言い言いた。『なにをして、そんなになつたって言ったってお母さんが、そう言って育てたのを忘れたのすか』と、清六さんは、母の言葉に答え、二人で笑ってしまうのであった」<sup>34)</sup>と述べている。

母親の愛情は子どもを無条件に受け入れるものである。しかし、母の教えは、人の役に立てば、人として認められるが、役に立たなければその存在が認められないのである。いわば、条件付きの愛情である。それゆえに、賢治は母に見捨てられないよう、自分を犠牲にしてまでも、人の役に立ち、母の愛情を得ようとしたのではないだろうか。

矢幡は賢治は「献身」や「自己犠牲」は、「愛されない」という痛ましい自己規定の上に形成されたと考え、「賢治は『あるがままの自分は決して人から愛されない。ただ、他者にとって役に立つことによってしか受け入れられない』と感じつづけていた」<sup>35)</sup>と述べている。矢幡はその原因を賢治の父に求めているが、母からのメッセージも大きな影響を与えたと考えられる。

幼児期の賢治について、幼馴染の本正信蔵は「宮澤君は長男なので、ご両親にかわいがられ、行儀が悪くなるという、よその子ともあまり遊ばせてもらえなかったようです。あまり物をしゃべらず、よく笑う子でもなく、庭の梅の木のブランコに乗ったり、一人でなわとびなどしていました。泣き出すと手に負えないんです」<sup>36)</sup>と回想している。賢治は両親に可愛がられてはいたが、友達関係までも介入する程、厳しくコントロールされていたことが伺える。一方で賢治が泣いて要求すれば、要求を受け入れてしまう甘い面も両親にあったのではないだろうか。賢治は泣けば、自分の要求が通ることを学習したから、「泣き出すと手に負えない」子どもになったと考えられる。

賢治よりも1年年長の本正が小学校入学する時、「賢治も一緒に入学できると思っていたらしく、学校へ行くといつて泣きやまなかったそうです。仕方なくお父

さんの政次郎さんが、本屋をしていた私の家に来て、教科書などを一通り買って与えたんですが、なかなかきげんがなおらなかった」<sup>37)</sup>という本正の回想もある。父は賢治に小学校に上がるのは来年であることを言い聞かせて納得させたり、我慢させたりすることができずに、教科書を買って与えることで問題を解決しようとした。教科書を買ってもらっても、賢治の機嫌が直らなかつたのは、自分の気持ちを両親が解ってくれないことに不満を抱いたのではないだろうか。両親は賢治に対して愛情はあったのだろうが、どこかですれ違ってしまったと考えられる。

その年、賢治は赤痢に罹り、花巻町本城の隔離病舎に入った。看病にあたった父も感染し、そのために胃腸が弱くなり、これ以降、毎年春の彼岸から秋の彼岸までは、お粥でないと腹具合が悪かったという<sup>38)</sup>。賢治が中学卒業時にも、賢治の入院に父が付き添い、感染するというパターンはが生じている。

幼い子どもが入院した場合、母が付き添うのが一般的だろうが、賢治には父が付き添ったし、父の感染後は、祖母の妹ヤソが看病したと言う。当時、母は幼い妹を抱えており、店の手伝いが忙しかったという事情があったようだ。しかし、母に看病してもらえなかつた賢治は、寂しさや心細さを感じたのではないだろうか。高山秀三は「生来敏感すぎる子供だった賢治が母親の病弱に大きな不安を覚え、弟妹の世話に忙殺されている母親の様子に自分の存在が忘れられているという疎外感を抱いたことは想像にかたくない。たしかに賢治の生涯にわたる感情の不安定な根本がこの時期に形成された可能性は排除できないのである」<sup>39)</sup>と述べている。母の存在の希薄さは、賢治に疎外感と不安を与えたと考えられる。

八幡は賢治の父が母性的な愛情を示したと述べているが、このエピソードも父が母親の役割を果たしたことを示すものである。父が母性的愛情を示せば、父親的な役割を充分果たすことができなかつたと考えられる。また、父の感染は賢治に罪悪感を抱かせると同時に、父が子どもを守ってくれないという不信感や寂しさを感じさせたのではないだろうか。

この家族システムの中で、賢治は子どもを守り育てる母性的な愛情に包み込まれる経験も乏しく、一方、物事を分割し、善悪を区別したり、秩序や規範を示す厳しい父性的な導きも不十分だったのではないだろうか。幼児期の賢治は親に愛されているという思いを十分に持てず、親に素直に甘えることもできなかつたと考えられる。

### (3) 児童期

#### ①大人びた子ども

小学校に入学した賢治は、品行方正で成績も良い子どもであったという。賢治の従兄弟の関は、「にこやかな面持ちで言葉は大人のようにていねいであったことはとりわけ記憶に残っております。親類間でも賢治といえさかしいのでたいへん評判でした」<sup>40)</sup>と小学生の頃の賢治の印象を語っている。賢治の優秀さを示すものであるが、彼が子どもらしくなかったことをも示唆している。矢幡はこの回想について「賢治は、甘えることを許されなかった。早い時期から、大人であることを要求された」<sup>41)</sup>と述べている。

入学初日、「学校へ行く途中で、大きな犬が歩いていて怖かった。夜そのことを思い出し、明日もまたあの犬がいるのではないかと不安になり、中々眠れぬので庭に出て歩きまわり、一二時頃ようやく気を落ち着けてから眠った」<sup>42)</sup>というエピソードが残っている。子どもは不安や恐怖心に怯える時こそ、親を求め、親に抱きしめられたり、慰められたりすることで安心を得る。しかし、まだ、幼い賢治は夜間、犬への恐怖心や不安に1人で耐えなければならなかったのである。賢治は親から安心を得ることもできず、良い子を強いられて大人びた言動を取っていたと考えられる。

## ②ギャングエイジ

佐藤は「仲間の悪い感化でしょう。やさしかった賢治さんも五、六級になると急におそろしくきかない子供になって餓鬼大将になり、時に部下を引き連れて、他の学校まで遠征に出かけたりするようになりました」<sup>43)</sup>と、高学年になってからの賢治の変化を述べている。前思春期になれば、子どももそれなりに自我が芽生えてくるし、親とは違う価値観や考え方も徐々に獲得していく。いつまでも親の支配を受けて親の言いなりになるとは限らない。それに伴い、いわゆるギャングエイジと呼ばれるように仲間との関係が重要になってくる。賢治も親の支配の届かぬ世界では、仲間と徒党を組んで遊んだり、いたづらをしたのである。

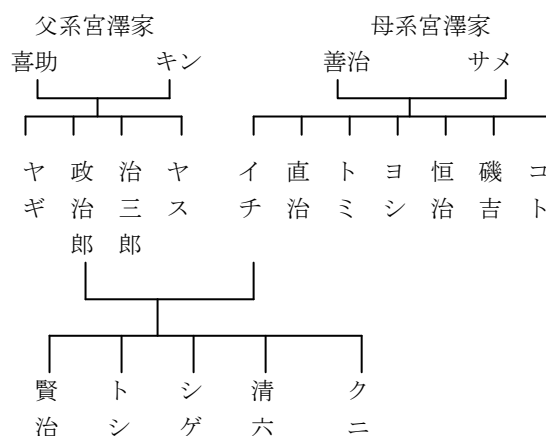
小学校4年の時に、担任が「立志」と題して生徒の将来の希望を書かせたが、賢治は「私はお父さんの後をついで、立派な質屋の商人になります」と書いたという<sup>44)</sup>。賢治は父親に同一化し、父親のようになりたいと思っていたのだろう。

しかし、佐藤は、賢治が5年生の時、「どこの親たちも同じですが、賢治さんの父親も、賢治を偉くしようと思っっている鼓舞激励します。ところで父親がある日『お前は何になる?』と聞きますと、賢治さんはあっさり『むやみに偉くならなくてもいい』と答えたので、父親は顔を真っ赤にして『そんな意気地のないことでどうする』と叱りました。そしてたたみかけて『それでは何になる?』と言われると、『寒い時には

鍛冶屋になればええし、暑い時には馬車屋の別当になればええ』と答えました。父親はカンカンに怒ってしまいましたが、賢治さんは一向平気です」<sup>45)</sup>と述べている。子どもの頃から、賢治は立身出世や金持ちになることに関心がなかったのだろうか。むしろ、偉くしようと鼓舞激励する父に対する反発があったのではないだろうか。作文のように父親には質屋の跡を継ぐと言わなかったことも、賢治の反抗心の現われであったと考えられる。賢治は自分に期待する父親を冷ややかな目で見ていたようだ。

児童期になった賢治は、仲間との関係の中で成長して親とある程度距離を置くようになったと捉えることができる。

【図1 宮澤家 系図】



## 6. 自我の危機と回復及びアイデンティティの模索

### (1) 中学時代の反抗

#### ①家庭からの解放

盛岡中学に入学した賢治は自宅から離れて寮生活を始める。その頃の賢治の様子について、同級生の沢田藤一郎は、「奥山君というよくふざける男がおり、よくそれと机を並べて二人でふざけていた」<sup>46)</sup>と述べている。また、後輩の瀬川政雄は、賢治が「腰に差した矢立から毛筆を取り出してはだれ彼の見さかいなく教科書やノードのうらなどに落書きをする癖があったので、よくクラス中の物議をかました」<sup>47)</sup>と述べている。賢治はいたづら好きの少年だったようだ。

賢治が2年の時、友人の藤原健次郎に宛てた手紙には、「僕は先頃一週間ばかり大沢に行った。大事件は時に起こったね。どうも僕はいたづらしすぎて困るんだ」と旅行先でのいたづらを報告し、「家の人と行かないとこれだからいゝ」(書簡0a)と書いている。米田は「最初の手紙に見るこの少年は、規則を破ることに喜びを見出し、まず家からの自由を求めたのである」<sup>48)</sup>と述べている。賢治は父親の監視から離れ、友人とふざけ

たり、いたづらを楽しんだりして、自由を満喫していたようだ。

学業の面では賢治の成績は芳しくなかった。同級生の安部孝は「いったい精神年齢的にはうんと早熟だった彼は、三年頃から少しずつぐれだして、四年五年の頃は、学科の勉強にはさっぱり身がはいらなくなり、そのために成績がぐんと落ちてしまった」<sup>49)</sup>と述べている。また、宮澤嘉助は「学校の教科書などは殆ど勉強しなかった。無心に勉強してるなど思っただけで見ると私などには難しくて到底理解出来そうもない哲学書だった」<sup>50)</sup>と述べ、藤原文三は「とにかく変っていて汚れ物はかまわず押入につっこみ、教科書を見ず、『中央公論』の読者で、エマーソンの哲学書を読んでいたのに驚いた」<sup>51)</sup>と言う。学業よりも自分の好きな本を読み、身の回りのことには無頓着であり、変人として見られていたことが伺える。阿部の回想では、賢治は15歳(中学3年生)の時に変化を示している。短歌の制作が始まったのも、この年からと言われており、この時期に児童期か思春期への移行が始まったと考えられる。

成績の下降について、佐藤は「五年生になって成績が非常に落ちたのは、一つには岩手山に対する非常な憧憬のため、登山の回数が多くなったこと、二つには暁鳥敏氏との直接間接の接触によって、仏教に目覚めていったこと、三つには思索と詩に熱中し、雑然たる短文と歌とをもって埋められた日記の日課に、極端に傾倒したことなどに因をおくとされており」<sup>52)</sup>と学業以外のものへの関心が高まり、それに熱中したことをあげている。

賢治は思春期に入り、人生についてより深く考え、思索にふけるようになったのだろう。そして、学業よりも思索や趣味に比重を置いたために、学業がおろそかになったと考えられる。自分の心の探求や趣味の世界に没頭すると、我を忘れてしまうのが、賢治の特徴であると考えられる。

## ②教師への反抗

賢治は教師に対して失望していたようである。嘉助は「よく教師に反抗した。というより反撥したといったほうが適切かもしれない。教師に対してある種の不満というか、或る物足りなさを感じていたらしい」<sup>53)</sup>と回想している。小原武一の回想によると、賢治は4年の時雄弁会で「らしく」という題で演説し、「生徒は生徒らしくしなければいけないが先生も先生らしくしなければいけない」と述べたと言う<sup>54)</sup>。賢治は教師を尊敬できなかったのはないか。その失望感も学業への興味を低下させた一因だったかもしれない。

賢治の反抗は特に舎監に向けられた。阿部によると

「運動神経のにぶさにかけては、いつもクラスの筆頭であった彼は、軍人あがりの体操教師のかっこうのなぶり物であった」<sup>55)</sup>と言う。この体操教師が3年までの舎監であった。彼は賢治が入学の時に読んだ短歌にも登場する。

父よ父よなどで舎監の前にして  
かのとき銀の時計を捲きし (歌稿B01)

この短歌は舎監の前で銀の時計を見せびらかす父の俗物性への賢治の抗議と解釈できる。山内は「父のいかにも資産家風の不遜さに恥ずかしさと反感を感じたらしい。自意識とともに、父へのアンビバレントな感情の芽生えであろう」<sup>56)</sup>と解釈している。しかし、小川は歌稿の中扉の裏の文語詩から、その時、舎監が笑ったことを指摘し、「父の銀時計を見かけて笑った舎監に対する賢治の抗議、もだえ」<sup>57)</sup>と解釈している。この舎監に対する反感は根深いものがあつたのではないだろうか。

賢治が4年生になると、舎監が交代した。新舎監に寮生がいたづらをしかけるという舎監排斥が起き、その黒幕参謀は賢治であったと言う。排斥の理由は明白ではなく、一種のうさ晴らし、元気澁刺の表れと言われている。しかし、前舎監への鬱憤した気持が新しい舎監に向けたのではないだろうか。前舎監には反抗できなかったために、防衛機制で置き換えにより、反抗の対象として新しい舎監を選択したのではないだろうか。

青年期前期には、親を初めとして大人の見方が変化する。児童期には大人に依存することが多く、大人は太刀打ちできない偉大な存在として捉えられる。しかし、青年期に入り、身体的にも精神的にも大人に近く中で、相対的に大人の価値は引き下げられる。また、親から自立したいという気持も芽生え、依存して甘えたい気持と自立したい気持との間で揺れ動き、第二次反抗期が生じる。賢治は身近にいる舎監に反抗の矛先を向けたと考えられる。

## ②父との関係

中学時代、賢治は父に対して、反抗らしい反抗をしていない。4年生の時の手紙には、「多分この手紙を御覧候はゞ近頃ずいぶん生意気になれりと仰せられ候はん。又多分は小生の今年の三月頃より文学的なる書を求め可成大きな顔をして歌など作るを御とがめの事と存じ候。又そろそろ父上には小生の主義などの危き方に行かぬやう危険思想などはいだかぬやうとご心配のこと、存じ申し候。ご心配御無用に候。小生はすでに道を得候。歎異抄の第一頁を以て小生の全信仰と致し

候（中略）仏の御前には命をも落とすべき準備充分に候（中略）然し私の身体は仏様の与へられた身体にて候 同時に君の身体にて候。社会の身体にて候 左様に無謀なることは致（不明）れば充分御安心下され」（書簡6）とある。賢治は生意気になったり、文学に傾倒して危険な道に進むのではないかという父の危惧を察して、否定している。

青年期になり、自我が育ってきた賢治にとって、父の監視や支配は疎ましいものだったろう。一般的には青年は親の監視や支配から徐々に自立していき、自分の考えや判断で自分の行動を決めるようになるし、親と意見が違えば、自分の意見を主張する。それが、第二次反抗期として表れる。しかし、賢治は自分の好きなことをしても、父の正しい道から外れることはない。父を安心させようとし、自分の意見を主張したり、父に反対意見を述べたりしていない。

それでも、「すでに道を得候」と、いきなり高い位置へと飛躍している点は、自己愛的なうぬぼれであり、自分が父よりも優れていると父に誇示しているかのようである。そして、仏、君、社会の身体と言っているが、米田は「父から与えられた身体と言わぬことで、父と同格だと主張していた」<sup>58)</sup>と解釈している。賢治は父よりも優れた者の力を借りて、父に対抗しようとしているのではないか。賢治は一人で父に立ち向かうことができなかつたのである。

その背景には、父から金銭的な援助を受けているという賢治の負い目もあった。賢治は父宛に頻繁に手紙を出し、小遣いの明細を報告している。商人としての金銭感覚を身につけさせようと会計報告をさせたのだろうが、賢治は小遣いの不足を訴えては、金銭の無心をしている。賢治と父は金銭に関わるやり取りでつながっているかのようである。父に逆らったり、怒らせたりしたら、金銭を貰うわけにはいなくなるという配慮が賢治にはあったのではないか。依存しながらの反抗であるが、父は生意気だと思いつつも、賢治の要求を受け入れたと思われるし、賢治も物やお金を与えることが、父の愛情の形と受け取っていたのではないだろうか。

### ③視線恐怖

成績低下について山内は「上級学校への進学が認められていなかった賢治の学習意欲の減退」<sup>59)</sup>という見方をしている。佐藤も、家人の間に賢治は「あの頃は中学校だけで終わらされるのかと思ったし、そんなら勉強したってつまらないと思って、ただ義務的にやっていたのす」<sup>60)</sup>と答えたと言っている。長男である賢治が家業を継ぐことは既定のことであり、学問は必要ないと家族は考えていた。希望する上級学校への進学

を許されず、賢治は自暴自棄になって学業を放棄したとも考えられる。

福島は賢治を周期性性格と診断し、生涯のあいだに、躁とうつの気分の波を体験したと捉えている。賢治の成績の低下は、「賢治はかなり前から『脳が悪い』という感じに悩まされていた」<sup>61)</sup>と述べている。つまり、うつの特徴の前駆症状のために、勉強ができなかつたと考えている。しかし、賢治は勉強以外のことには熱中している。前駆症状であるならば、全般的な活動が低下するのではないだろうか。家業を継ぐために、自由に進路を選択することが許されない閉塞感の中で、抑うつ的な状態に陥つたのではないだろうか。この時期に賢治が作った短歌には、精神的な危機が伺える。

褐色のひとみの奥に何やらん

悪しきをひそめてわれを見る牛（歌稿A35）

ブリキ鐘がはら〔だゝ〕しげにわれをにらむ

つめたき冬の夕暮れのこと（歌稿A59）

西ぞらのきんの一つ目うらめしく

われをながめてつとしづむなり（歌稿A69）

うしろよりにらむものありうしろより

われらをにらむ青きものあり（歌稿A79）

どの句にも自分を見つめる存在が詠まれている。しかも、彼を見つめるものは「牛」「ブリキ鐘」「きんの一つ目」「青きもの」等、人間以外の存在である。そして、その視線は、「悪しきをひそめて」いたり、「恨めしくながめたり」「睨んだり」と、あたかも賢治を非難するかのようなものであり、その視線を過剰に意識していることが伺える。青年期には自意識が高まり、他人の視線、すなわち評価を気にする傾向が見られる。視線恐怖の好発年齢も青年期であり、多くは成人になると、軽減する。賢治の場合、人間以外の視線を被害的に感じており、敏感さや不安が伺える。福島はこの前後の短歌から「当時の賢治にはまなざし（注察妄想）や妄想気分ともいふべき幻覚意識が存在した」<sup>62)</sup>と考察している。いつも何かから見られているという感覚に脅かされていれば、落ち着いて勉強ができなかつたであろう。

中学時代、賢治は進学の希望がかなわない中で、学業への興味を失い、教師への反抗やいたずらでうさ晴らしをしていたようだ。また、宗教や哲学への興味や短歌制作を通して、自らの内面を探求するようになった。一方、父親への反抗は抑圧される傾向にあった。家業への嫌悪と先の見えない不安の中で、賢治は不安



定になり、他者からの視線にさらされるという精神的な危機を経験したと考えられる。

(2) 中学卒業後の危機—家業をめぐる葛藤

①アイデンティティの拡散

中学卒業後、賢治は岩手病院に入院して肥厚性鼻炎の手術を受けるが、高熱が続き、擬似チフスの疑いもたれる。そして、付き添った父は、腹部に腫れ物ができ治療を受ける。その時の詠んだ短歌は病院の歌とされている。その中に次のような歌がある。

赤きぼろきれは今日ものどにぶらさがり  
かなしきいさかひを父と又す (歌稿A115)

賢治は父と言い争ったようだが、それを「かなしきいさかひ」ととらえているのは、病気を感染させたという父への負い目、罪悪感があったのだろう。また、病に苦しみ、将来に希望も持たず、思うようにならない苛立ちを八つ当たりのように父にぶつけてしまったとも考えられる。

その頃の短歌には身体、特に頭の違和感を詠ったものがある。

わがあたまとときどきわれにきちがひの  
つめたき天を見することもあり (歌稿A134)

なにの為に物を食ふらんそらは熱病  
馬はほふられわれは脳病 (歌稿A162)

わなゝきのあたまのなかに白き空  
うごかずうごかずさみだれに入る (歌稿A164)

ぼんやりと脳もからだもうす白く  
消え行くことの近くあるらし (歌稿A165)

あかまなこふしいと多きいきものが  
藻とむらがりて脳をはねあるく (歌稿A166)

物はみなさかだちをせよそらはかく曇りて  
われの脳をいためる (歌稿A167)

賢治の歌から、脳やからだが消えていく感覚や気味の悪い多数の生き物が脳を跳ね歩いたり、脳をいためるという幻覚のような体験があったことが伺える。福島は歌稿A134の短歌について「賢治がときどき日常の世界とは別の、＜非日常の世界＞を知覚していたことを示唆するもので、明らかに幻覚体験を歌ったものと思われる」と述べている。また、歌稿A166について「体感幻覚とかセネストパチーと呼ばれる幻覚

であることはあきらかである」<sup>63)</sup>と述べ、賢治に統合失調症者やてんかん患者や躁うつ病者と同様な体験があったと指摘している。

賢治が精神的に追い詰められた理由として、居場所がないという問題が考えられる。中学在学中は中学生というアイデンティティがあったが、卒業と同時に失ってしまい、何者でもないという状態にある。しかも、進学も仕事も決まっておらず、社会との接点も失っている。次のような短歌に賢治の気持ちが表れている。

学校の志望はすてぬ木々の青  
弱りたる目にしみるころかな (歌稿A86)  
友だちの入学試験近からん  
われはやみたれば小さきユリ堀る (歌稿A145)

職業なきをまことかなしく  
墓山の麦の騒ぎをじつと聞きみたれ (歌稿A150)

われもまた日雇となりて桑つまん  
稼がばあたま癒えんとも知れず (歌稿A177)

上級学校への志望がかなわないこと、職がないことの悲しさが詠まれているが、その背景には何者でもないことの不安がある。青年期にはアイデンティティを模索し、確立することが大きな課題となる。模索の間はモラトリアムとして、社会的責任や義務を猶予される。中学生の間は、賢治も周囲もモラトリアム状態にあることを容認していただろう。しかし、卒業後は、進路の選択が大きな課題となる。何者でもない状態は不安定であり、自分を見失うことにもつながる。長男である賢治は家業を継ぐことが既定路線となっていたが、家業を嫌悪しており、傾倒することができなかった。賢治は将来の見通しがつかない八方塞がりの中にいたのである。Eriksonは「一般に若い人々を混乱させるのは、そもそも職業的同一性を決めることが不可能なことである」<sup>64)</sup>と述べている。

このような点から、賢治の精神的危機はアイデンティティ拡散の状態に陥ったためではないかと考えられる。アイデンティティ拡散は、進路や職業を選択したり、決断しなければならぬ状況に立たされた時に、自らの責任で決定できず、回避しようとすることを契機に起きる。急速に同一性の混乱と退行を引き起こし、自分がかかわっている状況に適切な対応ができなくなり、ますます自分を見失っていくことになる。さらに、変化する状況の中で私が私自身であり続けることができなくなり、自己像が断片化し、心の統合的な中心性を喪失してしまう。同一性の混乱と喪失が極度に達し、自我境界がくずれ去ったとき、世界没落体験のような

状態に陥ることがある<sup>65)</sup>。賢治も職業選択に迫られ、危機的状況に陥ったと考えられる。

## ②失恋体験

賢治は入院中に看護婦に恋をし、結婚を考えるが、若すぎると親から反対される。この恋愛が賢治の一方的な片思いであったとする説と相思相愛だったという説とがあるが、賢治の初恋は成就することなく終わってしまった。

青年期には身体の成熟、性への目覚めの中で異性や恋愛への関心が高まる。恋愛は今までの世界を一変させる程、大きな衝撃として体験される。それによって、親からの心理的距離感が広がり、自立へと押し進める役割を持つ。賢治は八方塞ぎの中で結婚により、一気に自立することを望んだのではないだろうか。親に反対され、望みが絶たれたことは、さらなる打撃を賢治に与えただろう。

現代とは異なり、自由な恋愛は許容されず、親の決めた相手と結婚するのが一般的であった時代である。親の反対を押し切って結婚した場合、民法では戸籍から排除されることもあった。失恋とともに親の力が偉大なこと、その影響力から逃れられないことも賢治を苦しめたのではないだろうか。

退院した賢治は憂鬱な日常の中で看護婦に焦れたり、家業の店番、母の養蚕の手伝い等をしていた。家業への嫌悪とともにますます進学の念が強くなり、ノイローゼ状態となり、父も賢治の前途を憂え、家業そのものの転向も考慮し、盛岡高等農林学校の受験を許可した。その後、賢治は猛勉強をし、高等農林に首席で合格する。

賢治は職業の選択をしなければならない状況を回避しようとしたために、アイデンティティ拡散による精神的危機に陥った。しかし、進学により責任や義務を猶予することのできるモラトリアム期間を与えられ、結論を先延ばしすることができるようになったために、精神状態の危機から脱却することができ、精神的な安定がもたらされたと考えられる。

## (3) 盛岡高等農林学校時代一生き方の模索

### ①性役割について

19歳で盛岡高農に入学した賢治は、寮の同室の高橋秀松と親しくなった。秀松は「妹敏子さんが目白の女子大から一週間に必ず一度の消息をよこすと私の目の前で開き読み合う。ここに三人の兄妹が出来上がった」<sup>66)</sup>と述べているように、親密な付き合いがあったと考えられる。賢治も秀松には本音を語ることができたのだろう。夏休み、「私の町は汚い町であります。私の家も亦その中の一分子でありますから尤もなことになります」(書簡9)と書き送っている。賢治が故郷を嫌い、

宮澤家を批判的に見ていたことが伺える。

3月に京都・奈良方面へ修学旅行に出かけた賢治は、高松宛の書簡で「この旅行の終わりの頃のたよりなさは淋しさと云つたら仕方ありませんでした。(略)東京の空も白く仙台のそらも白くなつかしいアンモン介や月長石やの中にあつたし胸は踊らず旅勞れに鋭くなった神経には何を見てもはたはたとゆらめいて涙ぐまれました。(略)仙台の停車場で私は三時間半分睡り半分泣いてみました。宅へ帰つてやうやう雪のひかりに平常になつたやうです」(書簡15)と、賢治が感傷的になっている様子を伝えている。青年期は感傷に浸りやすいが、何を見ても涙ぐんだり、半分睡り、半分泣いている姿は、男性的とは言えず、女性的であると感ぜられる。高等農林の後輩、山中泰助は「見るからに温厚な方で東北人特有の如何にも親切な人でどちらかと云えば女性的な感じの人」<sup>67)</sup>と賢治を評している。また、後輩の末永延寿は盲腸で入院した時、「左程親しい間柄でもないのに宮澤氏は私の病室を見舞つて呉れ、慰め励まして呉れるという、真の兄のような友情の持ち主で親切味の豊かな人であった」<sup>68)</sup>と述べている。やさしく他者に配慮する賢治は、女性的であり、母性的ですらあったと考えられる。

青年期は自分の性別を受け入れ、性役割を確立していくことが求められる。一般的には、青年は周囲の大人、特に同性の親をモデルとして性役割同一性を確立していく。賢治の父は、前述したように母性的な愛情を示し、父性性に欠ける面があった。賢治が父をモデルとして男性性を確立しようとするれば、温厚さ、優しさ、親切というようなどちらかと言えば、女性的な男性になっていったであろう。父に同一化したからこそ、父のように母性的な細やかな愛情を後輩に示すことになったと考えられる。

### ②親友との出会い

2年生になり、賢治は後輩の保阪嘉内と親しくなる。2人は趣味の文学で共鳴しあい、友情を深めていった。3年生の時には他の仲間とともに、同人誌『アザリア』を創刊し、賢治は短歌や短編を発表した。盛岡中学時代の友人阿部は「謙遜で内気な彼は、めったに校友会雑誌などへも投稿したことはなかった」<sup>69)</sup>と言い、中学校時代短歌を作っていたことも知らなかったと回想している。賢治は作品を公表することに恥ずかしさやためらいがあり、また、自信もなかったのではないか。そのような賢治が始めて自分の作品を公表したのである。この変化には保阪の存在が大きかったと考えられる。保阪が賢治の作品を認めてくれたから、公表することができたのではないだろうか。菅原は「嘉内出現は賢治の心を大きく捉えた。新鮮で見知らぬ文化の匂

いを持った友への接近が賢治を少しずつ変えていったのだ。それはまず自分だけの短歌創作が、仲間を得て合評しあう文芸活動へと発展したことをみれば察せられる」<sup>70)</sup>と述べている。

青年期には同世代の同性の親友の存在が重要となる。親から分離する過程で不安を支えたり、悩みを共有したり、お互いに自我理想として影響し合うことで、青年の成長を促進することになる。賢治も親友である嘉内に支えられ、一步を踏み出すことができたのだろう。そして、文学を通してお互い切磋琢磨していったのではないだろうか。

### ③東京への憧憬

2年生の夏休み、賢治は祖父と母が病氣療養中にもかかわらず、独逸語講習を受講するために東京へ出向いた。高橋宛の手紙には「私は母と一緒に温泉でも行けば母も心丈夫に思ふし、暑い所に出て行つてどうかの心配もないしそれに加ふるに祖父の機嫌が好いし非常に明るくなるのです。(中略)そして母はよくなって床の上に座れるやうになりました。とにかく出て来たのです」(書簡 17)とある。母の病氣や家族の思惑を分かった上で、それを振り切つての上京であった。それ程、上京したいという思いが強かつたのであろう。

後年、トシが病氣になつたと時と比較すると、賢治の母に対する態度は冷たい。賢治は入院したトシに付き添つて看病しているし、トシの病氣を知ると、家出中にもかかわらず、家に戻っている。しかし、母の場合、まだ病氣療養中であるにもかかわらず、自分の勉強のために上京している。前述したように、賢治が入院した時には父が付き添い、母は看病をしていない。賢治は母を看病することに抵抗があり、勉強を理由に看病を回避したのではないだろうか。このエピソードからも、賢治が母に対して複雑な思いを抱いていたことが伺える。

青年が自立していくためには、母からの心理的な離乳が必要である。それは、時には暴力的であつたり、破壊的であつたりする場合もある。賢治が病氣の母を置いて上京するという行動は、心理的な離乳のために必要だったのかもしれない。しかし、ためらいもあつたに違いない。「汽車の中で恐らくは他の土方の監督やら踏切を過ぎる音等をまどろみの中で母や妹の声に聞いたでせう」(書簡 17)と書いている。病氣の母を置いて出てきた後ろめたさが罪悪感を生じさせ、汽車の中で母や妹の声が聞こえるような気がしたのであろう。

それ程、賢治は東京に憧れていた。親友の嘉内宛ての手紙(書簡 19)の中の短歌には、東京への思いが伺える。

するが台雨に錆たるブロンズの

円屋根に立つ朝のよるこび (歌稿 A133)

霧雨のニコライ堂の屋根ばかり

なつかしきものはまたとあらざり (歌稿 A134)

かくてわれ東京の底に澱めりと

つくづく思へな空のゆかしさ (歌稿 A137)

いずれも東京にいる喜びを詠っている。翌年、家の用事で上京した時には、保阪宛の手紙に「東京へ来ると神経が鋭くなつて何を見てもはつとなみだぐみまず」(書簡 28)と書いている。

大正時代、賢治だけではなく、モダンな都市、東京への憧憬が、地方の若者には強かつたようだ。長山靖生は「上京学生にとって、帝都は何よりも、消費と祝祭の空間だった。(中略)毎日が祭りのように見える。この街でふつうに生きることは、地方人にとっては躁状態で生きるということに他ならない」<sup>71)</sup>と述べている。刺激の乏しい地方での生活とは比べようもない東京の都市空間で、賢治は様々な刺激を受けて神経過敏になつたのだろう。

後述するが、賢治は東京で暮らして勉強したり、仕事をしたいと望んでいた。賢治が「私の町は汚い町であります」(書簡 9)と書いているように、故郷花巻や故郷での退屈で窮屈な生活への嫌悪感があつたのだろうし、故郷に埋もれたくないという思いもあつたと考えられる。

### ④職業の模索

妹トシは賢治が盛岡高農へ入学した年に、日本女子大学に進学した。2人は頻繁に手紙のやり取りをし、トシが賢治に悩みを相談することもあつたようだ。トシからの手紙は残されていないが、賢治は「ソレカラ色々利己的ダノト自分デ辯解シテ居ラレル様デスガソナ気兼ネハアマリセンデ好イデセウ 兎二角ニ何ト云ツテモ結局ハ今ニミンナー人前ニ成ル事ダカラツマラヌ心配ハ要ラヌ事ト思ヒマス」(書簡 11)とトシに書き送っている。この手紙で、賢治は「一人前になる」ことは当然のことと考え、一人前になることに悩むことは「つまらない心配」であると考えていたことが読み取れる。中学卒業後、進路について悩み、ノイローゼ状態になつたのに、賢治は「一人前になる」ことを簡単だと思つていたのであろうか。将来に対して安易に考えていたとしか思えない。

賢治が2年生の時には「私はまあ、大抵学校を出てからの仕事も見当もつきました一則ち木材の乾溜、製油、製薬の様な就れと云へば工業の様な仕事で充分自信もあり又趣味もあることです」(書簡 30)と、トシ

に将来の方針を書いている。賢治は自信满满である。しかし、賢治は盛岡高農で農芸化学を学んでおり、工業の勉強をした訳ではない。見当がついたとはいえ、3種類の仕事をあげ、しかも「工業の様な仕事」と曖昧であり、具体策もなく実現できるかどうか危ういものである。自信となる根拠があるとは思われず、現実から遊離している机上の考えと言える。20歳の若者として、夢や希望を持ち、それを実現するために努力することは望ましいことではあるが、賢治は現実を十分見つめることなく、将来を夢見ていたと考えられる。

高等農林に在学するモラトリアム期間に、賢治は勉学に励み、文学を通して親友ができたり、さまざまな模索を通して自己を確立していったと考えられる。しかし、職業についての模索は十分とは言えず、現実的な将来の方針を確立することができなかつたと捉えることができる。

#### (4) 卒業後の進路をめぐる父との対立

##### ① 関教授との関係

卒業を前に賢治は主任教授の関豊太郎から、研究生として学校に残るよう打診を受ける。関は助手として土性・地質調査に当たらせ、実験指導補助の身分を保証し、将来は助教授に推す用意を持っていたと言う。関は気難しかったが、賢治のことは気に入っており、同級生の西村清助は「変人の関教授が目の中に入れても痛くないと云う程賢治をかわいがっていたようである」<sup>72)</sup>と述べている。大谷良之によれば、関の土壌学の試験を賢治は英語で答案を書き、関が教室で満点をやったと言ったというエピソードも残っている<sup>73)</sup>。また、卒業論文も関の指導を受けたが、「先生につくものがないから僕がついた」<sup>74)</sup>と賢治はもらしていた。

賢治は自分を認めてくれる関に対して、それに応える努力はしたり、配慮したりしたようであるが、関が見込んで期待したほど、学問への興味や関心があったわけではなかった。このことから、賢治の進学希望は、勉強したいというよりも、家業を継ぐことからの回避という意味が強かったことが伺える。

##### ② 実業と宗教をめぐる葛藤

学問の道へ進むよりも、トシ宛の手紙にあったように、実業の道を志していたので、賢治は研究生になるつもりはなかった。

進路をめぐる賢治は父と対立することになる。父は第一次世界大戦のさなかでもあり、賢治が徴兵されることを恐れ、徴兵が延期される研究生として学校に残ることを薦めた。賢治は「研究科には残り候とも土性の調査のみにては将来実業に入る為には殆んど仕方なく農場、開墾等ならば兎に角差当たり化学工業的方

面に向ふには全く別方面の事に有之候」(書簡 43)と父の勧めに抵抗を示した。賢治は具体的には飴製造業、沃度製造或は海草灰の製造、木材乾溜乃至は炭焼業を目論んでおり、研究生として勉強するメリットを見出せないし、徴兵検査の延期も望まないと父に訴えた。ところが、次の日の手紙には、法華經の行人として学び、働いて自活しながら布教をするという生き方を望むと書いたり、小さな工場で独身のまま仕事と勉強がしたいと書いたり、「本日も究めて不整頓ながら色々御願申し上げ候」(書簡 44)と書いている。このように方針が定まらないのは、賢治自身、揺れ動いており、将来像を明確に描くことができずに混乱していたからであろう。

賢治が法華經と出会ったのは、18歳の時であった。中学を卒業後、将来のことで悩んでいた時期に、父から与えられた島地大等編『漢和対照 妙法蓮經』を読んで感動を受け、生涯の信仰を定めたと言われている。しかし、その後も浄土真宗の講話を熱心に聞いたり、曹洞宗の報恩寺で座禅を行ったりしているの、仏教への関心のひとつだったのかもしれない。この父宛の手紙の中で信仰の道を歩きたいと始めて明らかにしている。しかし、直ちに出家する覚悟はできておらず、まずは自活して勉強すると言う。実業か信仰のどちらを選ぶのか、あるいは両立させていくのかを賢治は悩んでいたと考えられる。

父は実業家ではあったが、信仰に篤い人であった。妹シゲが「お父さんも、宗教家であると同時に大実業家になりたいところもありました」<sup>75)</sup>と述べているように、実業と宗教という2つの道を、父も両立させようとしてきたのである。しかし、賢治は家業を貧しい農民から搾取して成り立っていると受け止めていたので、家業は人々を救う宗教とは対立するものと感じていたのではないだろうか。あるいは、父がそうして儲けたお金で宗教講習会を開くことを偽善的と受け取ったのではないだろうか。父の中の矛盾や欺瞞を賢治は敏感に感じ取っていたと考えられる。吉田は宮澤家の中に転換期の花巻商人の家庭を持った「職業倫理」(＝社会的責任)や慈善精神への芽生えを指摘し、「賢治はこの<転換期の時代>の「商人宗教(＝近代浄土真宗)」がもつ社会的使命を過剰に担うべく周囲からも期待され、自らもそう運命づけていった<倫理の申し子>だったとあって良からう」<sup>76)</sup>と述べている。父のように宗教と実業を両立することも難しく、どちらかを選択することもできず、賢治は進路の選択に直面して混乱を引き起こしたと考えられる。

賢治は「二度も死ぬ迄の病気にて殊に伝染病等に罹り色々ご心配相掛け候のみか父上迄も御感染なされ今に至るまで腸に病残られ候事など只今とても高等

の学校に入るのみならず他の生徒にては思ふに任せぬ書籍など追求め得て何の不足ありて色々御論しに逆らひ候や 信ずる所父上と異らばたゞ泣きてこそあるべきに却て怒りを致し候事など就れば前生の因縁ある事と存じ候へども兎角父上と相近ければ様々な反感のみ起し候 誠に誠に情無く帰盛の後、また逆らひ候後とても絶ず之を思ひ候」(書簡 44)と父への恩は感じるが、信じることが異なるために反感を感じると述べ、その理由として前世の因縁をあげている。前世の因縁であれば、父が悪いわけでも、賢治が悪いわけでもないが、どうにも動かし難いものである。それ程、賢治にとって父との間の溝は埋めがたいものなのだろうか。

それでも、「元来小生の只今の信も思想も父上の範囲を出て申さず書籍とてもみな父上の読み候もののみを後に拾ひ読み候のみに御座候 父上は従来小生の極端なる立場にあるときは常に一方の極端なる立場に立たれ自ら悪者ともなりて間違ひなき様導き下され候事誠に有難く存じ居り候」(書簡 44)と書いている。賢治は父の指導を有難く思う一方で、父の支配を疎ましく思い、そこから脱け出したいという気持も強かったと考えられる。

一方、母には「母上とは尚祖父様祖母様の御看病を初め随分と御肝難下され如何にもしても少し明るくゆつくりしたる暇をも作り上げ申さんと中学一年の時より之を忘れたる事は御座なく候へども何か言へば母上を困らす様なる事のみにて何とも何とも自分の癖の悪くひがみ勝ちなるには呆れ奉り候」(書簡 44)と書き、忙しく働く母を休ませたいと思いながら、困らせる理由を自分の性格に帰している。母には素直に自分の非を認めており、自分のことを理解し、許して欲しいという甘えが伺える。

6日後の父宛の手紙では、賢治は「お蔭にてあちこちに満足に進行致し殊に小生は自由に研究も手伝も為し得る訳にて誠に有り難くお礼申し上げ候」(書簡 45)と研究生となることを喜びともに知らせている。この間に関教授と将来のために工業化学や林産製造の勉強もできるという約束をしたと手紙に書かれてはいるが、賢治の気持がなぜ変化したのかを示す資料はない。結局、賢治は父の勧めに従って研究生となる決心をする。しかし、徴兵に関しては、手続きをして欲しいと頼んでいる。一旦、3月に家に戻り、父と話し合った時に、徴兵検査の延期に傾きかけたが、翌日の手紙には「昨日一度は就れなりとも御任せ致し候へども実はあれより帰盛の途中又只今に至るまで誠に誠に心苦しく到底之の様子にては自由に研究も郡への奉公も致し兼ね候」(書簡 48)と心の揺れを書いている。父は研究生として学問を修めることを勧めたわけではなく、徴兵

延期をもくろんでいたものであり、賢治は父の本来の意向を受け入れることは拒否したのである。

賢治は研究生になることを受け入れた。賢治自身も自分の進むべき道が明確ではなかったかし、父の反対を押し切ってまで、自分の進路を主張し、切り開いていくこともできなかったのだろう。その一方で、父の本来の目的であった徴兵の延期についてはあくまでも拒否の姿勢を貫いたことは、父に屈服せずに賢治が自らの自立性を保ったことになる。

### ③保阪との関係

この時期に保阪が除籍処分を受けるという事件が起きた。『アザリア』に掲載した保阪の文章が虚無思想として学校で問題になったという。賢治は保阪の処分に心を痛め、自分も退学しようとした。妹シゲは「突然帰宅した兄がただならぬ気色で学校を辞めると言ひ張って父をはじめ私達を驚かせました。お友達一人丈けを退学にさせておけないといふ事で今先生方全部の会合の中で何かを宣言して来た様子でした」<sup>77)</sup>と述べている。結局、賢治は無事卒業し、保阪に「今度は私などは卒業してしまひ、あなたはこの様な事になり、何とも御申し訳ありません」(書簡 50)と書いている。賢治は手紙で傷心の保阪を懸命に慰め励まそうとした。その一方で、「どうかどうか私の様なものを御捨て下さらず諸共に一心に他念なく如来第一義を解し奉る為に修行をして参りませう」(書簡 49)と嘉内に見捨てられることを心配し、法華経の教えを薦め、一緒に道を歩むよう頼んでいる。除籍処分を受けた保阪はショックを受け、暗澹たる思いだったろうし、自分のことで精一杯だったに違いない。賢治は保阪の気持を推量り、保阪を支える方向には動かず、自分の不安を語り、自分の信じる宗教を押し付けようとした。賢治の一途さは理解できるが、他者への配慮に欠けていると言わざるを得ない。それ程、保阪が離れていくのではないかと、自分を見捨てるのではないかと不安が強かったと考えられる。

## (5) 研究生時代—仕事への葛藤

### ①父への依存

紆余曲折を経て、22歳の賢治は研究生となり、土性調査のために歩き回る。同級生の工藤又治宛の手紙には調査の状況が記されている。そして、背囊から薄荷糖がつまった見慣れぬ容器を見つけ、「コレハ私ノ父ガ入レテオイタノデス。私ハ後ニ兵隊ニデモ行ッテ戦ニデモ出タラコンナ事ヲ思ヒ出スダラウト思ヒマス」(書簡 54)と書いている。知らぬ間に入っていた薄荷糖を父が入れてくれたと確信したのは、これまでに父がこのような細やかな配慮をしたからであろう。このよ

うな愛情の示し方は、子どもにならともかく、大人となった息子に必要なのだろうか。賢治も父の心使いを疎ましく思うこともなく、感謝している。細やかな愛情を示す父とそれを有難く受け入れる子の関係は、賢治が20歳を過ぎても変わらなかった。

また、「雨合羽は当地にて尋ね申すべく候間何卒御心配下さらぬ様願上候」(書簡65)とあり、3日後の手紙に「防水マント金七円にて求め候間何卒花巻にては御心配下さらぬ様奉願候」(書簡66)と書いている。父が旅先で雨に濡れないよう、雨合羽の心配をしたのだろう。矢幡は健康に細かく注意を払うことが、宮澤家の家風となっており、賢治の父が相当の心配性であったことを指摘し、「ふり切ろうとしても、細々とした心配でまとわりつき、干渉しようとする母性的父親」(78)と述べている。しかし、この時点では父が賢治の身を心配し、過剰なまでの配慮をすることを賢治は拒否せず、むしろ、有り難く思っている。それだけ、賢治は父に依存していたと考えられる。

特に、経済面では賢治は父に全面的に頼っていた。5月に賢治は実験指導補助の辞令を貰うが、父宛の手紙に「辞令に相当する様の仕事は致し兼ね候為且つ来年度に研究生として残り候人には右辞令与へざる由(中略)誠に郡にも気の毒に御座候間何卒今回私の受くる金額(多分百五十円)中半分或は百円をその人の方へ廻す様に致したくと存知候(中略)私の方は郡よりは百二十円を限度として受くる様御許可願上候 依て多分今学年中には百数十円御補助を仰ぐ様の事と相成るべく候 いつまでも御迷惑のみ相掛け申し訳無之次第に御座候」(書簡65)と書いている。賢治は給費に見合う仕事を行なう自信がないのか、給費を受け取ることを躊躇している。役に立たなければならぬという観念が賢治を縛り、役立たないのではないかという恐怖心があり、それを回避しようとしたのではないだろうか。

一方では父からお金を出して貰うことは、平気であった。申し訳ないとはいうものの、給費を受けて洋書を買うことを父に報告している(書簡66)。職に就いても、賢治は自活したり、初めての給料を両親や妹弟のために使うという発想は全くなかったのだろう。さらに、本が欲しいこと、実験設備、試薬品を購入したいので、60円欲しいと父に無心し、これ以上は父に迷惑をかけず、顕微鏡は自分で働いて買うと書いている(書簡67)。父は書物を購入するための出費は厭わなかったようで、賢治は拒否されないと分かっていたから、安心して無心ができたのであろう。父も本を読んでも、賢治の身は安全であり、心配することもないと考えただろうし、賢治をコントロールしたい父は、金銭で賢治を思い通りにしようとしたのではないか。

## ②仕事への懷疑

4月に受けた徴兵検査で賢治は第二種乙と判定され、兵役を免除された。父の反対を押し切ってまで受けた検査で、兵役免除という結果になったことに賢治は屈辱的な思いを抱いたのではないだろうか。

5月頃、賢治は次の様な短歌を制作している。

いづくにも不平はみちぬそがなかに  
何をもとむるわがこゝろぞも (歌稿A661)

賢治は経済的にも恵まれ、助手という仕事も得て人も羨む存在であることは、賢治自身も分かっている。それでも、満たされぬ思い、現状に満足できない気持が描かれている。「何をもとむるわがこゝろ」と詠んでいるように、賢治は自分のやりたい仕事を見出せず、自分探しを続けており、まだアイデンティティを獲得することができなかった。

賢治は6月の下旬には仕事を辞めることを考えるようになった。父に仕事が忙しくて本を読んだり、自分の研究ができない不満やこのままでは将来の仕事の準備ができないこと、さらに「今年四月以来私の早く自分の仕事に従事致し度き為か何分急ぎ候様の事のみ多く分析等も充分心は入らず甚だしき失敗を致す事多く御座候」と仕事の失敗で関に叱責されること、関に辞職の相談をしたら、再考を求められたが、「本統は分析等には余り適せず一人にて本を読み考へて居る事最適なる由をも申され候」(書簡71)と書いている。仕事を辞めるための言い訳ばかりを並べ立てている。

父は2ヶ月で音を上げる賢治に忍耐力が必要と諭したようで、次の手紙には「実は私も自分の忍耐力の少き事は充分承知致し居り折角と気を付け候へども何分にも今回の如き事を申し上ぐる様の程度に有之今後は尚々覚悟を判然と致し随処みな忍辱の道場と心掛け候間何卒御安心奉願候」と父の意見に従うと書いているものの、「何も仕事が苦しとは存じ申さず候。只無意味なる事を致して心神を勞らす事を堪え難く思ひたるのみに御座候」(書簡72)と仕事に意義が見出せない苦しさを語っている。

賢治の不満は、将来の仕事と結びつかない仕事に意義が見出せないことと、仕事が充分できずに関に叱られることであった。前者は仕事のやりがいに関する問題である。後に賢治が農民に目を向けて肥料設計を行うようになった時には、土性調査が役立ったが、当時の賢治は化学的な工場を立ち上げることを模索していたので、調査の意義が感じられなかったのも当然であろう。

父宛の手紙には、岩石、鉱物等を扱いたいと書いて

いる（書簡 72）。賢治は中学生の頃、鉱物採集に夢中になり、「石っこ賢さん」とあだ名をつけられたことがあったが、その頃と同様、趣味への興味、関心が強く、それを仕事と結び付けようとしている。賢治は自分の気が進まないことは、勉強でも仕事でもやりたがらないが、その一方、好きなことには夢中になる。自分の好きなことを仕事として成立させている人は、一部の恵まれた人であろう。大多数の人は、仕事は仕事と割り切り、余暇に趣味を楽しんでいるのではないか。その中でも、自分なりに仕事の意義を見出していくのではないだろうか。賢治は妥協できず、生きがいのもてる仕事を模索しようとしていた。

もう一方の問題は、関との関係である。今まで自分を可愛がって評価してくれていた関に叱られたことは、否定され、見捨てられるような不安を呼び起こしたのではないだろうか。そして、見捨てられる前に自分の方から関を見捨ててやろうと思ったのではないだろうか。自分を全て受け入れてくれることを相手に求め、それがかなわないと感じると、相手に攻撃的になったり、切り捨ててしまうという対人関係のパターンが、賢治の特徴であったと考えられる。

### ③病気による回避

7月になり、胃の近くに痛みを感じた賢治は病院を受診する。「左の方少しく悪き様にて今別段に水の溜れるとか云ふ事はなきも山を歩くことなどは止めよとの事」（書簡 77）と父に報告する。手紙では肋膜炎という診断が明確にされたかどうか明らかではない。他の医師の診察では「只今は決して悪しと云ふことなきも殊によれば罹るやも知れず葉は矢張用ふる様且つ山へ行く前には必ず見て貰ふ様（中略）只今の分析は差支なしとの事」と言う。しかし、仕事を辞めたい賢治には、身体的な病気という大義名分ができたわけである。今年一年は分析と山の調査に専心して勉強を控えるとは言うものの、「到々私も弱みを生じ終り候 就れ来春よりは気仙郡あたりにて静なる仕事に従事致したくと専ら願ひ居り候」と書いている。

父母もショックを受けたに違いない。校本によれば「賢治の憂慮するべき状態に父は苦しみ、早く土性調査を打ちきらせ、学校をやめさせて家にもどし、静養かたがた家業を見るということにしたい、と考える」（79）とある。賢治の健康に気を配る心配性の父なら、当然の配慮であろう。実際に賢治を家に呼び戻したようである。盛岡高農の後輩の河本から保阪に宛てた手紙には、「宮澤氏は肋膜炎にて実家に帰った。私のいのちもあと十五年はあるまいと。淋しい、限りなく淋しいひびきを持った言葉を残して汽車に乗った」（80）と記されている。この予感には後に現実のものとなるが、その当

時は家で療養した結果、賢治は回復に向う。7月17日の保阪宛の手紙に「私は先日肋膜炎が悪いと云はれて居ましたが今はすっかり治りました」（書簡 78）と書いている。しかし、仕事は辞める方向に動き、7月20日の父宛の手紙には、学校退学の意向を関に伝えたことを伝えている（書簡 80）。

賢治は病気を理由に仕事を辞めることができた。福島は「医師たちの診断もはっきりしないし、その後の十年間、かなり無理をしながら三十二歳まで賢治が発病しなかったのが不思議である。そこで、このいくつかの愁訴はむしろ気分的なもの、メランコリーの前期によくみられる心気念慮・不全感ではないかと推測される」（81）と述べている。福島の指摘のように病気が心気的なものであるならば、賢治は仕事を負担に感じながら、辞めることもかなわない状況の中で身体的な症状を出すことで、精神的な危機を回避したとも解釈できる。

### （6）辞職後の危機と職業の模索

#### ①アイデンティティの拡散による危機

結局、8月24日に願ひにより実験指導補助を解かれる。賢治は気の進まない仕事からは自由になれたものの無職となり、自分の進路に悩むことになった。保阪宛ての手紙では「先づ私はこれから先に、何の仕事をしなければならぬと云ふ約束を持たない事になりました。けれどもこれは又苦しいことです。私は何もできないのです。（中略）それでもやつぱり稼ぎたくて仕方がないのです。毎日八時間も十時間も勉強はしてみます。がこれは何だか私にはこのごろ空虚に感じます」（書簡 83a）と、何者でもない、何もできない苦しみを述べている。賢治は、長男として家業を継ぐことも嫌だし、その才能もないので、会社組織にしてもらい、雇用して貰うことを考えたり、35歳までは働いて後は自由にして貰いたい、出家はしないが、勉強したり行脚に出たいなどと書いている。気持も落ち込んでいて、「私の様に落ちぶれる手筈ならば農学校等は入らなくともよかった」と悲観的なことを書いている。将来の方向性が見えない中で賢治は自虐的になっていたのだろう。

9月には残りの調査を終え、家業の手伝いを始めるが、10月になると精神的に危機的な状態に陥る。保阪宛ての手紙には「私の世界に黒い河が速にながれ、沢山の死人と青い生きた人とがながれを下って行きます。青人は長い手を出して烈しくもがきますがながれて行きます。青人は長い長い手をのばし前に流れる人の足をつかみました。また髪の毛をつかみその人を溺らして自分は前に進みました。あるものは怒りに身をむしり早そのなかばを食ひました。溺れるものの怒り

は黒い鉄の瓦斯となりその横を泳ぎ行くものをつゝみます。流れる人が私かどうかはまだよくわかりませんがとにかくそのとほりに感じます」(書簡 89)と記している。同じテーマで一連の短歌を詠み、「青びとながれ」としている。

青じろき流れのなかを死人ながれ  
人々長きうでもて泳げり (歌稿 A681)

うしろなるひとは青うでさしのべて  
前行くものあしをつかめ (歌稿 A683)

溺れ行く人のいかりは青黒き霧とながれて  
人を灼くなり (歌稿 A684)

何とも恐ろしいイメージである。賢治は「そのとほりに感じている」と書いているので、想像による世界というよりも、幻覚に近いものであったと考えられる。私の世界に流れる黒い河は、あちらとこちらを分断する心の中の亀裂なのだろうか。あちらとこちは生と死、意識と無意識、あるいは内的世界と外的世界なのではないか。青人は生きてるとはいえ、病人あるいは死に近い存在なのではないだろうか。青人は生き残るために仲間と争い、怒りをあらわにしながら、流されて行く。流れる人は自分かどうかかわからないと言う。人を押しつけて行くというのは、賢治の生き方とは相容れないものであるが、心の奥底にはこのような気持ちが抑圧されていたのかもしれない。また、自分かどうかかわからないと言うのは、流される人であると感じると同時に流れる人を見ている自分の視点を感じたからではないだろうか。このようなイメージは、自我が崩壊する程の危険をはらんだ精神的な危機を表していると言える。賢治が精神的な病へと移行していかなかったのは、第三者的に状況を眺め、表現できる自我の強さがあったからではないだろうか。

## ②トシの看病と東京での模索

現実の賢治は家業を手伝いながら、自分の将来を模索していた。妹トシから賢治に宛てた手紙には「大正十年位までゆるゆると御考へを練らるゝ事に賛成申し上げ候 とにかくにも真生活の方法と職業の一致の外に望ましき生活法ハ考へられず候 一人一人も一家もその天職を見出して之を遂げたくと折角ねが居り候 現在の様な怠け者にてハ随分心細候へどもこの望みの空なるものとハ思はれず候 (中略) 無責任な理想を申し上げるなら兄上様御自身の天職と一家の方針とが一致する事が何よりも望まれ候 家族が必要な援兵としてでなしに唯の足手まといとなる事ハお互ひ

に不本意なる事に御座候<sup>82)</sup>と記されている。賢治は3年間職業について「ゆるゆる」と考えるつもりだったのであろう。トシは賢治が天職を見出すこと、そしてそれが「宮澤家の方針」との一致することを望んでいる。「宮澤家の方針」とは、父の方針のことであろう。つまり、父が認める職業を選択しなければ、家族の役に立たない「只の足手まとい」になってしまうと考え、自分のことを考えるのも大切だが、家族のことも考えて職業を選ぶように勧めている。

トシの進言は賢治に大きな影響を与えたと考えられる。数日後の保阪宛ての手紙には「今私が望む様には東京へでも小工場を持つといふことは家として非常な損ですし又当分は不可能です。又私一人、家にかゝはりない私、箇人としてはさっぱりそんなもうけることはしたくありませんししなくても畑の三段歩も耕してゐれば静に自分を完成していくことが出来るのです。けれどもそれは私丈のことです。みんなの為を思ふならば先づ自分を完成しなければなりませんその道方法は自分の為でもほかのひとの為でもいゝ訳だらうと思ひました」(書簡 93)とある。私だけのことでなく、家のことも考えようとしているし、自分を完成することは、自分の為でもあり、人の為でもあると考えている。

次の保阪宛ての手紙には「今わたくしは求めることにしばらく勞れ、しづかに明るい世界を追想してみました」と山へ登り、自然の美しさに感動するという不思議な話を書いている(書簡 94)。そのイメージの一部は「頂にいたり、一人の人は感激のあまり皮肉のあまりゲートルを首に巻きつけ、また強い風が吹いて来て霧が早く早く過ぎ行きわたくしの眼球は風におしつけられて歪み、そのためかまたはそうでなく本統にか白い空に灼熱の火花が湧き、すみやかに散り、風を恐れる子供は私にすがりついたのです」という眼球が風に歪むという異常な感覚は、残っているものの、青人の流れのような恐ろしさは感じられない。「わたくしのきもちのよいことばかり書きました」と記されており、イメージの世界も多少、明るくなってきたと考えられる。

年末にトシが入院したため、賢治は母と上京する。年が明けてトシが小康状態になると、母は帰花し、賢治が看病のために東京に残った。賢治は父が自分を看病したように、トシを看病する。父に同一化できる役割であり、父のように感染することもなく役割を果たしている。

また、東京に滞在することは、賢治を活動的にする。トシ看病の間には図書館で調べ物をしたり、新しい仕事を模索する。父宛の手紙では、「何卒私をこの儘当地に於て職業に従事する様御許可願ひ度事に御座候」



と頼み、宝石関係の仕事提案している（書簡 131）。その理由として、東京ならば商売が成り立つこと、東京が暮らしやすいこと、仮に失敗しても無資本で色々試みることが出来ること、家へ帰って店番をするのは情けないこと等をあげている。賢治は家業も花巻という町にも嫌悪感を抱き、東京に憧れ、東京に出て来たかったのだろう。賢治は飾石、宝石の研磨、加工などを行い、人造宝石の製造を立案し、必要な計画や資本金等を考えて父に書き送っている（書簡 135、137）。しかし、実業家としての父の目からは賢治の提案はあまりにも頼りなく、未知の職業の危険、労働力と経営能力に対する不安から否定的であった。父がなかなか許可をしないことに、賢治は苛立ち、「何卒私に落ちつきてまじめに働くべき仕事をご命令被成下度候。車の後押にても純粋の百姓にても何にても宜しく候。又は私に自由に働く事を御許し下され候や」（書簡 140）と父に書き送っている。仕事を始めるのにも、父の資本金を当てにしている賢治にとって、これが精一杯の抵抗だったのであろう。

### ③再度の精神的な危機

結局、賢治は退院したトシとともに3月に帰花し、その後は家業を手伝うことになった。同級生の成瀬金太郎宛の手紙には「私は暗い生活をしてゐます。うすくらのなかに遥に青空をのぞみ、飛びたちもがきかなしんでゐます」（書簡 143）と苦しい胸の内を語っている。保阪への手紙にも「私のうちは古着屋でまた私は終日の労働に堪えないやうなみじめなからだな為にあなたの様に潔い大気を呼吸して居りません（中略）煮えきらないものは一生こんなことを苦に病んでゐなければなりません」（書簡 144）と自らの惨めさを記している。

次第に精神的にも追い詰められたようで、保阪宛ての手紙には、「長い間ご無沙汰を致しました。それは私があまりいそがしかったためです。からだがいそがしいではありません。けれども戦が一寸のひまも与へて呉れなかったのです。そして今もそうです。これかれも勿論さうでせう。その戦は実に惨憺としてゐます。今や私の心は紙魚に食はれた歌麿の錦絵のやうにまた煤け果てたその様にこゝにこの輪郭が見えると考へてやっと慰めるのです」（書簡 152a）と記している。戦いについては、「保坂さん。今日私の方の第一の関所はすっかりこわされ、あやしい軍勢がすさまじく湧き立って来ます。保坂さん。今日私の方の第二の関所はすっかりこわされ、顔の漆黒な髪を被った軍勢は黒煙のやうに押し寄せます。保坂さん。今日私の城はいつか地の底を掘って来た軍勢に充たされ私はある箱の中に入って身をひそめてゐます」と述べている。軍勢は

「破れよ、ふみにちれ、奪い去れ、引き裂け」等と叫ぶ。軍勢に占領され、心の輪郭しか残っていないというまさに危機的な状況である。福島はフロイトの自我構造論との類似を指摘し、「ここで『城』に象徴されているのは『自我』のイメージであり、あやしい軍勢は無意識の領域に発する『イド』の衝動、特に攻撃性の力を表現したものと考えられる。そして、賢治はフロイトの概念化より早く、後の精神分析学が『自我境界』と呼んだものを『関所』として、まざまざと凝視していたのである<sup>83)</sup>と述べている。自我機能が十分保たれている場合、自我境界によって意識と無意識が分けられており、無意識の内容が意識へと昇ってくれば、検閲機能が働き、阻止すると考えられている。しかし、自我機能が弱まり、「心の輪郭しか残っていない」様な場合、無意識の内容が意識を圧倒し、自我を脅かすことになる。まさに、自我の崩壊を招くような事態である。それでも、賢治は「私を他人の様に考へて見る」というように、自分の状況を客観的に書き記す力があつた。また、「あの黒い軍勢に囲まれた小さな箱の中の私にも唯一の道（中略）私はいまも数しらぬあやしいものの右から左前からうしろとはね飛ばぬかをおぼろに白い道をふみはてしもしらずはてしもしらぬかの大城に向かつて行きます」と述べ、自分の殻に閉じこもり、自分を守りながらも、希望を失わず、一筋の光明を見出している。

賢治は内的世界で忙しく戦っていたために、「私の生活をよそから眺めたら実に静な怠けたものでせう」（書簡 152a）と自ら述べるように、現実世界では何もできないでいた。賢治の危機的状況を理解できない父は「きさまは世間のこの苦しい中で農林の学校を出ながら何のざまだ。何か考へろ。みんなのためになれ。（中略）きさまはとうとう人生の第一義を忘れて邪道にふみ入ったな」（書簡 154）と責める。賢治は「私は邪道に行く。見よこの邪道者のすがた。学校でならったことはもう糞くらへ」と開き直ったように記している。賢治は幽霊にあやつられているように感じたり、死骸やあやしき蜘蛛が見えたりする。さらに「われはなし。すべてはわれにして、われと云はるゝものにしてわれにはあらず総ておのおのなり（中略）この舞台をわれと名づくるものは名づけよ。名づけられたるが故にはじめの様は異ならず。（中略）これがわれなりとは誰が証し得るや」（書簡 154）と記している。自分が自分という感じを失っていることが伺える。

このような手紙を保阪は受け取ってどう思ったのだろうか。「あなたはこんな手紙を読まされて気の毒な人だ。その為に私は大分心持がよくなりました」（書簡 154）と賢治は書き送っている。保坂から賢治に宛てた手紙は現存しないので、保坂がどのような返事を出

したかは定かではないが、「あんなに破壊的な私の手紙にも乱れずあなたの道を進むといふあなたを尊敬します」(書簡 155)と賢治は記している。保阪は賢治の手紙を受け止め、あまり動揺も示さなかったのだろう。そして大正9年4月の保阪宛の手紙には「あなたの手紙を見たらほんとうに心持が直りました」(書簡 162)と書き、その理由として、保阪の像が見えていたが、苦しいことのないことを感じたり、考えて見たら、像が見えなくなり、明るいイメージが見えてきたという。保阪の安定した対応はカウンセラーの様であり、賢治の心の回復の一助となったのであろう。大正7年の手紙にも「あなたはむかし、私の持ってゐた、人に対してのかなしい、やるせない心を知つて居られ、またじっと見つめて居られました」(書簡 102a)と書かれている。賢治が自分の心を理解してもらっている点もカウンセラーとして有能であったと考えられる。その後の手紙からは賢治が安定している様子が伺える。

賢治は仕事を辞めた後、精神的な危機的状況におちいった。何者でもないという不安の中、アイデンティティ拡散の状態に陥ったのではないだろうか。しかし、トシの看病のために上京すると、活力を取り戻し、アイデンティティの模索を始める。結局、賢治の希望は父によって否定され、再び危機的状況に陥る。それでも、保阪の手紙が支えとなり、次第に危機から脱出していったと考えられる。

## (7) 国柱会入会と父との対立

### ①宗教的アイデンティティの確立

次第に賢治は元気になっていく。6月の保阪宛の手紙には「私なんかこのごろは毎日ブリブリ憤ってばかりあります。何もしやくにさわる筈がさっぱりないのですがどうした訳やら人のぼんやりした顔を見ると、『えゝぐずぐずするない。』いかりがかつと燃えて身体は酒精に入った様な気がします。(中略)確かにいかりは気持ちが悪くありません。関さんがあゝおこるのも尤もです。私は殆んど狂人にもなりさうなこの発作を機械的にその本当の名称で呼び出し手を合わせます。人間の世界の修羅の成仏。そして悦びにみちて頁を繰り返します。本当にしっかりやませうよ」(書簡 165)と書き、「しっかりやませう」と21回も繰り返している。大人しい賢治が人が変わったように怒ったり、檄を飛ばしている。

賢治が変化した原因としては、日蓮宗への傾倒が考えられる。大正9年10月、24歳の賢治は日蓮正宗の行動団体・国柱会に入会した。保阪には12月の手紙で国柱会入会と創立者田中智学への忠誠を書いている(書簡 177)。国柱会に入会することで、賢治は新たな

アイデンティティを獲得したと考えられる。西平直は「もし、アイデンティティが同一性であり、一貫していることであるならば、信仰こそその最たるものである」<sup>84)</sup>と述べている。宗教的なアイデンティティを確立したことが、賢治を安定させ、気持を高揚させたと考えられる。

### ②父との宗教上の対立

賢治は花巻の町を題目を唱えながら歩くようになった。保阪には父母の許しを得ていると書き送っているが、実際には父は賢治の行動を苦々しく思っていた。関は「寒い冬の夜上町通りを『南無妙蓮華経』と越えたからかに唱題してくるのを聞いたとき、私たちは水を浴びたように愕然としました。(中略)その時ちょうど賢治の父上が私の家に来ておられましたが、賢治のそういう姿を見て舌打ちし、『困ったことをするものだ』とって眉根を暗くされました」<sup>85)</sup>と述べている。宗教をめぐる、父子の対立も激化し、2人はいちいち經典をあげ、くり返し論じあい、イチや妹たちはおろおろと嘆いたという。ある夜果てしない議論のうちに時が経ち、母娘に向かった政次郎は「聞いててひどかったろう(辛かったろう)。だが大事なことを言いあったので喧嘩ではないのだからな」<sup>86)</sup>と涙を流したことがあると言う。

賢治の父への反抗であった。父は熱心な仏教徒であり、妹シゲは「賢治さんもお父さんも両頭の蛇だと思います。宗教の方なら、賢治に高僧になってもらいたかったし、学問の方なら博士になってほしかったのでしょ。お父さんも、宗教家であると同時に大実業家になりたいところもありました」<sup>87)</sup>と述べている。賢治は実業家になることで、父に対抗しようとしたが、彼の計画は父に認められず、否定されてしまった。つまり、実業の道では父に対抗することはできなかったのである。もう一つの父のアイデンティティである仏教に対して、賢治は反旗を翻して対抗したのである。

賢治は何とか父を乗り越えたいと思い、その手段として宗教を選んだのではないだろうか。高山は「日蓮宗への入信は、強すぎる父の影響から賢治が独立するための窮極の選択であり、ほとんど生活無能力者というべき賢治が父の依存から脱け出せない現実を、信仰の強烈さで優位に立つことによって転覆しようとする試みだった」<sup>88)</sup>と述べている。しかも、賢治が日蓮宗に傾倒するきっかけを作ったのは父であったし、父も信仰の篤い仏教徒であったので、実業の問題のように父が拒否することで決着がつくという問題ではなかった。父に改宗を迫り、自分の信じる日蓮正宗の方が正しいと認めさせようとするが、父はそれを拒否することが繰り返され、決着がつかなかった。矢幡は「父親

に反抗する正当性の根拠であり、決断に身を投じさせる原動力でもあり、あわよくば嘉内との関係を更に強固たらしめる共通理念ともなるかもしれない法華経信仰は、賢治が閉塞状況を脱するために何重もの勝負を賭けたカードになりえた」<sup>89)</sup>と述べている。一点突破主義とでも言うのか、国柱会入会は全ての状況を好転させる魔法のように考えていたのではないだろうか。だからこそ、賢治は狂信的ともいえる行動を起こしたのである。

また、矢幡はこの時点から父子の力関係が逆転し始めたことを指摘し、「父親の小言は一生賢治に強い圧力を与えつづけたが、もはや、賢治の行動の前に決定的に立ちふさがることではできなかった」<sup>90)</sup>と述べている。つまり、父も賢治の反抗に対して、今までのように賢治をコントロールすることができず、涙することになったのである。

### ③同行者としての保阪への接近

賢治は親友保阪にも国柱会入会を薦めている。大正9年12月の手紙には「どうか殊にご熟考の上、どうです、一緒に国柱会に入りませんか（中略）我が友保阪嘉内、我を棄てるな」（書簡178）と保阪に懇願し、すがりつこうとしているかのようである。青年期には親からの自立が大きなテーマになるが、その支えになるのが、同性の友人の存在である。悩みを共有したり、相談したり、自分の価値を確認することができる友人がいることで、親からの分離が促進される。この時、賢治は25歳であり、親からの分離がテーマになること自体遅いかもしれない。しかし、支配的な父から分離するためには、十分な時間が必要だったのだろう。

また、菅原は保阪への熱烈な感情を同性愛的なものとして解釈している<sup>91)</sup>。確かに保阪に同じ道を歩む同行者としての一体感を求めるものであったと考えられるが、信仰も含め、自分のすべてを受け入れてもらいたいという賢治の願いは、母親に対する子どもの気持ではないだろうか。矢幡は賢治が世界から消え去ってしまいたい「つらさ」を感じており、それに抗するためには「彼の全てを受け入れ、いつまでも一緒にいてくれる一人の人間を獲得することであった。賢治はそれを嘉内に求めた。否定的な面を隠さなくても、全面的に許され、受け入れられ、親密でありうる関係。それは母親と乳児との間でしか成立しないような関係性のパラダイスなのではないか」<sup>92)</sup>と述べている。つまり、人の役に立たなくても、自分の存在を認め、自分の信じる宗教も含めて受け入れてくれる母なる対象を嘉内に求めたからこそ、執拗に入信を迫ったのであろう。

賢治は国柱会に入会することで、精神的な安定を取り戻すとともに、宗教の問題で父と対立した。それは

賢治が宗教によって得たアイデンティティを認めさせることであり、父から分離しようすると試みでもあった。その一方で、保阪同行者として位置づけ、自分を受け入れてくれるように求めている。父からの分離するためには保阪の存在が必要だったのだろう。

### （8）賢治の家出一自立の試み

#### ①家からの脱出

大正10年1月、賢治は突然無断で家を出て東京の国柱会へ赴く。関宛の手紙には「何としても最早出るより仕方ない。あしたにしようか明後日にしようかと二十三日の暮方店の火鉢で一人考へて居りました。その時頭の上に棚から御書が二冊ぱたり背中に落ちました。さあもう今だ。今夜だ」と思い、ご本尊と御書、傘を持って飛び出したことを書いている（書簡185）。思い詰めていた賢治には本の落下は突然の啓示のように感じられたのであろうが、単なるきっかけに過ぎず、家を出ることは必然的なことであつたと考えられる。

国柱会で対応した高知尾智輝に賢治は「信仰に励み、一家の帰正を念じて父の改宗をすすめておりましたが、なかなか了解してくれません。これは私の修養が足りないために父の入信が得られない。この上は国柱会館へ行って修養をはげみその上で父の入信を得るこの外はないと決意し、家には無断で上京したものであります」<sup>93)</sup>と述べた。高知尾は家出してきた賢治をそのまま置く訳にもいかず、親類の家に落ち着くことを提案した。賢治は小林家を訪ねて居候したことも関に伝え、「家を出ながらさうあるべきではないのですが本当に父母の心配や無理な野宿も仕兼ねたのです」（書簡185）と書いている。さらに下宿と仕事を見つけたことを記している。

関は親類であり、小林は父の知人である。2人から宮澤家に連絡が入るのは当然であり、自分の居所を家に伝えて欲しいと言わんばかりである。実際、父から手紙や生活を心配して小切手が送られてくる。賢治は「一応帰宅の仰度々の事実心肝に銘ずる次第ではございますが御帰正の日こそは総ての私の小さな希望や仕事は投棄して何なりとも御命の儘にお仕へ致します」（書簡189）と帰花を拒み、小切手も送り返した。25歳の賢治が始めて家を離れ、わずか7ヶ月間の試みであったが、自分で稼いだ賃金で暮らしたのである。

#### ②創作活動

この時期、賢治は印刷所でのガリ版切りの仕事をし、国柱会活動に参加した。高知尾から信仰がにじみ出るような詩歌文学を書かなければならないと聞き、法華経文学の創作を志した。それまで、賢治は作家志望を公言していたわけではないが、短歌や短編を書く中で、

潜在的にはそのような志望を抱いていたかもしれない。西平はアイデンティティの獲得のためには、熱意や覚悟、ある種の使命感が必要ではあるが、「本当はもうひとつ。誰かにその決心を認めてもらいたかった。君ならやれる、その一言」<sup>94)</sup>の必要性を述べている。つまり、誰かが肩を押してくれることがアイデンティティ獲得の契機となることがあるのだ。賢治も高知尾の後押しで、作家としての道を見出したのである。

賢治は仕事や国柱会の活動の合間を縫って膨大な童話の原稿を書いていた。印刷所で知合った鈴木東民は、賢治が袴の紐にぶら下げていた風呂敷包みの中身が童話の原稿であると教えてもらい、「もしこれが出版されたら、いまの日本の文壇を驚倒させるに充分なのだが、残念なことには自分の原稿を引き受けてくれる出版業者がない。必ずその時が来るのを信じている」と語ったと述べている<sup>95)</sup>。清六は、「一ヶ月に三千枚も書いたときには、原稿用紙から字が飛び出して、そこらあたりを飛びまわったもんだ」と伝説的に伝えている<sup>96)</sup>。福島は活動性の更新、抑制の欠如、高揚した自我感情、多産な創造性などから、マニー（躁）極期と捉えている<sup>97)</sup>。賢治が躁状態であったことは確かだろう。その背後には、東京にとどまり、父の支配下からある程度脱け出したこと、宗教活動に参加し、「法華経文学の創作」という自らのアイデンティティが定まったこと等をあげることができるだろう。自らの生きる道を乱した高揚感が、賢治を突き動かしたのではないだろうか。

賢治は原稿を売り込もうとしていた。7月の関宛の手紙には「私は書いたものを売らうと折角してみます。それは不真面目だとか真面目とか云って下さるな。愉快的な愉快な人生です」(書簡 195)と書き送っている。9月には雑誌「愛国婦人」に童話「あまの川」が、12月には童話「雪渡り」が掲載された。「法華経文学の創作」という野心を抱き、創作活動にのめり込んでいった賢治は、原稿も売れてますます高揚した気持になったと考えられる。しかし、生前賢治が稼いだ原稿料はこれだけであった。

### ③父の囲い込み

父は家出して自分勝手なことをする賢治を勘当したり、突き放したりすることはしなかった。手紙で賢治の身を案じ、賢治に仕事のことや妹、親類について相談している。あくまでも長男としての扱いである。それに対して、賢治も返事を出して自分の意見を述べているし、心配しないよう自分の生活について書き送っている。家出しても、父は賢治を離さず、賢治も離れようとしな。父子ともに関係を断ち切ることができないことが伺える。

4月上旬に父が上京し、賢治に関西旅行を勧め、賢治も喜んで同行する。この旅行で神道や仏教の伝統に触れ、法華経と国柱会にとらわれ過ぎることを反省させ、併せて感情の融和をはかろうと父が考えたことであつた。父は帰正問題には触れず、賢治が帰花する自然な解決を期待したようだ。このような懐柔策を示す父に対して、息子は対抗することはできないのではないだろうか。佐藤は息子が自立するためには、いうなれば<父親殺し>を経ることは不可欠だと指摘し、「賢治は、父子関係を子ども時代のまま、それこそ煮えきらない状態のまま延長してしまい、政次郎の方もあえて崖から追い落とす行為に出なかった。そこに俗にいう生活無能力者ができあがってしまった。足を地につけることによって<実>と自己を切り結ぼうとする契機は、こうして喪われてしまった」<sup>98)</sup>と述べている。つまり、息子は内的な父親殺しを果たして父親を乗り越えていくのだが、賢治父子の場合、賢治を繋ぎ止めようとして細やかな配慮をする父に対して、賢治は対抗することができず、いつまでも濃密な父-息子関係の中に囲われてしまった。そのために、賢治は大人になることが困難だったと考えられる。

### ④保阪との決別

賢治は保阪にも上京の事情を知らせ、入信を迫っていた。保阪も賢治の行動に心を動かされたのか、上京を考えたようだ。ところが、賢治は「お父様や弟様を棄てるなどは私ならば致しません。全体そんな事はいけません。私の今の場合は一時の変通です」(書簡 186)「お父様や弟様捨てゝ着のみ着の儘こちらにおいてになる事はどうしてもいけません」(書簡 187)と書き送っている。おそらく、父の反対を押し切って上京しようとする保阪を賢治は諫めたのだろう。

賢治は日蓮生誕七百年の日(2月16日)に上京するよう誘っている。しかし、保阪は賢治の誘いに応じなかった。その手紙の直後から保阪は山梨教育会の書記として地元で働き始めていた。その後、保阪宛ての手紙はしばらく途絶えることになる。賢治は保阪が上京しなかったことに、ショックを受け、見捨てられたような気持になったのではないだろうか。

保阪は7月に再び兵営に入る。賢治は保阪に面会を求めながら「私は相変わらずのゴソゴソの子供ですから名誉ある軍人には御交際が不面目かも知れませんよ」(書簡 194)と自分を卑下した手紙を送っている。保阪の日記には「七月十八日 晴/宮沢賢治/面会来」と書いた字を斜線で抹消した記述がある<sup>99)</sup>。この斜線の意味は、面会しなかったとも、あるいは面会したが、宗教等の対立があり、保阪が決別を覚悟したものともとれる。いずれにしても、2人の関係に決定的と

なる出来事があったと考えられる。

賢治は精神的に落ち込み、身体症状も生じる。8月の関宛の手紙には、脚気の薬の札が述べられ、「今はむくみもなくほんの少し脚がしびれて重い丈で何の事もあります(略)七月の始め頃から二十五日頃へかけて一寸肉食をしたのです。それは第一は私の感情があまり冬のやうな工合になってしまつて燃えるやうな生理的の衝動なんか感じないやうに思はれたので、こんな事では1人の心をも理解し兼ねると思つて断然幾片かの豚の脂、塩鱈の干物などを食べた為にそれをきつかけにして脚が悪くなったのでした。然るに肉食をしたって別段感情が変るでもありません。今はもうすっかり逆戻りをしました」(書簡197)と書いている。「感情が冬のような工合」というのは、抑うつ的になっていたと考えられる。矢幡は「賢治の方に残ったのは、喪失感のような、輪郭のはっきりしたものではなかった。(略)それは、ぼっかり穴があいたやうな、何かが去ってしまったやうな、空虚感とか、脱力感といったものであった」と述べている<sup>100)</sup>。

賢治は保阪を失い、保阪を通して世界につながるという賭けに失敗したのである。脚が悪くなったのも、脚気というよりも心因性の反応ではないだろうか。つまり、拠って立つ基盤が失われ、立ってられないという感情が身体に転換されて脚の症状として表れたと捉えることもできる。

関宛の手紙には「十月頃には帰る予定」(書簡197)と書き送ったが、9月にトシの発病を知らせる電報が届き、賢治は大きなトランクに書き溜めた原稿を詰め込み、帰宅する。トシの発病はきっかけでしかなく、賢治には東京にいる理由も、国柱会での活動も意味を持たなくなっていたのではないだろうか。山下は「結局、賢治は東京で親友を失い、信仰に対する情熱を失った」と述べ、「東京への絶望と比例するように高まる、故郷への想い」<sup>101)</sup>を指摘している。傷ついた賢治は故郷へ戻るしか方法がなかったのである。

## (9) 花巻農業学校の教師時代

### ① 現実生活への移行

帰花した賢治は、大正10年12月に稗貫農学校(後の花巻農学校)の教諭となる。当時郡視学県視学羽田と校長の畠山が、賢治を教諭に推薦したという。畠山は恩師の関と喧嘩したことのある人だということを知った賢治は「そんな人なら勤めてもいい、行ってみたい」と乗り気になったと言う<sup>102)</sup>。妹シゲは「お父さんは兄が花巻農学校につとめて、先生になることには反対しませんでしたので、話が出るとあっけないほど、ひょっときまったのでした。(略)兄は家のしごとをつぐということではなく商売をはじめると言うこともうま

くいかないでいたので、このときは先生になって、家族一同ほっとしました」<sup>103)</sup>と述べている。25歳になっても無職だった長男が定職に就いたことに家族は安堵したのである。

家族の喜びに反して、賢治は戸惑っていたようだ。保阪宛ての手紙には「毎日学校へ出て居ります。何かからかにからすっかり下等になりました。(略)それがけれども人間なのなら私はその下等な人間になります。しきりに書いて居ります。(略)けむたがられて居ります。笑はれて居ります。授業がまづいでで生徒にいやがられて居ります」(書簡199)と書いている。

それ以前の帰郷を知らせる手紙では「当地就職の儀も万止やむなきの次第御諒解を奉願候」(書簡198)と書き送っている。保阪からは度々便りがあったようだが、賢治は近況報告のいかにも儀礼的な手紙しか送っていない。保阪との関係が破綻し、賢治の気持は冷めてしまったようだ。賢治は花巻での就職を「万止やむなきの次第」と捉えている。仕方がないという諦めが伺える。さらに、学校に就職し、「何かからかにからすっかり下等になりました」と自虐的になっている。「下等」というのは、賢治が理想とした東京での信仰に基づく生活から、故郷での教師の仕事へと落ちぶれたという気持があったのだろう。言い換えれば、聖なる生活から下降して俗な世間で生きていかなければならない嘆きだと考えられる。そして、笑われ、生徒に嫌われていると自嘲している。佐藤はこの「下等意識」を都会空間からの地方空間への下降、信仰空間から地上空間への下降という二重の意味で捉え、「教師になりたくなつたのではない、それどころか花巻に帰りたかつたわけでも、職業人になりたかつたわけでもない賢治は、この稗貫農学校にどのように自分をいれていいのか、どのように定位していいのかまるでわからなかつた」と述べている<sup>104)</sup>。賢治は理想とする生活から現実生活への移行に戸惑いながらも、何とか受け入れようとしたのではないだろうか。

### ② 教師としてのアイデンティティの確立

実際に教諭として働き始めると、ユニークな授業で生徒を惹き付けることになる。「それがけれども人間なのなら私はその下等な人間になります」と教師の仕事を受け入れたことで、仕事に喜びを見出すようになったのではないだろうか。教え子の証言から賢治は理想の教師とされているが、後に賢治が有名になったために、美化された面もあるだろう。卒業生の富手は「たゞ温い善い先生」「化学の実験が不思議にうまい先生」と述べ、時々読んでくれた自作の詩や童話も「たゞ面白い話として聞いたに過ぎなかつた」<sup>105)</sup>と回想している。賢治のスケールがあまりにも大きく型破りで

あったために、当時は生徒に理解されない面もあったのではないだろうか。

「たゞ温かい善い先生」と言われるように、賢治は熱心な生徒思いの教師だった。佐藤によれば、生徒の就職や上級学校の世話をし、自腹を切つてまでお膳立てをしたり、洋服やその他必要なものを買い与え、紳士にしてやったことも一再ではないと言う。また、盗みで捕まった生徒のために奔走したり、責任を持つということで表沙汰にせずすませたり、家の農作業の手伝いで欠席する生徒のことが、職員会議で問題になった時も、生徒をかばったと言う<sup>106)</sup>。

賢治は教師の仕事に魅力を感じるようになったようで、高等農林の先輩で教師の金子に「先生というものは、おもしろいもんでがんすなあ」と述べ、「生徒を教えるには、生徒が面白く勉強できるように興味を惹起し、教科書にこだわらずにやることだ」と語ったと言う<sup>107)</sup>。その言葉通り、劇やディベートなどを授業に取り入れ、当時としては画期的な授業を行った。賢治は教師としてのアイデンティティを確立し、仕事に生きがいを感じるようになったと考えられる。

### ③対人関係の変化

賢治は教師仲間との交流するようになり、特に高等農林の後輩の堀龍と親しくなり、下宿を終始訪ねては、仏教の話をしている。堀龍は賢治に入信するよう誘われたと言い、賢治は保阪に代わる同行者として堀龍に接近したと考えられる。堀龍は「宗教的な道を、いっしょに行けないのは、宮沢さんの信仰の深さや気持があまりへだたりすぎていて、むしを恐ろしかったのです。その結果、宮沢さんと気持の上でちょっと離れたようなときもあったこともあって、とても宮沢さんの求めるような深いことまで入ってゆく決心はつきませんでした<sup>108)</sup>」と述べている。そのような堀龍の気持に賢治も気づいたのだろう。大正12年に堀龍と信仰の話に及んだとき、「どうしてもあなたは一緒に歩んで行けませんか。わたくしとしてはどうにも耐えられない。でも私もあきらめるから、あなたの身体を打たしてくれませんか」と言って堀龍の背中を打ったというエピソードが残っている<sup>109)</sup>。一緒に歩んでいきたいという思いを断ち切るための儀式だったのだろう。

矢幅は「賢治は自らの他者へのありかたのパターンを反省せずにはおられない<sup>110)</sup>」と述べている。賢治は保阪に対して、すてを受け入れてくれることを求め、それがかなわないならば、見捨てられたように感じてしまい、見捨てられる前に自分から見捨てるという行動を取った。その行動は、対人関係を壊してしまうものであった。しかし、堀龍に対しては、同行者になることを強要することを諦めたために、その後も交流は続

くことになる。さらに、賢治は堀龍の結婚相手を探して世話することに奔走した。堀龍が結婚すれば、同行者になって欲しいという思いを断ち切ることができると思ったのだろう。

賢治は保阪と絶縁してから、多くの友人はいたものの、親友はいなかったようである。同行者の候補と見込んだ堀龍とは距離を置くことで安定を保つようになったし、花巻農学校の同僚の阿部は「宮沢さんの心の中には、ほんとうの友達はなかったのだと、私は思います<sup>111)</sup>」と述べている。対人関係が上手になったとも言えるが、保阪を喪った心の痛手から、親密な関係を築くことに躊躇したのではないだろうか。

### ④経済的な依存の継続

この頃、花巻高女の音楽教師藤原との交流を深め、賢治は音楽へ傾倒していった。賢治はレコードの収集を始め、花巻高女の音楽室でレコード・コンサートをを行った。賢治はレコード会社から感謝状を貰うほど、たくさんのレコードを買い、給料の大部分がレコードに消えたと言う。

また、同僚が病気で退職すると、賢治は毎月お金を届けたと言われているし、前述したように生徒のためにもお金を出すことが多かったと言う。佐藤によれば、盗癖のある生徒に兄弟になると宣言し、「おれの月給は九十円だが、入用ならば九十円の全部をやる。(略)おれは親の飯を食べているのだから、そうしてやっても困らないのだ」と金をやるから、盗まないように諭したと言う<sup>112)</sup>。賢治は生徒にも自分が親に依存して生活していると告げているように、教師として働いても、生活面では父の経済に依存する状態が続いていた。佐藤は、「花巻農学校に教鞭を執るようになった頃、『いざれ財政を乱しては一家はつぶれ、一族は四散する憂き目を見るようになるから、賢治、お前もそのほうに心を入れて下宿料のつもりで家へいくらか入れてはどうだ』と父親が言ったことがありました」と述べている<sup>113)</sup>。しかし、賢治は家に金を入れるどころか、父から金を借り出していた。どこまでも甘い父親であるが、経済的に賢治を支配下に置くことで賢治をつなぎとめておけることを、むしろ望んでいたのではないだろうか。教師は父とは全く別の世界の存在であり、賢治が教師として一人前になり、自分から離れていくことを父は恐れたと考えることができる。賢治は父の思いを敏感に感じ取り、経済的な依存を続けたのではないだろうか。

また、賢治は教師の仕事を受け入れることはできても、世俗の中で生きていくことは受け入れられなかったのではないだろうか。稼いだ金で生活することは、「下等な人間」になりきってしまうと不安になったか

もしれない。経済的に父に依存して生活することは、そうならないための最後の砦だったとも考えられる。

#### (10) 妹トシの死

##### ①トシとの関係

大正 11 年 11 月、トシは家族に看取られて 24 歳で亡くなった。賢治は押入れに頭をつっこんで号泣したと言う。賢治は宗旨が違うからと葬儀には出ず、棺を送り出す時に現れ、火葬場へ棺を運んだ。火葬場では法華経を読経し、父の反対にもかかわらず、持参した缶に遺骨を入れたと言う。この遺骨は後日、賢治によって国柱会本部に納められている。

トシの死を歌った臨終三部作には、賢治の悲痛な叫びが感じられ、深い喪失感が伺える。

ほんたうにおまへはひとりでいかうとするのか／わたくしにいっしょに行けとたのんでくれ／泣いてわたくしにさう言ってくれ (松の針)

どこまでも賢治と一緒にいて欲しいとトシが言うことを望んでいる。「おまへはひとりどこへ行かうとするのだ」(無声慟哭)と、トシが彼を置いて行ってしまい、1 人残される恐怖に慄いていた。なぜならば、保阪と決別した賢治にとって、トシは「信仰を一つにするたったひとりのみちづれ」(無声慟哭)であり、賢治はそのみちづれを永遠に失ってしまったのだ。矢幡は「トシを失ってついに、賢治は『信仰を同じくしたい』『そんな相手とどこまでもいっしょにゆきたい』という願いが、腹底から絞り出される叫びのように発された。そういう関係性を自分がどれほどの激しさで求めていたのか、賢治はその可能性を完全に失ってみて初めて悟ったのである」<sup>114)</sup>と述べている。

トシは賢治を理解し、受け入れてくれる唯一の存在だった。賢治は保阪の代わりに妹を「みちづれ」として選んだ。賢治とトシの関係を禁断の愛と捉える者もいるが、その実態は明らかではない。しかし、精神的には近親相姦的な愛情があったと考えても間違いはないだろう。高山は「兄が妹を『たったひとりのみちづれ』として深く愛するとき、そこにエロ的な情念が存在しないはずはない」<sup>115)</sup>と述べている。妹への愛情が深ければ、他の女性との関係を築くことは難しいだろう。賢治は禁欲を自らに課していたが、それは妹の存在が影響していたのではないだろうか。高山は「女性と肌を重ねることが、妹を『犯す』こととイメージ的につながり、生理的な耐えがたさを痛切に感じてしまうような痼疾を賢治が病んでいた可能性は十分に存在する」<sup>116)</sup>と述べている。兄妹が「みちづれ」になることは、その絆の深さやエロ的な情念によって他者を排除し、二人の関係で完結してしまう。賢治

はその関係の心地良さに浸っていたのだろう。そのため、賢治の喪失感は深かったと考えられる。

##### ②賢治の喪失感

トシの死後、佐藤は「賢治さんの落胆恩悩は、はたの見る目にも気の毒でした」<sup>117)</sup>と述べている。しかし、賢治は教師の仕事を今まで通り行っていたし、堀龍や藤原との交流も続けていた。翌年の正月には上京し、東京に滞在中の弟清六を訪ね、童話原稿を出版社に持参するよう依頼もしている。表面上は特に問題なく日常生活を送っていた。けれども、賢治はトシの死のダメージから立ち直ってはいなかったと考えられる。トシの死後、北海道に渡るまでの間、作品はわずかに 2 篇だけであるし、また、賢治の書簡も大正 11 年の年賀状は残されているものの、その後大正 14 年までの 3 年間の書簡は 1 通も現存していない。賢治が他者との接触を絶ち、自分の殻に閉じこもっていたと考えることができる。このことから、賢治の心の痛手の深さやトシの死の痛手から立ち直ることができないことが伺える。

トシの死から 9 ヶ月経った大正 12 年 8 月、賢治は青森・北海道経由樺太旅行へ旅立つ。生徒の就職活動が目的であったが、実際にはトシの死を悼む傷心旅行であった。そして、一連のオホーツク挽歌が創作された。賢治はトシの面影を追い、トシがどこにいるのか知りたいという願いが、「青森挽歌」では詠われている。

たしかにとし子にあのあけがたは／まだこの世かいのゆめのなかに／落ち葉の風につみかさねれれ他／野原をひとりあるきながら／ほかのひとのことよやうにつぶやいてあのだ／そしてそのままさびしい林のなかの／いっぴきの鳥になったのだらうか

そして、トシの死を受け止めることができず、嘆き悲しんだ。

けれどもとし子の死んだことならば／いまわたくしがそれを夢ではないと考へて／あたらしくぎつくとしななければならないほどの／あんまりひどいげんじつなのだ「青森挽歌」

「噴火湾 (ノクターン)」には、トシに置いて行かれた哀しみとトシを求め続ける気持が詠われている。

ああ何べん理智が教へても／わたくしのさびしさはなほらない／わたくしの感じないちがった空間に／いままでここにあった現象がうつる／それはあんまりさびしいことだ／(そのさびしいものを死といふのだ)／たとへそのちがった空間で／とし子がしづかにわら

はうと／わたくしのかなしみにいちけた感情は／どうしてもどこかにかくされたとし子をおもふ

青年期は「自分とは何者か」「なぜ、生きるのか」等の根源的な間に正面から向き合うことになる。死は生きることの対極にあり、生きることを考えることは、死についても考えることになる。青年期には時には死を美化したり、死に憧れることもある。賢治も中学校卒業後の焦燥感の中で自殺を暗示するような短歌を残している。

岩つばめむくろにつどひて啼くらんか  
大岩壁をわが落ち行かば (歌稿 B 131)

賢治は自分の自殺をイメージしているが、真剣に死を意識したわけではないだろうし、死を概念としてしか受け止めていないように思われる。山下は「賢治はトシの死を通じて、概念ではない本当の『死』というものを体験し、その苦しみに真摯に立ち向かっていったのである」<sup>118)</sup>と述べている。賢治はトシの死に直面し、死によって愛する者が奪われ、二度と会えなくなることや残され者の狂おしいまでの悲しみなど、死の残酷さ、悲惨さに気づき、ただ、耐えるしかなかったと考えられる。

### ③作品集の出版

トシを求める旅の翌年、大正 13 年 4 月に賢治は詩集『春と修羅』を自費出版し、12 月にイーハトブ童話集『注文の多い料理店』を刊行した。賢治は『春と修羅』の出版について、大正 14 年の森宛の手紙で「私はあの無謀な『春と修羅』に於て、序文の考えを主張し、歴史や宗教の位置を全く変換しやうと企画し、それを基骨としたさまざまな生活を発表して、誰かに見て貰いたいと、愚かにも考へたのです」(書簡 200)と述べている。賢治は詩集を、変革をもたらすような壮大なものとして位置づけ、おそらく意気揚々と発表したことと思われる。しかし、『春と修羅』は、辻潤や佐藤惣之助等に絶賛され、一部では高い評価を受けたものの、一般には認められなかった。『注文の多い料理店』は全く売れなくて、出版社が困っていたので、賢治は父から借りたお金で 200 部買い入れたと言う。

賢治が「誰かに見て貰いたい」と思ったのは、唯一の「みちづれ」であり、賢治の理解者であったトシを失ったからではないだろうか。トシに代わる誰かに作品を見て貰い、理解して欲しいという気持があったのだろう。しかし、辻らの好意的な批評に対して、賢治は「私はまだ挨拶も礼状も書けないほど、恐れ入っております」(書簡 200)と書いている。賢治は理解して欲しいと思う一方で、理解してくれる人に接近すること

ができず、距離を置こうとする。その背景には保阪やトシを失い、自分のすべてを受け入れて理解してくれる人間はいないという強い思いがあったからではないだろうか。押野は賢治が対人関係に問題があったことを指摘し、「賢治は、人に愛され、受け入れられ、認められることを心から求めている。いや、そのことだけを考えているといっても過言ではない。人に愛されることを何よりも求めている賢治が人を恐れざるをえないという苦しみは深い」<sup>119)</sup>と述べている。すべてを認められなくては意味がないという賢治の思いは、かなえられるはずもなく、賢治は人から距離を置くことで自分を守ろうとしたと考えられる。

賢治はトシを失った喪失感、そしてそれを補うために出版した『春と修羅』『注文の多い料理店』が世間に認められなかった挫折感の中にあっただが、以前のように精神的な危機に陥ることも、身体症状に逃げることもなかった。賢治がさまざまな経験を積む中で精神的に成長したことが伺える。

### (11) 花巻農学校退職

大正 15 年(昭和元年)、30 歳の賢治は花巻農学校を依願退職する。教師という仕事に情熱を燃やしていた賢治が、退職した理由については諸説がある。大正 14 年 12 月、弟清六宛の手紙には、「この頃畠山校長が転任して新しい校長が来たりわたくしも義理でやめなければならなくなったりいろいろごたごたがあったものですからつい遅くなったのです」(書簡 214)と書いている。畠山校長の推薦で奉職したという経緯はあるが、校長の交代で賢治が辞める必然性はないだろう。ただ、畠山の転出は賢治に大きなショックを与えたと考えられる。畠山は賢治を高く評価し、型破りな賢治の教育を認めていた。畠山がいたから賢治は思い通りに教師の仕事ができたという面があった。高山は、賢治のようなカリスマ性に飛んだ教師は、他の教師と協働することが難しいこと、畠山がそのような賢治を支持したことを指摘し、「この太っ腹な畠山校長が転出し、替って几帳面で堅苦しい中野校長が赴任してきた。これは賢治にとって確実に職場への適応が困難なることを意味していた」と述べている<sup>120)</sup>。

また、この時期、清六が家業を転換して家を継ぐことが決まったことも、賢治の精神的な重荷を軽くしたのではないだろうか。清六宛ての手紙には「仕事の計画はいかにも実務的ではっきりしてみてひじやうに賛成です。わたくしも多少見当の付く方面ですから精いっぱいお手伝ひします。お父さんも大へんよろこんでみます。恐らくきみはその新鮮な熱情と透明な企画とでわれわれのしがらく寂れた家(わたくしの勝手から起った)をはなばなく楽しくしてくれるだらうとお



もひます」(書簡 214)と清六に期待するという言葉を贈っている。

賢治は辞職する前年、卒業生杉山芳松に宛てた手紙に「わたくしもいつまでも中ぶらりんの教師など生温かいことをしてゐるわけには行きませんから多分来春には教師をやめて本統の百姓になります」(書簡 205)と手紙に書いている。「中ぶらりんの教師など生温かいこと」というが、賢治が教師に物足りなさを感じていたとは思えない。賢治が辞職に際して作った「生徒諸君に寄せる」という詩には、教師の仕事への思いが歌われている。

この四ヶ年が／わたしにどんなに楽しかったか／わたしは毎日を／鳥のやうに教室でうたつてくらした／誓つて云ふが／わたくしはこの仕事で疲れをおぼえたことはない

賢治は教師の仕事への情熱を失つてはいなかった。重点は農学校で教えるだけで、実際の農業に携わっていないことに置かれていたのではないだろうか。堀龍は「棒給生活にあこがれる生徒たちに、村に帰れ、百姓になれとすすめながら、自分は学校に出ていることに対して、矛盾を感じたことでしょう」と賢治の辞職の理由を推察している<sup>121)</sup>。つまり、賢治にとって教師を辞めることよりも、百姓になることが重要だったのである。自分の言葉に責任を取り、実行するというのが、賢治の生き方なのであろう。ただ、この時には、「多分」とあり、教師を辞めるかどうか揺らいでいたのではないかと考えられる。

同年6月の保阪宛ての手紙には「来春はわたくしも教師をやめて本統の百姓になって働きます。いろいろな辛酸の中から青い蔬菜の毬やドロの木の間きや何かを予期します。わたしも盛岡の頃とはずぶん変わつてゐますあのころはすきとほる冷たい水精のやうな水の流ればかり考へてみましたのにいまは苗代や草の生えた堰のうすら濁つたあたたかなたくさんの微生物のたのしく流れるそんな水に足をひたしたり腕をひたして水口を繕つたりすることをねがひます お目にもかゝりたいのですがお互ひもう容易のことでなくなりました」(書簡 207)と書き送っている。この手紙で賢治は会いたい、会うことは難しいと書かれており、実際にこれ以降、保阪との交信は絶えてしまい、二人が再会することはなかった。

保阪は同年3月に結婚し、5月に勤務先の山梨日日新聞社を辞めて農業を営み出していた。賢治は保阪の来書に対して、わたくしも百姓になって働くと答えている。保阪と同時期に賢治が百姓になる決心していることから、賢治は保阪から何らかの影響を受けたと考

えても良いだろう。

さらに、自分の心境の変化を語っている。盛岡の時は「透き通る水精のやうな水の流ればかりを考へていた」というのは、理想や観念の世界ばかり考へていたということだろう。青年は理想を追求し、社会の矛盾や不正義を汚濁しているものとして批判したり、許容できないと拒否感を抱くことがある。青年の妥協を許さない潔癖さであるが、それは、青年がまだ成人社会に入っていない、入れてもらっていないからできることであろう。つまり、アウトサイダーとして社会を外から眺め、観念的に捉えようとするために現実と齟齬をきたすからである。しかし、社会で生きていくためには、現実を受け入れたり、自らの主義主張を捨てて現実と合わせたりして、「清濁併せ呑む」という態度が必要になると考えられる。賢治の父も「お前はただ理想をいっただけのものだ。宙に浮かんで足が地に着いておらないではないか。ここは娑婆だから、お前のようなそんなきれいな事ばかりで済むものではない。それ相応に汚い浮世と妥協して、足を地に着けて進まなくてはならないのではないだろうか」と賢治を諭したと言う<sup>122)</sup>。

盛岡の頃と違い「うすら濁つたあたたかなたくさんの微生物のたのしく流れるそんな水」に手足浸しているというのは、現実の世界に足を下ろすということなのであろう。賢治も青年から成人へと成長したのだろうか。賢治は生徒に百姓を薦めながら自らは教師に留まっていることに自己矛盾を感じて、教師を辞めている。しかし、賢治が教師を続けても、生徒も卒業生も賢治を非難することはなかったろう。賢治自身が自己欺瞞に耐えられなかったのである。佐藤は辞職に関して「純情な賢治」が「自分の立場の矛盾に苦しんだのです」と述べている<sup>123)</sup>。その純情さは青年の特徴であり、賢治はいまだに青年の心性に留まり、「清濁併せ呑む」大人になにはなっていなかったと考えられる。

また、賢治は「本統の百姓」になると言っている。「本統に百姓になる」というのなら、実際に百姓の仕事をするという意味であるが、「本統の百姓」とはどのようなことなのだろうか。「ほんたふ」という言葉は、「まこと」とともに賢治が好んで使った言葉である。たとえば、『銀河鉄道の夜』では、ジョパンニは「きつとみんなのほんたふのさいわいをさがしに行く」と言うが、「けれどもほんたふのさいわいは一体何だろう」とカンパネルラに問うている<sup>124)</sup>。また、「春と修羅」では「まことのことはここになく／修羅のなみだはつちにふる」とある。この「ほんとう」や「まこと」は、「真の」あるいは「理想とする」という意味であろう。理想の百姓、真のことは、さいわいを求める賢治には、現在の自分に対する自己不全感があつたと考え

られる。つまり、現実の自分を受け入れることができず、どこかに理想とするものがあるという思いが、賢治を駆り立てたのだらう。そして、羅須地人協会の活動は、賢治の理想を実現するための試みだったと捉えることができる。

天職とも言える教師の仕事を投げ打って「本統の百姓」を目指した賢治は、自分を探し続ける青年期の心性を持ち続けていたと考えることができる。

## (12) 羅須地人協会時代

### ①本統の百姓と一人前の百姓

賢治は下根子の別宅に独居して新しい生活を始めた。岩手日報には、賢治が新しい農村の建設に努力するという記事を掲載し、「現代の農村はたしかに経済的にも種々行きつまつてゐるやうに考へられます、そこで少し東京と仙台の大学あたりで自分の不足であつた『農村経済』について少し研究したいと思つてゐます。そして半年ぐらゐはこの花巻で耕作にも従事し生活即ち芸術の生きがいを送りたいものです、そこで幻燈会の如きはまい週のやうに開さいするし、レコードコンサートも月一回位もよほしたいとおもつてゐます 幸同志の方が二十名ばかりありますので自分がひたいにあせした努力でつくりあげた農作ぶつ物々交換をおこないしづかな生活をつづけて行く考えです」<sup>125)</sup>と賢治の談話を伝えている。この談話によれば、半年は農業に従事して芸術を楽しむ理想的な生活を実践し、半年は花巻を離れて研究を行なうことになる。確かに冬期は雪に覆われる花巻で農業はできないので、その間に研究生活を考えたのであらう。合理的な考え方ではあるが、このような生活が、地域の農民の生活とかけ離れていたことは間違いないだらう。

教師を辞めた賢治は、農民生活を開始する。森宛の手紙には「学校をやめて今日で四日木を伐ったり木を植えたり病院の花壇をつくったりしてみました。もう厭でもなんでも村で働かなければならなくなりました。東京へその前ちょっとでも出たいのですがどうなりますか」(書簡 218)と書いている。賢治は農民になるよう自らを追い込んでいる。一方で東京への思いが強くなっていることも伺える。

賢治は真剣に農作業に取り組んでいた。6月に教え子の菊池が下根子の家を訪ねた時、疲れ切った賢治がオルガンに寄りかかって眠っていた。賢治の衾に食われた跡や傷だらけの足を見て、菊池は胸を打たれ、目を覚ました賢治に「先生。随分ひどうがすべ」と言った。賢治は「最近は大分よくなった。初めのうちは一日かかって二坪の開墾がやつとのもので、そのくせ身体が痛んで困ったよ。だが今ではその三倍も開墾が出来るし、書くほうも前の生活の頃よりもうんと書け

る。お蔭でおれも一人前の百姓になれそうだ」と言ったという<sup>126)</sup>。「一人前の百姓」は、地元の農民のように農作業をこなすことができることを指しているのであらう。賢治は農民にならうと努力を重ねたのである。

### ②自立と依存との間で

関は「羅須地人協会時代の賢治は、金銭や物資の窮乏にたえていました。もともと自立自営の生活を希望して父母の家を離れたのですから、当然のことでしょう」と述べている<sup>127)</sup>。賢治は協会を維持したり、生計に困る知人や農民への応援のために金銭が必要になると、実家に頼らず、教え子だった大内の父親に援助を仰いだと言う。関は、「自立しようという決意が、相当に堅固だったからだだと思います」と述べている<sup>128)</sup>。30歳になった賢治はようやく自立を考えるようになったのだらうか。

現実には賢治の父への経済的な依存は続いていた。大内の父親への借金も宮澤家が返していたと言う。さらに、その年の12月、賢治はチェロを持って上京している。父宛の手紙によると、賢治は一時間も無駄にしたくないと、上野の図書館で勉強したり、YMCA タイピスト学校、新交響楽団練習所でオルガンの練習、エスペラントやチェロの個人授業を受けたりしている(書簡 221、222)。賢治の手紙からは、花巻では得ることのできないものを東京でできるだけ多く吸収したいという焦燥感が伝わってくる。賢治が学ぶものについて、「文学殊に詩や童話劇の詞の根底になるものでありまして、どうしても要るのであります」(書簡 222)と書いている。賢治は作品を朗読する時に流す音楽を必要とし、世界の人に作品を読んでもらうためにエスペラントを必要としていた。農業よりも芸術のために必要な習い事だったと考えられる。オルガンのレッスンでは先生にほめられた賢治は舞い上がる。「もうこれで詩作は、著作は、全部わたくしの手のものです」(書簡 221)と書いている。

賢治は費用が足りなくなると、父に無心をしている。「いくらわたくしでも今日の時代に恒産のなく定収のないことがどんなに辛くひどいことか、むしろ巨きな不徳であるやうのことは一日一日に身にしみて判って参りますから、いつまでもうちに迷惑をかけたりあとあとまで累を清六や誰かに及ぼしたりするやうなことは決していたしません」(書簡 222)といつもながらの反省を述べてはいる。賢治は30歳になっても、父の経済に依存し、父も送金をしている。

そして「わたしは決して意志が弱いではありません。あまり生活の他の一面に強い意志を用ひてゐる関係から斯ういふ方にまで力が及ばないのであります。

そしてみなさまのご心配になるのはじつはこのわたくしのいちばんすきまのある弱い部分についてばかりなのですから考へるとじっさいぐるぐるして居ても立ってもみられなくさへなります」(書簡 222)と書いている。「生活の他の面」とは、芸術や宗教のことであろう。そこに力を注いでいるから、経済的な面には力が及ばないと自己弁護し、皆が自分の弱い部分ばかりを心配すると、まるで他者が悪いかのように書いている。その背景には、自分を理解してもらえないという苛立ちがあり、「ぐるぐるして居ても立ってもみられなくさへなります」となるのだろう。

### ③農民との葛藤

「一人前の百姓」になろうとする賢治の努力は並大抵のものではなかった。しかし、いくら努力をしても、賢治は周囲の農民に受け入れられなかった。苦しい生活を強いられる農民にとって、教師を辞めてまで、農業を営もうとする賢治を理解することはできなかったに違いない。それどころか、周囲の農民は賢治に反感を抱くようになる。たとえば、身体の弱い賢治は部落の共同作業に出られないので、賦役金を出した時、「なあに金を出す人あ困らない人だから」と言われた<sup>129)</sup>。また、賢治は開墾した畑でチューリップ、ヒヤシンスなどの花やトマトなど、当時としては珍しい作物を栽培し、リアカーにのせて花巻の町に売りに行っていた。しかし、売れ残ることが多く、それを賢治は子どもたちに配ったと言う。農業で生計を立てる農民にとって、作物を無料で配布することは考えられないことであり、金持ちのお坊ちゃんの道楽にしか見えなかっただろう。

農業のかたわら、羅須地人協会の勉強会、レコードコンサート、オーケストラの結成、子どもに童話を聞かせる子ども会を開いたりしていた。そこに参加する人々は、かつての教え子や賢治のシンパである青年たちであった。大人と違い、子どもや青年という若い世代は、賢治を受け入れる柔軟性があった。しかし、ほとんどの農民には理解不能であり、賢治が何を考えているかわからなかったに違いない。「本統の百姓」と「一人前の百姓」、言い換えれば、理想と現実の間に、あまりにも大きな隔りがあることに賢治も気づいていく。作品 1008 番には次のように描かれている。

土も掘るだらう／ときどきは食はないこともあるだらう／それだからといって／やはりおまへらはおまへらだし／われわれはわれわれだと／……山は吹雪のうす明り……／なんべんもきき／いまもきき／やがてはまったくその通り／まったくさうしかできないと／……林は淡い吹雪のコロナ……／あらゆる失意や病気の

底で／わたくしもまたうなづくことだ

農民との隔りの中で、賢治はうなづくことしかできない。賢治は『農民芸術概論綱要』で「おれたちはみな農民である／ずゑぶん忙しく仕事もつらい／もっと明るく生き生きと生活する道を見つけたい」<sup>130)</sup>と主張している。しかし、「われわれ」の仲間に入れてもらえずに「おまへら」のままではいなければならない厳しい現実が賢治に突きつけられる。

また、賢治は無料で肥料設計の相談を受け、農地にあった肥料を教えていた。収穫が増加すると評判になり、相談件数が増えたが、天候によっては不作となる場合もあった。作品 1088 番に歌われている。

もうはたらくな／レーキを投げろ／この半月の曇天と／今朝のはげしい雷雨のために／おれが肥料を設計し／責任のあるみんなの稲が／次から次と倒れるのだ／稲が次々倒れたのだ／働くことが卑怯なときが／工場ばかりにあるのでない／ことにむちゃくちゃはたらいて／不安をまぎらかさうとする／卑しいことだ／(略)／青ざめてこはばったたくさんの顔に／一人づつづつかって／火のついたやうにはげまして行け／どんな手段を用ひても／弁償すると答へてあるけ

賢治は仕事を投げ出したくなったり、不安を紛らわす為に働いたりする自分を卑怯と断罪している。そして、くじけそうな気持ちを奮い立たせて農民を励まし、不作の農民には弁償さえしようとした。賢治は農民と同じ地平に立つというよりも、農業指導者であり、農業を営むというよりも農民のために働くという思いが強かったのだろう。「農業指導者」と「農民」、つまり「われわれ」と「おまへら」との隔りは賢治の中にもあったと考えられる。

### ④女性の出現

羅須地人協会の活動は、賢治の理想通りにはいかなかったうえに、昭和 2 年には、協会の集会で社会主義教育を行っているという風評が広がり、賢治は警察で事情聴取を受けた。このような誤解を招いたことにより、オーケストラは解散し、集会も不定期になった。

また、賢治を慕う女性が現れ、頻りに下根子の家に訪ねてくるようになった。初めは仲間として歓迎していた賢治も、彼女の情熱が高まるにつれて、拒否的となった。賢治は彼女宛の書簡の下書きに「私は一人一人について特別な愛といふやうなものは持ちたくありません。さういふ愛を持つものは結局じぶんの子どもだけが大切というあたり前のことになりますから」(書簡 252a)と書いている。保阪、トシを失った賢治は、

誰も「みちづれ」になることはない、誰も愛することはできないという気持ちになっていたのだろう。

賢治は1人の人を大切にしたり、愛したりすることができなかつたと考えられる。その背景には、賢治自身が愛されたり、大切にされたという体験が乏しいからではないだろうか。矢幡は「賢治の『愛されない』という確信は余りにも深く、自分自身も大切にされるべき1人のかけがえのない人間であることを認めることがついにできなかつたのである」<sup>131)</sup>と述べている。賢治は1人の人に固執すれば、他のすべての人を愛することはできないという理論で、人として当り前の愛情を否定し、このような合理化で防衛を試みていたと考えられる。

昭和3年6月、賢治は伊豆大島へ向う。伊藤七雄が大島で農学校を開校しようと考え、その助言、調査のために賢治を呼んだ。また、伊藤の妹チエとの見合いの意味もあったらしい。チエは結核のため大島で転地療養をした兄を看病していた。森は昭和6年頃、賢治が「伊藤さんと結婚するかもしれませんといわれ、けれどもこの結婚は世の中の結婚とは一寸ちがって、一旦からだをこわした私ですから、日常生活をいたわり合う、ほんとうに深い精神的なものが主になるでせう」と言ったと回想している<sup>132)</sup>。佐藤によれば、「今から永久に兄妹のようにして暮らす」というのが、賢治の理想の結婚だという<sup>133)</sup>。賢治にとってトシは「ただひとりのみちづれ」であり、理想の女性だったのである。賢治は兄思いのチエにトシのイメージを求めたのかもしれないし、結核に倒れた同胞の看病をした経験を共有する者として通ずるものがあつたのかもしれないが、結局、賢治はチエと結婚することはなかつた。後にチエは森に「何かしらとても巨きなものに憑かれてあつたご様子と、結婚などの問題は眼中に無いと、おぼろ気ながら気付かせられました」と書き送っている<sup>134)</sup>。チエは賢治が結婚を望んでいないことに気づいたのだろうし、兄妹のような夫婦という賢治の思いを受け入れることは難しかったに違いない。

### (13) 東北砕石工場

#### ① 闘病生活

その年の6月、大島から東京を経由して賢治は羅須地人協会へ戻り、活動を再開するが、8月に病に倒れて1ヶ月以上、熱に苦しみ、肺浸潤と診断された。沢里宛ての手紙には「六月東京へ出て毎夜三四時間しか睡らず疲れたまゝで、七月畑へ出たり村を歩いたり、だんだん無理が重なってこんなことになったのです」

(書簡 243) と書いている。12月には急性肺炎を発病し、翌昭和4年まで療養生活を続けた。羅須地人協会の活動はすでに行き詰っていたが、事実上、8月で終

結した。賢治は力尽き、病に倒れたのである。教師の職を投げ打ってまで始めた活動が挫折したのである。

病に倒れた賢治は死の予感と恐怖の中で懸命に病と闘ったことが、「疾中」に描かれている。

睡たいからって睡ってしまへば死ぬのだから／まさ  
に発奮努力して／断じて眼を!!眼を!!!眼を!!!ひらき(略)  
こいつはだめだ／誰に別れるひまもない／もう睡れ／  
睡ってしまへ／いや死ぬときでなし／発奮すべし

しかし、病状が重くなると、賢治は自らの死を覚悟していたことが伺える。

ああ今日ここに果てんとや／燃ゆるねがひはありな  
がら／外のわざにのみまぎらひて／十年はつひに過ぎ  
にけり(ああ今日ここに果てんとや)

「外のわざにのみまぎらひて」かなわなかつた十年前の「燃ゆるねがひ」は、信仰に生きることだつたと考えられる。賢治は農学校、農村、農民のための活動に没頭したため、願いをかなえることができなかつたと後悔している。賢治は「外的な仕事」を優先し、「内的な仕事」を行なわなかつた、あるいは回避してきたと考えていた。「外的な仕事」と「内的な仕事」を両立することは難しいかもしれない。それゆえに、モラトリアム期間には、「外的な仕事」の義務から解放され、「内的な仕事」のみを行なうことが許される。しかし、賢治は32歳であり、10年前の22歳でさえ、当時としては大人とみなされる年齢であり、「外的な仕事」を猶予される青年期ではなかつた。未だに青年期の問題を解決できずに引きずっていることが伺われる。また、賢治が「まぎらひて」きた羅須地人協会の試みは失敗に終わった。このことも、賢治にとっては大きな痛手だつたと考えられる。

#### ② 鈴木東蔵との出会い

死ぬことも覚悟した賢治だつたが、次第に回復していった。昭和4年9月には「近日漸くに病勢怠り多少の仕事も致し居り候何卒御安心願上候」(書簡 248)と斎藤宛に手紙を送っている。

その年の10月、東北砕石工場主鈴木東蔵が療養中の賢治を訪問した。鈴木は花巻で自社の石灰の注文がなくなったことを不審に思い、花巻の肥料店を訪れたところ、石灰を勧めていた賢治が病気で倒れたことが原因であると知り、賢治を見舞つたのである。

鈴木は賢治よりも5歳年長であり、小農の生まれで勉強が好きだつたが、家庭の経済状況により進学はかなわなかつた。小学校高等科卒業後、役場に勤めるか

たわら、学習を続け、「農村研究家」としての著作を発表している。紆余曲折の結果、東北砕石工場を経営するようになった。

清六によると、「兄はこの人と話しているうちに、全くこの人が好きになってしまったのであった」という<sup>135)</sup>。そして、土地改良に必要な肥料を提供できるし、鈴木が、注文が少なく困っていることを知ると、「どうしても手伝ってやりたくて致し方なくなった」と述べている<sup>136)</sup>。そして、賢治は鈴木への求めに応じて、病床から広告文や石灰の効用についての解説を書き送ることになった。賢治は病気であっても気に入ったことには、のめり込んでいった。

昭和5年春には小康状態となり、教え子の沢里宛に「命を一つ拾ったやうな訳です」(書簡255)と書いている。また、羅須地人協会にかかわった伊藤忠一に「たびたび失礼なことも言ひましたが、殆んどあすこでははじめからおしまひまで病気(こころもからだも)みたいなもので何とも済みませんでした」(書簡258)という手紙を出している。自分の想いに忠実に休みなく突っ走ってきた賢治は、病を得て立ち止まり、ようやく過去を振り返って自らを反省する時間を持てたのだ。賢治は理想を求めて羅須地人協会の活動を始めたが、病を得て活動が間違っていたと総括しているが、忸怩たる思いがあっただろう。

教え子の菊池には「人はまはりへの義理さへきちんと立つなら一番幸福です。私は今まで少し行き過ぎてみたと思ひます」(書簡259)と書いている。また、沢里には「私も農業校の四年間がいちばんやり甲斐のある時でした。但し終りのころはわづかばかりの自分の才能に慢じてじつに虚傲な態度になってしまったことを悔いてももう及びません。しかもその頃はなほ私には生活の頂点でもあったのです」(書簡260)と書いている。賢治は自分の才能に慢心して羅須地人協会の構想を立てて、教師を辞めたことを悔いている。特に、「まはりへの義理さへきちんと立つなら一番幸福です」と理想とする「ほんたふの幸福」ではなく、現実的な幸福に言及している点に、賢治の変化が伺える。

同じ沢里宛への手紙には「思ひきって新しい方面へ活路を拓きたいと思ひます」「もう一度新しい進路を開いて幾分でもみなさんのご厚意に酬いたいとばかり考へます」と新しい計画への意欲を語っている。あくまでも前向きで新たな道を画策しようとする。何かを求めて歩むことが、賢治の人生だったのかもしれない。

賢治は園芸を始めたり、店の手伝いをしたり、今までの書いたものの整理をしたりしていた。昭和5年8月には「文語詩編ノート」に病気全快と書いている<sup>137)</sup>。その間にも、東北砕石工場の鈴木から手紙が届き、広告文作成や調査を行っている。9月に賢治は工場を訪

問し、積極的協力の意志を持ったと言う。鈴木宛の手紙には、必要ならば協力したいと申し出て事業の拡張を進言し、「資金調達に関する趣意書乃至計画書の如きものを今秋中に作成可致候」(書簡274)と書いている。

鈴木は賢治に多大の期待を寄せ、出資を求めたようである。それに対して、賢治は父や数人の有力者に相談したが、難しいと伝え、「小生は変な主義のために二度道家を出で只今としては之等に関しては口を開く資格無之様の訳合にて」力になれないと書いている(書簡277)。「変な主義のため二度道家を出」とは、東京へ家出したことと羅須地人協会の活動を指していると考ええると、賢治は法華経信仰や農村改革への志を「変な主義」と断っている。鈴木への依頼を断るための弁解ではあったろうが、賢治の挫折感と家族に迷惑をかけたという思いが伺える。

出資の問題があったためか、賢治は進路について心が揺れ動く。菊池宛の手紙には「たぶんは四月からは釜石へ水産製造の仕事へ雇はれて行くか例の石灰岩抹工場へ東磐井郡へ出るかも知れません」(書簡282)と書き、沢里宛への手紙には「来年の三月釜石か仙台かのどちらかへ出ます。わたくしはいっそ東京と思ふのですがどうもうちであぶながって仕方ないのです」(書簡286)と書いている。水産製造の仕事については、大島に行く折に父の指示で賢治は見学、調査をしている。賢治が水産製造の仕事を探したのは、父の思惑があったのかもしれない。

昭和6年、35歳の賢治は東北砕石工場の技師となる。賢治は恩師関に工場の状況を書き、「囑託として製品の改善と調査、照会の回答」という仕事に応じてもよいかどうか尋ねている。賢治が同封した返信用の葉書には、「小生の宿年の希望が実現しかつたのを喜びます」と書かれていた<sup>138)</sup>。賢治は恩師からお墨付きを得たのである。

賢治が石灰に興味を抱いたのは、研究生時代、関教授の元で土性調査を行なった時である。「岩手日報」に土性調査の経過として関の談話が掲載されている。それによると、「田畑には酸性土が頗る多く殆んど全く酸性土だと云っても良い程である、元来酸性土はアルカリ性塩基殊に生石灰或は石灰岩末を加へて之を救治して健康地にする必要がある」と石灰の重要性が述べられている。関は「原因が分かったので改良を実行して欲しい」と要望している<sup>139)</sup>。これが、「小生の宿年の希望」であろう。

また、賢治が研究生の時、父に将来の仕事として「セメントの原料を掘りて売るとか石灰岩や石材を売ると」(書簡72)と書いており、以前から石灰に関心があったことが伺える。さらに遡ると、花巻農学校時代にも、教え子の平は「鳥の啼かぬ日はあつても、宮沢せんせ

いが石灰岩抹と言わぬ日はない、と言われたほど、石灰岩抹とおっしゃっておられた」という証言がある<sup>140)</sup>。賢治は生徒を引率して北海道修学旅行へ行った時も、その途中、北海道石灰会社を見学し、復命書でもこの問題を取り上げ、「早くかの北上山地の一角を砕き来たりて我が荒涼たる洪積不良土に施与し草地に自らなるクローバーとチモンイとの波を作り耕地に油々漸々たる禾穀を成せん」と書いている<sup>141)</sup>。また、同

僚の白藤は「糞尿をくまないで町の人たちをこまらしてやれ—といった事も口にしたりしておりました。化学肥料を使えば、いっこう町のコエを使わなくてもいいと言うのです」と回想している<sup>142)</sup>。石灰の使用が農地を豊かにするだけではなく、農民の地位の向上にも役立つと考えていたようだ。実際、羅須地人協会での肥料設計においても、石灰の使用を薦めていた。

鈴木が技師の辞令を発送した後、宮澤家から「スグゴイ」という電報が来た。鈴木は「失礼な辞令を出したのかとも考へました。兎も角宮澤家に行きまして、敷居を高くまたぎました。然るに用件は予想うに反し、夢ではないかと嬉びに堪えざる援助策でありました」と回想している<sup>143)</sup>。父が資金協力を申し出たのである。鈴木は宮澤家と契約書を交わし、融資額や利息、賢治を技師として囑託し、報酬として年600円を現物支給すること等が決まった。

父が工場に融資をしたということは、賢治の仕事を認めたと考えて良いだろう。今まで父は賢治の実業計画を許さなかった。研究生になることを薦めたのは、徴兵制度を回避する目的であり、学問の道へ進むことを認めたわけではなかった。花巻農学校の教師を認めたのも、「お父さんは桑つこ大学というほどの養蚕を主とした学校としても、唐人の寝言のようなものを書くことよりはよいことだと喜んでいました」とシゲが言う<sup>144)</sup>ように、無職で閑居しながら文学にいそむよりは世間体が良いというくらいだったのだろう。しかし、今度は父も積極的に賢治をバックアップしている。病後の賢治の身体を配慮し、賢治の行く末を案じ、宣伝をして注文を受ける仕事なら、賢治に可能かもしれないと考えたのではないか。佐藤は父の思いを「生死の境から帰還した息子の再起ゆえに、つづす方向ではなく、やらせてみる方向に賭けたのである」と述べている<sup>145)</sup>が、商人として損はしないという計算もあっただろう。いずれにしても、賢治が希望し、父も認めてくれた仕事である。まさに、トシが望んでいた「兄上様御自身の天職と一家の方針とが一致する事」が実現したのである。

賢治は仕事に取り掛かると、精力的に動き回る。広告を作成するだけではなく、注文取りに動き回ったり、

高等農林の後輩で農業試験場に勤める工藤藤一と会ったりしている。工藤は工場の製品を試し、試験所が推奨することになる。賢治は工藤への礼状に「良質廉価の品を多産し他県よりの移入品を完全に駆逐したいと存じます。いずれにせよ工場主も割合廉潔な直情な男で自治体に関する小著等もありもうけばかりを夢見る我利我利亡者でない点甚私とも共鳴する次第、私とてもこれから別に家庭を持つわけでもなし月給五十を確実に得れば、あとはこの美しい岩手を自分の庭園のやうに考へては夜は少しくセロを弾きでたらめな詩を書き本を読んであれば文句はないのですから」（書簡309）と心情を書いている。工場主鈴木との相性も良く、仕事への意欲も見られる。一方、私生活では静に余暇を過ごしたいという希望が語られ、以前のような大きな志は影を潜めている。仕事のかたわら、趣味を楽しむという普通の生活を求めるようになったのは、羅須地人協会での挫折が心の痛手となっていたのだろうか。あるいは、自分の能力の限界を悟り、現実的に自分の生活を考えるようになったのかもしれない。

賢治はセールスマンとしても優秀であった。有能な商人である祖父や父の血筋も引いているし、商家に育ち、商売を見ていたからであろう。岩手県内だけではなく、宮城県、秋田県等にも営業に行き、新たな市場を開拓して注文を取ってくるし、その間に県庁や農業、試験場、農学校を訪れて意見を聞いたり、石灰の宣伝をしたり、推奨を得ようとした。熱を出して寝込むこともあったが、自らの身体を顧みずに仕事にのめりこんでいく。沢里への手紙には「この二ヶ月は歩いてばかりみましたがお蔭でからだもいよいよ丈夫になり仕事もどうやらできかゝりました」（書簡239）と書いている。このような賢治の努力で石灰の売り上げも伸び、生産が追いつかないほどになったと言う。

しかし、賢治は営業の仕事に疲弊していく。清六は「以前農学校で着たシャツや外套を着て、次々と沢山の店をまわり、農業会では頭を下げて懇願して注文を取るのが、馴れないことなので恥ずかしく、心も痛むようだったと詩に書いている。私共にはわざと少しも苦しい様子は見せなかったが」と述べている<sup>146)</sup>。賢治が携帯していた王冠印手帳に残された詩<sup>147)</sup>がある。

あらたなるよきみちを得しといふことは／たゞあらたなるなやみのみちを得しといふのみ／このことむしろ正しくてあかるからんと思ひしに／はやくもこゝにあらたなる／なやみぞつもりそめにけり／あゝいつの日か弱なる／わが身恥なく／生くるを得んや／野の雪はいまかゞやきて遠の山藍のいろせり／肥料屋の用事をもって／組合にさこそは行くと／病めるがゆゑにうらざりしと／さこそはひと唱へしか

工場の仕事は「あらたなるよきみち」と賢治は確信していたが、それは「あらたななやみ」となる。清六の言うように、営業の仕事を恥ずかしく思うこともあった。だろ。「肥料屋」という言葉に自虐的な気持が伺える。さらに、「病めるがゆゑにうらぎりし」と言うことは、病気になり、羅須地人協会を辞めたことを指しているのではないだろうか。今の仕事だけではなく、協会を辞めて工場の仕事を始めたことへの後ろめたさを感じていたと考えられる。

賢治は農地の改良という理想に燃え、石灰岩の販売という新たな道を見出し、しかもその仕事は父や恩師からも認められた。賢治にとっては、「よきみち」のはずであったが、厳しい現実には悩むようになった。

#### (14) 闘病生活

##### ①遺言書の作成

石灰の販売は順調であったが、農繁期が過ぎると、需要がなくなってしまった。賢治は工場の経営を考え、米の精白に搗粉として石灰を使うことや、壁材料の製造販売を企画した。昭和6年9月にその販路を拓くために、賢治は各種見本をトランクに詰めて上京した。清六は「病後でもあり、あまり重いものを持って上京するのはあぶないと、家中で心配して引きとめたが、工場としてもどうしても上京しなければならないと言っていてでかけたのであった」<sup>148)</sup>と述べている。この数日前、肥料展覧会場で宣伝パンフレット、チラシ類を人々に配り、熱心に説明をし、疲れ果てた姿を見て、工藤が同情し、それほどまでにしなくてもよいでしょうと慰めている。賢治は営業で奔走し、疲労困憊の状態だった。

東京の宿に着いた賢治は高熱を出して寝込んでしまう。それでも、鈴木には「早速諸店巡訪致し候へ共未だ確たる見込みに接せず候。何分の不景気には候へ共、充分堅実に注文を求め申すべく茲三四日の成績を何卒お待ち願上候」(書簡 392)と書き、営業を行なっているかのように装った。工場の命運をかけての上京であり、発熱で寝込んだとは知らせられなかっただろうし、心配をかけまいという配慮があったのだろう。

一方で生命の危機を感じた賢治は、遺言書を書く。父母宛には「この一生の間どんな子供も受けないやうな厚いご恩をいたゞきながら、いつも我慢でお心に背きたうたつこんなことになりました。今生で万分の一もついにお返しできませんでしたご恩はきっと次の生又その次の生でご報じたいとそれのみを願ひいたします」(書簡 393)と書いている。父母から受けた「恩」を生まれ変わっても返そうという言葉に、賢治の父母への思いが伺える。自分の我がままで、父母の

心に背いて家を継がずに心配ばかりかけ、親不孝を重ねたことや親孝行ができなかったことを悔んでいたのだろう。しかし、どのように親孝行しようとも、親から受けた恩をすべて返すことは不可能である。だからこそ、賢治は生まれ変わっても恩を返したいと願ったのである。

賢治は無償で人々のために働いたり、物を与えたりしても決して見返りは求めなかった。それは、与えられると、相手に借りを作るような負担を感じたからであろう。八幡は「賢治はいわば『受取不能症』だった。『与える』ことの過剰と『受け取ること』の不能、この極端な落差が賢治の対人関係の根本なのである」<sup>149)</sup>と述べているように、賢治は父母から与えられたものも、借りと感じ、無償の愛情として受け入れることができず、借りを返したいと思ったのである。

弟と妹達には「たうたう一生何ひとつお役に立たずご心配ご迷惑ばかり掛けてしまひました。どうかこの我儘者をお赦しください」と書いている(書簡 394)。遺言書には自分を責めることばかりが書かれている。賢治にとって「役に立たない」ことは、許されることではなかったので、許しを乞うしかないという心境だったのであろう。因みにこの遺言書は「雨にもマケズ手帳」とともに、賢治の死後にトランクの蓋の後から見つけ出されている。発見した清六は「この手帳と手紙が、遺稿全部のなかでも、非常に重要なものであることが、臆ろげながら私にも解って来た」と述べている<sup>150)</sup>。偶然のなせる業か、賢治が意図的に隠したのかは定かではないが、心のうちの重要なものは、そっと隠しておきたいという思いが賢治の中にあっただのではないだろうか。押野は「賢治の他者認識を一言で言えば、他者同士そう簡単にわかり合えるものではないということだ」と述べている<sup>151)</sup>。分かり合えないのならば、心のうちを明かすことは恐ろしいことである。それでも、処分せずにトランクにしまってあったということは、一方では自分をわかって欲しいという賢治のアンビバレントな気持の表れではないだろうか。

賢治が遺言書を書いた日、宿の人の連絡で『注文の多い料理店』の挿絵を描いた菊池武雄が見舞いに来て家に連絡をしようとしたのが、賢治は断固として拒み、「なあに風邪です。すぐによくなります」と言う<sup>152)</sup>。鈴木宛の手紙では発熱して寝込んでいることを伝えるが、「小生のことはどうせ幾度死したる身体に候間これ以上のご心配はご無用に、且つ決して宅へはご報無之様願上候」(書簡 395)と書いている。賢治は家族の反対を押し切って上京したこともあり、家族に心配をかけたくないという思いがあったのだろう。

賢治は手帳に「廿八日迄ニ退熱ケバ/病ヲ報ズルナク帰郷/退カザレバ/費ヲ得テ/(1)一月間養病/

(2)費ヲ得ズバ／走セテ帰郷／次生ノ計画ヲ／ナス」153)と書いている。仕事を続行したいと言う気持は強いが、身体が思うようにならないこともあり、半ば諦めの気持が芽生え、仕事から逃げて次の計画を立てようかと気持が揺らいでいることが伺える。

その後も発熱は続き、賢治は往診した医師のすすめもあり、父へ電話をし、「もう私も終わりと思ひますので最後にお父さんの御声を」と言った<sup>154)</sup>。賢治は死を覚悟し、最後に父の声を聞きたかったのだろうか。むしろ、父に助けを求めたのではないか。父の後押しがあって始めた仕事を途中で投げ出すことは、期待を裏切ることになり、賢治にはできなかつただろう。しかし、精根尽きるまで努力したことを示せば、父も許してくれるのではないかという思いが賢治の中にあつたのではないだろうか。

賢治の電話に驚いた父は、すぐに帰るように指示した。そして、東京在住の知人小林に頼んで、賢治を汽車に乗せてもらった。清六が迎えに出たときは、重体であつたにもかかわらず、苦しくないふりをして汽車から降り、家につくやいなや病床に臥してしまった。

## ②さらなる模索

病床でも賢治は手帳に思いを綴っていた。10月には「疾すでに治するに近し」と書き、「厳に日課を定め法を先とし／父母を次とし／近縁を三とし／農村を最後の目標として／只猛進せよ」<sup>155)</sup>とまだ、更なる前進を考えていた。11月には「雨ニモマケズ」を手帳に書いている。賢治は、その詩の中で「ミンナニデクノポートヨバレ／ホメラレモセズ／クニモサレズ／サイウモノニ／ワタシハナリタイ」<sup>156)</sup>と新たな自己イメージを求めている。

一方、鈴木からの見舞い状には代筆で「お庇様にて日増軽快に候へ共寒さに向ひ候故自重罷存候 今后又事業の方にも協力申上度と存居り候」(書簡398)と返事を出している。病気が治れば、仕事を再開したいという気持が伺われる。その後も、鈴木からは仕事の問い合わせや資金援助の申し込みの手紙が来たが、賢治は次第に工場の仕事への気持は冷めていったようだ。昭和7年2月、肥料設計を依頼してきた高橋久之丞宛ての手紙に「実は工場との関係甚うるさく私も今春きりにて経済関係は断つ積りに有之、当地にて多く売れたりとも少しも私の得にならず」(書簡403)と書いている。佐藤は「病がなかなか治らず、その苛立ちからくる気力の衰えも賢治にはあつたに違いない」<sup>157)</sup>と分析している。しかし、賢治は前述したように、「猛進せよ」と自分自身を叱咤激励しているし、デクノポーという新たな目標も見据えていた。むしろ、「あらたなるよきみち」として希望を燃やした仕事ではあつたが、

わずか半年あまりで病に倒れたこともあり、賢治は仕事への情熱を失い、別のよきみちを模索し始めたと考えられる。それでも、工場との関係は継続し、鈴木との手紙のやり取りも、賢治が亡くなる1ヶ月前まで続いた。

昭和7年、賢治の病状は一進一退であつた。3月には『グスコブドリの伝記』が棟方志功の挿絵で『児童文学』に発表された。また、佐々木喜善(民族学者)や母木光(詩人、童話作家)の訪問を受け、新たな友人ができた。母木は新聞に賢治の記事を書いたが、それに対して賢治は「何分にも私はこの郷里では財ばつと云はれるもの、社会的被告のつながりにはいつても反感の方が多いので、目立ったことがあるといつても反感の方が多い、じつにいやなのです。じつにいやな目にたくさんあつて来てあるのです。」(書簡421)と迷惑であることを伝えている。「社会的被告」という自己の定義は、賢治の悩みの根源と言っても過言ではない。この罪悪感が賢治を宗教や農民のための活動に駆り立てたと考えることができる。

賢治は「こんな世の中に心象スケッチなんといふものを、大衆めあてで決して書いてある次第でありませぬ。全くさびしくてたまらず、美しいものがほしくてたまらず、ただ幾人かの完全な同感者から『あれはさうですね』といふやうなことを、ぼつんと云はれる位がまづのぞみといふところです」(書簡421)と書いている。賢治はトシや保阪に完全なる同行者を求めたことがあつた。しかし、2人を失い、そのような同行者は存在しないことを痛いほど感じていた。だから、賢治はさびしくてたまらないのであろう。せめて「完全な同感者」として「あれはさうですね」と言ってくれる人を求めたのだろう。誰かにわかってもらいたいという賢治の切実な思いが伝わってくる。

賢治は望みを失わず、病床にあつても書き続けていた。草野新心宛の手紙の下書きには「何としても闘はなければならないといふと、それはおれの方だとあなたは笑ふかもしれません。さうでもないです。わたくしの今迄はたゞもう闘ふための仕度です」(書簡433)と書いている。賢治のそれまでの人生は、まさに挑戦し、闘い続けて倒れることの繰り返しであつたのに、賢治は「闘ふための仕度」と位置づけており、これから本当の闘いに挑もうと考えていたようである。

昭和8年、正月には何人かに病気の回復と今後の希望を書いて送っている。菊池宛には世話になつたお礼を述べるとともに、「やっと少しづつ下らない仕事して居ります。しかしもう一昨年位の健康はちょっと取り戻せさうにありません。それでもどうでもこの前より美しい本の数冊をつくりあげる希望をば捨て兼ねて居ります」(書簡445)と本の出版への執念を書いて



いる。賢治の求めていたもの、闘おうとしていたのは、文学者の道であったのだろう。実際、病床にあっても、賢治は文語詩篇や『銀河鉄道の夜』を推敲していたという。完璧に仕上げ、良い作品を残そうとする賢治の執念が感じられる。

賢治が亡くなる十日前に書いた最後の手紙は、教え子の柳原昌悦に宛てたものであった。「あなたがいろいろ想ひ出して書かれたやうなことは最早二度と出来さうありませんがそれに代わることはきつとやる積りで毎日やつきとなつて居ります」(書簡 488)と書き、賢治が病で苦しい中でも、新たな道を模索していたことが伺える。

また、「私のかういふ惨めな失敗はたゞもう今日の時代一般の巨きな病、『慢』といふものの一主流に過つて身を加へたことに原因します。僅かばかりの才能とか、器量とか、身分とか財産とかいふものが何かじぶんからだについたものででもあるかと思ひ、じぶんの仕事を卑しめ、同輩を嘲けり、いまだこからかじぶんを所謂社会の高みへ引き上げに来るものがあるやうに思ひ、空想のみ生活して却つて完全な現在の生活をば味ふこともせず、幾年かゞ空しく過ぎて漸くじぶんの築いてゐた屋敷の消えるのを見ては、たゞもう人を怒り世間を憤り従つて師友を失ひ憂悶病を得るといつたやうな順序です」(書簡 488)と自らの人生を振り返っている。賢治は自分を過大視するあまり、自惚れてしまい、仕事をおろそかにしたり、同輩を見下して現実の生活に真剣に向かい合うことを怠ってしまったこと、理想を追い求め、空想の中で生きてきたけれど、挫折を繰り返すことになったと自分の人生を捉えている。賢治は「空想のみの生活」が消えたことを、人や世間のせいだとして怒りを抱いていたと打ちあけている。自己犠牲をいとわず、他者のために尽してきた賢治の心の中には、このような烈しい怒りや憤りがあったのだ。その結果、「師友を失い、憂悶病を得る」と冷静に解釈している。そして、その原因を「慢」としている。米田は「明治の啄木や漱石が、協働の課題としてとりあげた自我幻想を、賢治は<慢>として、個人の内面の反省によって、いわば宗教的に解決しようとした」と述べている<sup>158)</sup>。賢治は自らの死期を悟り、自らの人生を淡々と受け入れて人生を総括している。しかし、このような境地に到達するまでには、怒りや煩悶がこころに渦巻いていたに違いない。

#### (14) 臨終

賢治は豊年を祝う秋祭りを眺めて楽しんだが、その後、容態が急変し、来診した主治医が急性肺炎と診断した。それでも、その夜、農民が肥料の相談に来ると、賢治は丁寧に対応した。賢治の容態を心配した政次郎

は怒りの色をあらわにし、イチははらはらして落ち着かなかったと言う。その夜、清六と一緒に寝たが、「おれは原稿はみなおまえにやるからもしどこかの本屋で出したいといつてきたら、どんな小さな本屋からでもいいから出版させてくれ、こなればかまわないでくれ」と伝える。賢治は父には「この原稿はわたくしの迷いの跡ですから、適当に処分してください」と言ったが、母には「この童話は、ありがたいほけさんの教えを、いっしょうけんめいに書いたものだんすじゃ、だからいつかは、きつと、みんなでよろこんで読むようになるんすじゃ」<sup>159)</sup>と言った。清六や母に言ったことが、賢治の本音であったに違いない。

翌9月21日、容態が急変する。政次郎は「なにか言つておくことはないか」と聞くと、「国訳の妙法蓮経を千部つくつてください。私の一生の仕事はこのお経をあなたの御手元に届け、そしてあなたが仏さまの心に触れてあなたが一番よい、正しい道に入れますやうにということを書いておいてください」と賢治は応える。父は「たしかに承知した。おまえもなかなか偉い」と言い、部屋を後にした。賢治は清六に「おれもとうとうおとうさんにほめられたもな」と微笑した。賢治が他者の評価に敏感であったのは、父に評価され、認められることを望んでいたからではないだろうか。その後、母から水をもらい、美味しそうに飲み、母が「ゆっくり休んでんじやい」と言つて部屋を出ようとした時に、賢治は息を引き取つた<sup>160)</sup>。

賢治は法華経を伝えることが、一生の仕事であつたと述べている。賢治は農学校の生徒たちに「人間は何故生まれてきたか、ということを知らなければならぬために、この世に生まれてきたのです。そしてこの問題を本気になって考えるか考えぬかによって、その人の生存価値が決定すると思います」<sup>161)</sup>と教えている。それが、本気で考えて得た結論だったのであるか。

## 7. 賢治のアイデンティティの変遷過程

基盤としての幼少期から児童期にかけて、賢治は大事にされてはいたが、母親に充分甘えられず、良い子でいることを強いられた。また、宗教的な雰囲気の中で人の役に立つことを教え込まれていった。さらに父親は些細なことも心配し、細やかな配慮をするが、支配的であつた。この様な養育環境の中で、賢治が大人になるための基盤は不十分だつたと考えられる。

賢治は小学校の頃は、宮澤家の長男として父の後を継ぎ、古着・質商になると考えていた。しかし、盛岡中学に入学し、自我を確立させる中で、家業を継ぐことへの拒否感を募らせた。上級学校への進学を許可されないために賢治は自暴自棄になり、学業も放棄してしまつた。

中学卒業後は、家業に傾倒することもできず、他の職業を選択することもできない八方塞の状況の中でアイデンティティ拡散状態となり、精神的にも危機的な状態に陥った。盛岡高等農林への進学を許可され、モラトリアム期間を得ることで危機を脱した。

賢治は関教授について土性学を学び、優秀な成績を収めたり、親友保阪と出会い、文芸誌に短編や短歌を発表するなど充実した日々を送った。この時期は漠然と実業を起こすことを計画していた。しかし、卒業時には進路について迷い、徴兵制度を回避するために研究生になることを薦める父と実業を志す賢治は対立する。結局、賢治は研究生になるが、仕事に懐疑を抱き、病を得たこともあって辞職するが、再び、アイデンティティの拡散状態になり、危機的な状況に陥った。保阪の支えもあり、トシの看病のために上京した賢治は、安定を取り戻す。しかし、実業の立案をするものの、危うさゆえに、父は許可しなかった。実業への希望を打ち砕かれて帰郷した賢治は精神的な危機に陥った。

賢治は宗教を心のよりどころにして危機を脱し、宗教上の問題で父に対抗しようとした。賢治は国柱会へと家出し、自立を試みた。自活しながら、宗教活動、創作活動に没頭したが、父は懐柔策で賢治を引き戻そうとした。この間に、親友保阪との関係も破綻し、原稿の売り込みも成功せず、賢治は東京にも居場所を見ることができなかつたために、トシの病気を契機に故郷に戻るしかなかった。

賢治は花巻農学校の教師となり、農民やその生活に初めて直面することになった。教師として充実した日々を送っていたが、その間にトシを亡くした喪失体験を経て出版した詩集と童話集が認められなかった。そして、ほんとうの百姓を目指して辞職し、羅須地人協会の活動を始めた。しかし、賢治は農民から受け入れられない現実に疎外感を抱くようになった。この活動も行き詰まり、賢治の病気によって幕を閉じた。

回復した賢治は東北砕石工場の技師となった。石灰石によって肥沃な農地に変えていくという賢治の理想にもかかない、父の後押しや恩師関の承認もあり、ようやく賢治の理想とする仕事が周囲にも認められた。しかし、実際には営業の仕事に追われ、賢治は仕事に懐疑的になり、無理がたたり、病に倒れてしまった。

病中でも賢治は出版への意欲を抱き、書き溜めた原稿の推敲を重ねたり、詩作を続けていた。その中で賢治は「デクノボー」という理想像を描いたが、その理想を追求することはかなわず、死をむかえることになった。

このように賢治のアイデンティティは変化しているが、中学卒業後と研究生を辞職した後にアイデンティティ拡散の危機に陥っている。家業を継ぐことを回避

したい賢治は、職業の選択に直面すると、精神的に追い詰められ、不安定な状態になった。中学卒業後は、高等農林へ進学し、職業選択の問題を先送りすることで、危機を脱している。研究生辞職後は、親友保阪に支えられたり、宗教的なアイデンティティを獲得して、家から逃げ出すことで回復している。

その後、故郷に戻った賢治は家業を継ぐことを強制されず、教師、作家、農民、工場技師と変遷をたどった。校長等の誘いで就いた教師の仕事は、自ら辞職してしまい、作家としては世間に認められず、自ら望んだ農民、工場技師は病気のために挫折してしまった。このように賢治は社会の中で自らの位置を見出すことができず、アイデンティティの形成は困難であったと考えられる。

## 8. 背景としての大正時代

### (1) 大正時代の概観

賢治は明治 29 年に生まれ、に明治から大正への移行があったのは、盛岡中学 4 年生 (16 歳) の時であった。賢治が青年期を大正時代に過ごしたと考えて良いだろう。

大正時代は 14 年と短い期間であったが、大きな変化が起きた時代だった。日本は明治より欧米を目指して近代化に力を入れ、富国強兵の国策の元、日露戦争の勝利でようやくアジアの大国と認められるようになった。そして、1914(大正 3)年から始まった第一次世界大戦は、日本に産業の発展と経済成長をもたらし、資本主義が確立した。一方、政治も大きく変わり、明治時代の藩閥政治に対する不満や批判が高まり、大正デモクラシーといわれる政党政治が確立した。大正デモクラシー運動には労働者や農民も参加し、そのような時代の中で大衆文化が花開いた。しかし、大戦後には一転して不況となり、労働者や農民の暮らしは厳しくなるばかりで、米騒動や労働争議が各地で勃発した。1925(大正 14)年に普通選挙が実施されたが、その反面、治安維持法が改正され、社会主義運動の取締りが強化された<sup>162)</sup>。

長山は大正時代について「一握りの勝ち組と、大多数の負け組という格差が拡大した時代だ。そして、モダンな都市文化が栄える一方では、切り捨てられた地方の貧困が深まっていくという切実な問題もあった」と述べている<sup>163)</sup>。

竹村は「政治、経済、文化あらゆる領域で未知との遭遇が重なったという点で『大正』は大いなる可能性の時代」ではあるが、「国防国家の土台をつくった国家総動員体制のルーツであるという視点からみると、時代の可能性は虹のようにはかないものであったともいえる」と述べている<sup>164)</sup>。時代の閉塞感が高まる中で、

時代は軍国主義へと動いていったのである。

## (2) 大正時代の青年

徳富蘇峰は『大正の青年と帝国の前途』の中で「大正の青年は恰も金持三代目の若旦那に似たり」と定義し、「我が金持ちの若旦那たる、大正の青年に取りては、過去に創業の苦を嘗めず、現在に経営の労に服せず、将来の発展の望みを繋げず。徒に取るに任せて取り、成るに任せて成すのみ。即ち唯だ境遇が我を動かす以外には、我より境遇を動かさず」と述べている<sup>165)</sup>。明治時代は新たな近代国家を建設するという目標に向かって日本では、青年もまた国家のために、創業の苦を嘗めたのであろう。そして、前述したように日露戦争の勝利により日本は列強国として地位を確実にし、ある程度目標を達成したのである。国民の間で高まっていたナショナリズムは急速に衰え、農村では地域社会の利益を重視する傾向が強まり、都市においても国家、政治から離れて実利をも求める傾向が現れた。つまり、資本主義の発達により、国家よりも個々の利益が優先されるようになったのである。

このような社会の中で青年層においては藤村操の自殺に象徴されるように、人生への懐疑等、自我の確立と時代との葛藤といった社会問題も発生していた。蘇峰はそのような青年を苦勞知らずで、受動的であるととらえている。

蘇峰は若者を勉学に励み、対人関係も良好な「模範青年」、金持ちになることを目標とする「成功青年」、此の不可なる世を、如何に渡る可きか当惑する「煩悶青年」、趣味に耽溺する「沈溺青年」、空々寂々として、其の日其の日を送る「無色青年」に分類している。賢治は蘇峰の分類に当てはめれば、生き方に悩む「煩悶青年」とも言えるし、趣味に耽溺する「沈溺青年」の一面もあるだろう。長山はその分類を「現代若者論でしばしば用いられる『安定志向』『勝ち組』『ひきこもり』『おたく』『フリーター』といったキーワードと通底する問題意識が出揃っている。大正時代は、まことに平成期とよく似ている」と述べている<sup>166)</sup>。

また、蘇峰は社会にも問題があるとし「吾人は寧ろ国家に向て、多大の遺憾ある也。蓋し国家が青年を無視すればこそ、青年も亦た、国家を無視するなれ。国家が青年を邪魔者に扱へばこそ、青年も亦他国家を邪魔物に取扱ふなれ」と指摘している<sup>167)</sup>。一方で若者には「何よりも先づ意育の必要を、説かずんばあらず。意育とは、意志を教育する也。我が意志を鍛錬して、鞏固ならしむる也」と意志を明確にしていくことを薦めている<sup>168)</sup>。

青年は自分らしさを確立し、社会へ参加し、社会に適応して成人になっていくが、青年を受け入れるべき

社会が、青年の参入に消極的であったり、拒否したりすれば、青年は社会に参加することも成人になることも困難になる。社会に自らの居場所を見つけられない青年に問題があるだけではなく、居場所を与えない社会にも問題があるという蘇峰の指摘は、現代社会にも通ずるものがあるだろう。

## (3) 高等遊民問題

賢治は中学、高等農林へと進学し、21歳まで学であったが、当時の大多数の若者は10代で仕事についていた。湯沢によると、旧制中学校、女学校、実業学校、師範学校等の中等教育に進学できる者は、全国的にみて、大正4年で該当年齢の8%、大正14年でも15%程度だったという。大学、高等学校、専門学校などの高等教育機関へ進学できるものは大正末でも一部の有産階級のみで、全体からみれば、1%足らずだったという<sup>169)</sup>。大多数の者は小学校の尋常科を卒業した12歳か、高等科を出た14歳で仕事に就いていた。つまり、高等農林学校を卒業した賢治は選ばれたエリートだったのである。父が家業を嫌々手伝う賢治に「きさまは世間のこの苦しい中で農林の学校を出ながら何のぞまだ」(書簡154)と叱るのも、エリートである賢治への期待が大きかったからに違いない。また、賢治も保阪への手紙に「古着の中に座り、朝から晩まで本をつかんでゐるか、利子やもうけ歩合の勘定をするかしめてゐます。これが体裁のよいことか悪いことか農学得業士がやってはづかしいことか恥ずかしくないことか健康によいことかわるいことかどうも何にせよ仕方ありません」(書簡93)と書いており、高等農林を卒業した者のプライドが伺える。

大正時代になると、学校の価値が社会に定着する中で、進学欲求も普遍化し、中学校進学希望者が急激に増加し、受験競争が激化した。大正元年には進学志望者に対する中学入学者の割合は49%、大正10年には37%となり<sup>170)</sup>、中学校受験の厳しさが伺える。また、資本主義経済の発展を支えるために、高度な技術者や中堅以上の指導者養成を求める経済界からの要請があり、高等教育の拡充も進んだ。大学も大幅に増え、大正元年には帝国大学4校だったのが、大正15年には、帝国大学5校、公立・私立大学32校、計37校となり、学生総数も6倍に増えた<sup>171)</sup>。

このように高等教育が拡充し、進学者が増えたものの、不況による就職難の時代となり、明治後半から大正にかけて「高等遊民」が社会問題となった。「高等遊民」とは高等教育を受けても職業につかない人のことである。しかし、高等遊民にも二つのタイプがあると考えられる。ひとつは、夏目漱石の言ういわば「恒産の上に徒食出来る身分の者」<sup>172)</sup>で、世の中に地位・

名誉や職業・財産などを求めず、世の中から半ば離れ、世の中を見据えつつ、生を楽しむという生き方である。一方、日露戦争後、経済が行き詰まる状況の中で増加したのが、教育制度改革の動きにつれて増加した未就業者「智識ある窮民」である<sup>173)</sup>。前者は自ら望んだ生き方であり、遺産や親の仕送りなどで金銭的には困らない人々である。後者は生活のために職を得て働きたいにもかかわらず、職が見つからないために無職でいる者である。

石川啄木は「時代閉塞の現状は嘗てそれら個々の問題に止まらないのである。今日我々の父兄は、大体に於て一般学生の気質が着実になったと言って喜んである。しかも其着実とは単に今日の学生のすべてが其在学時代から奉職口の心配をしなればならなくなったといふ事ではないか。さうしてさう着実になってあるにも拘らず、毎年何百といふ官私大学卒業生が、其半分は職を得かねて下宿屋にござろしてゐるではないか」と述べている<sup>174)</sup>。さらに、中等教育を受けた者について「彼等の何十倍、何百倍する多数の青年は、其教育を享ける権利を中途半端に奪はれてしまふではないか。中途半端の教育は其の一生を中途半端にする。彼らは其生涯の勤勉努力を以てしても毎月三十円以上の月給を取る事が許されないのである。無論彼等に満足する筈がない。かくて日本には今『遊民』といふ不思議な階級が漸次其数を増しつつある。いまやどんな僻村へ行っても三人か五人の中学卒業生がある。さうして彼等の事業は、実に、父兄の財産を食ひ減す事と無駄話をする事だけである」と厳しい現状を述べている<sup>175)</sup>。

花巻農学校の教師時代、賢治は卒業生の就職先を求めて、北海道、樺太へと出張している。また、大正14年、卒業生の杉山宛の手紙には「内地はいま非常な不景気です。今年の卒業生はもちろん古い人たちや大学あたりの人たちまでずいぶん困る人も多いやうです」（書簡205）と書いている。それ程、就職難の時代であり、学歴に見合った仕事を見出すことは困難であったと考えられる。

賢治は「高等遊民」という言葉を知っていた。『宮澤賢治辞典』によると、「詩『不貪慾戒』には『そのとくい的高等遊民は／いましつかりした執政官だ』とある。また、『よだかの星』の市蔵は、漱石の『彼岸過迄』の須永市蔵と響き合う」<sup>176)</sup>とされている。賢治が啄木や漱石の著書を読んでいと推測することができる。

賢治は漱石の言う高等遊民的な生き方に憧れていたと考えられる。研究生を辞退し、進路に迷っていた頃、勉強して暮らしたいという希望を抱いており、保阪に宛てた手紙には、「私はなにもできないのです。(略)それでもやっぱり稼ぎたくて仕方がないのです。毎日

八時間も十時間も勉強はしてあります。がこれは何だか私にはこのごろ空虚に感じます。もしこの勉強がいつまでも続けられる事情ならば斯うは感じますまい」(書簡83a)と書いている。働きたい気持ちと勉強したい気持ちの中で揺れ動いていることが伺える。その解決策として、35歳迄働いて、働かなくても生計が維持できるようにして「三十五からは私はこの『宮澤賢治』といふ名をやめてしまつてどこへ行つても何の符丁もとらない様に勉強して歩ませう」(書簡83a)と書いている。賢治は許されるものなら、高等遊民的な生き方がしたかったと考えられる。しかし、賢治は「人の役に立ちたい」という思いが人一倍強かった。また小沢は「賢治の如き弱虫が無為にて得る立場にあったなら、働いている人への劣等感でどうにもならない事は、切り切った話である」<sup>177)</sup>と述べている。賢治はとても高等遊民にはなれなかったのである。結局、働くことを選択し、国柱会時代、教師時代、羅須地人協会、東北砕石工場時代には、経済的自立に結びつかなかったとはいえ、賢治は身を粉にして働いている。このように考えると、賢治を漱石の言う高等遊民と捉えることは適切ではないだろう。

一方、啄木が指摘した『遊民』といふ不思議な階級に賢治は該当するのだろうか。吉田司は「宮澤賢治とは、この「遊民」といふくふしぎな階級>の一人だったのではないか、(略)とても世の中一般の“ものの役に立つ”ような男ではなかった」と捉え、賢治が父に経済的に依存していたことを指摘し、「まさに『彼等の事業は、実に、父兄の財産を食ひ減ぼす事と無駄話をする事だけ』の、見事に立派な『高等遊民』ではなかったろうか」と述べている<sup>178)</sup>。

経済的に自立できず、社会への参加が困難であったという観点から捉えれば、賢治は啄木のいう『高等遊民』だったかもしれない。賢治は常に働きたいと考えてはいたが、就職することよりも、自分で起業することを考えていた。実業の計画を父に反対され、家業を手伝っていた頃、保阪宛ての手紙に「若しできるならば早く人を相手にしないで自分が相手の仕事に入りたいと思つてあります。えらい人たちは烈しい人の心の中で恐れず怒らず自分の道を進んで行くやうですが私にはそんなことは当分見込ありません。やはり険しい世界へ入ればそれにばかり気をとられてしまひます。

(略)多分まだ林のなかへは入り兼ね小さな工場を造つてその中で独りで、しんみりと稼ぎませう」(書簡93)と書いている。賢治は社会に出ることに気後れしており、とてもできないと回避しようとしている。賢治は社会に参加することへの強い不安を抱いており、官庁や企業に就職して上司や同僚と協働することは、恐れと怒りを感じさせるものであり、独りで何かした

いという気持が強かったと考えられる。

現代も、就職活動ができなかったり、ひきこもってしまい、社会への参加が困難な若者がいる。彼等も賢治のように社会へ参加することに躊躇しているのだろう。しかし、啄木も指摘したように若者だけの問題ではなく、若者を受け入れる社会の問題でもある。特にアメリカの金融不安が引き金となった不況の中で啄木の言うような時代閉塞感が強くなっており、「遊民」という言葉を「フリーター」、「ニート」に置き換えれば、現代の青年も大正の青年と同様の問題を抱えていることが理解できるだろう。

長山は「最近ではやや理解されるようになってきたものの、フリーターやニートは『親が甘やかしている』『怠けている』と考えられがちだ。しかし実情としては若年失業者であり、学校教育と実社会での職業需要のズレという社会的な問題が、いちばん原因なのである」と述べている<sup>179)</sup>。大正期に起きた学歴のインフレは現代社会でも起きている。しかも、大正時代は、一部特権階級の青年の問題ですんだが、現在、日本では大学、短大、専門学校をあわせた進学率が50%を超えていることを考えれば、半数以上の青年の問題であり、より深刻な状況にあると受け止めなければならぬだろう。

#### (4) 家長としての父親像

第2次世界大戦前は、戸主を中心と家制度が存在し、戸主は親族を養う責任を負っていた。明治31年に施行された明治民法では、戸主権が規定され、婚姻や家族の居所指定権についても戸主の許可が必要であった<sup>180)</sup>。つまり、結婚も住む場所も自分で決めることができなかったのである。賢治が東京でトシの看病をしている時に「何卒私をこの儘当地に於いて職業に従事する様御許可願ひ度事に御座候」(書簡131)と父に頼んでいるのは、東京に住むためには、戸主である父の許可が必要だったからである。

戸主は父親である場合が多く、父親は威厳があり、強くて力のある存在となる。有地は家制度で縛られた家庭では「父親は儒教主義的権威に支えられて子にのぞみ、子の方もおそろしいおやじというイメージで父親に対する。母親は少なくとも表面では父親に同調するか、なにも言わない。人間としての感情の交流、心の通い合う暖かい言葉のやりとりがない家族内の人間関係を示している」と述べている<sup>181)</sup>。

賢治の父親も威厳を持った父親だったと言う。森は家族から聞いた話として、父が不在の間、賢治が母やきょうだいに面白おかしく話を聞かせ、皆を笑わせていたが、「父が帰宅すると、いずれ精神の緊張をゆるめっぱなしにしている家人どもには、いっぺんにビリビ

リッと強く感電したように、なるのである。(略)賢治は、パッとたちまち四角四面になってその場に座るとか、電光石火サッと裏の畑に出ていってしまう、切り替えが早いのだ」と述べている<sup>182)</sup>。また、母から聞いた話として、羅須知人協会時代、差し入れた食事を賢治が拒絶した時、母と妹クニは心配で涙したが、「わたしとクニとは、泣いているところをお父さんに見つかったりしたら、涙どころか目に火がでるほどきびしくくられる(叱られる)ので、ふたりで声を立てないようにして台所の隅で泣いておりました」と述べている<sup>183)</sup>。賢治の家庭も、父は威厳を持ち、感情の表出が許されない雰囲気があったと考えられる。しかし、前述したように、賢治の父は賢治に対して細やか配慮や包み込むような愛情を示している。むしろ母性的ともいえる父が、父性性を示すことができたのは、儒教的な家制度が前提としてあったからだと考えられる。

大正時代になると、デモクラシーの影響や西欧の家族観が取り入れられたりして、家制度への批判と家庭の民主的改造が議論された。一方、教育を受けた子どもたちは、自分なりの考えを持つようになり、独善的であったり、理不尽な父親を批判的に見たり、反発するようになった<sup>184)</sup>。

賢治の父は実業家としても、宗教心の篤い真面目な人格者としても認められていたために、賢治が正面から父を批判することは難しかったであろう。賢治は実業を起業することで、合法的に父に対抗しようとしたが、父の反対でかなわず、宗教によって反抗しようとした。賢治の反抗を父は正面から受け止めて、議論を重ねたが、宗教上の論争は勝敗がつくものではない。賢治は国柱会入会、家出によって、父の呪縛から逃れようとしたが、賢治の反抗に対して父は毅然とした態度で臨むことがせず、懐柔策で賢治を引き戻そうとした。山内は「ふつうには、『父』に対する『子』の立場は、父への同一化志向、および父からの脱出志向というふたつの相反するベクトルをひとつの『方向性をもった力=ベクトル』に転換・合成することによって確立される。けれども、同一化志向は、対象へと動き得る一定の距離を必要とするし、また、批判=脱出志向も、対象を相対化し得る距離を必要とする。賢治のように、対象=父の圏内に、外的にも内的にも包摂され、主体がまさに押しつぶされようとしている場合、この距離は失われ、方向性をもった力としては外在されず、行方を見失った力は彼の内部に不安定なまま浮遊せざるを得ない」と述べている<sup>185)</sup>。つまり、賢治は父に同一化することもできず、反抗することもできなかったために、大人になることが困難であったと考えられる。

賢治の死後、父は「あれは、若いときから、手のつ

けられないような自由奔放で、早熟なところがあり、いつ、どんな風に、天空へ飛び去ってしまうか、はかりしることができないようなものでした。私は、この天馬を地上につなぎとめておくために、生まれてきたようなもので、地面に打ち込んだ棒と、綱の役目をしなければならぬと思ひ、ひたすらそれを実行してきたのであります」と語っている<sup>186)</sup>。賢治を自由に飛び立たせることができず、手元に繋ぎ止めておきたかった父の気持が伺える。本来、父性は子どもと母の絆を断ち切り、子どもの自立を促進させる役割を担う。しかし、賢治の父は絆を断ち切るどころか、自らが母性的な絆の役割を担っていたために、賢治は飛び立つことも自立することもできなかつたと考えられる。そのために、自立したいができないという葛藤を抱きながら、生涯、父の庇護の元で暮らすことになったと考えられる。

それでも、賢治の父は家制度の中で厳しい父としての立場を確立していた。元々、日本は母性的な社会と言われ、父性よりも母性が強いと言われ、家制度は父性の弱さを補っていた一面があるかもしれない。家制度が崩壊し、民主的な家庭へと変貌をとげた現代では、父親の存在はますます希薄になり、母子の密着した関係によって起きる問題が顕著になっている。脆弱な父性のあり方が、より若者の自立を困難にしていると言っても過言ではないだろう。

#### (5) 大正時代の農村と改革運動

戦時景気のもと、工業化が進み、それに伴って工業労働者が求められ、農村から都市へと人口の移動が起こった。造船業、海運業、製鉄業などを中心に成金として膨大な富を得る者が表れたし、農村でも繭の売り上げが増え、一部の地主や農民は好景気に沸いた。しかし、驚異的なインフレが起こり、特に穀物の値段が暴騰し、農民や労働者の生活が苦しくなった。

大戦後は一転して不況に陥り、農村も疲弊し、慢性的な農村不況がすすみ、農業形成の基盤は大きく崩された。富の分配に対する不公平感が強まり、社会運動が激化した。ソ連成立の影響もあり、大正 15 年には無産政党が次々に新党を結成した。しかし、時代閉塞の状況を打破するために、社会運動に飛び込んだインテリの大半は地主や裕福な家庭の子女であり、彼らの考え方と労働者や農民との意識との間には大きなズレが存在した<sup>187)</sup>。

賢治も社会主義に関心を持っていたことは指摘されており、羅須地人協会時代に労働農民党との関係は密接であったと言われている。大正 15 年、労働農民党支部の事務所開設にあたって賢治の助力があったというし、資金援助を行っていたと言う。前述したように、

昭和 2 年には羅須地人協会で社会主義教育を行なっているのではないかという疑いを持たれ、事情聴取を受けたこともあった。農村や農民の生活を改善しようとする労働農民党と賢治の思いには共通点はあったかもしれない。しかし、賢治は社会主義運動で農民を救済しようとした訳ではない。清六が「彼はあの頃の社会主義者達と全然異なった道を歩いて行った。社会運動をやる代わりに、稲作増収の肥料設計と、石灰岩抹の幾百車かを酸えた野原にまき散らした」<sup>188)</sup>と述べているように、米の生産を増やすことで農民の生活を豊かにしようとしたのである。農業指導者としての知識やアイデンティティが賢治にあったからであろう。

当時、文学者や文化人の中に農村へと目を向ける者が表れた。白樺派の武者小路実篤は大正 7 年に「新しき村」を開拓した。また、同じ白樺派の有島武郎は大正 11 年に北海道における農場の小作人への無償譲渡を行なった。彼らは理想や幸福を追求しようと活動を起こしたが、農業経験も乏しく、いずれの試みも失敗に終わった。

また、画家の山本鼎は芸術と大衆、芸術と農村との関係を重視し、農民芸術運動を推進した。大正 8 年、山本は講習会で農民が制作した農民美術(木製彫小皿、木彫人形、クッション等)の即売会を東京実施し、成功を収めた。彼は「経済的効果を意味する農家の副業」を盛んにし、農村に新しい地域共同体を作ろうとした。

賢治が白樺派や山本の活動から影響を受けた可能性はあるが、事実かどうかは明らかにされてはいない。むしろ、「農民芸術概論」や羅須地人協会での実践に大きな影響を与えたのは、室伏高伸であることが指摘されている。室伏の「文明の没落」「土に返る」は大正末期から昭和初期にかけてベストセラーになり、青年知識人の愛読書であったといわれている。上田は「農民芸術綱要」「農民芸術の興隆」と室伏の著作の類似点を指摘し、「室伏の影響によってのみく土に還る生活に入ったとは言わない。しかし賢治の帰農生活に室伏の思想がかなり大きな影響を与えていたことは否定できない」と述べている<sup>189)</sup>。

このように、羅須地人協会の活動は、その時代の思想や社会の影響を受けたと考えられる。しかし、現代にまで語り継がれ、影響を与え続けているのは、賢治の実践だけではないだろうか。大正時代の疲弊した農村と農民の惨状が、賢治のこころを動かし、行動に駆り立てた。このような実践があったからこそ、賢治の作品はより重みを増したのではないだろうか。

## 9. 考察

宮澤賢治はアイデンティティの模索を続けたが、アイデンティティを獲得するには至らなかった。また、

父親から自立することができず、他者との関係においても、対象愛に発展しなかった。さらに、経済的な面では、生涯父親に依存していた。このような観点から捉えれば、賢治は青年期の心性に留まっていたと考えることができる。

ここで問題になるのは、成人になるということは、どういうことかという点である。Erikson, E.H.は、青年期にはアイデンティティを獲得し、前成人期には親密性を獲得した上で、生殖性を獲得することを成人期の課題としている。つまり、自我の連続性、恒常性、同一性の感覚を保持し、社会での自らの立場を確立し始めるとともに、他者、特に異性との心理的に親密な関係を築くことが、青年期の課題であり、次の世代を生み育てていく生産性、創造性を包括する生殖性を獲得して成人になるのである。

前述したように、アイデンティティに関しては、賢治は自らが何者であるか、自分は何ができるのかということに死ぬまで問い続けていた。また、賢治は他者のために、身を粉にして働いたが、他者との親密な関係を築くことはなかった。さらに、賢治は自らに禁欲を課し、異性との関係を回避しようとした。このように青年期のアイデンティティと親密性の課題を達成することはできなかったと考えられる。しかし、賢治は成人期の課題に取り組んだのではないだろうか。例えば、清六はトランクいっぱい作品について賢治が

「童子をこさえる代わりに書いたのどもや」と言ったと述べている<sup>190)</sup>。また、賢治は教師として生徒に教えたり、農業指導者として農民を指導することを通じて若者や農業を育てようとし、肥料を与えることで肥沃な農地を育て農村を豊に変えようとしたのである。賢治は自分の子どもを生み育てていく代わりに、作品を創造し、若者や農業を育てていくことを行なった。つまり、青年期、前成人期の課題を保留し、青年期の心性のまま、成人期の生殖性の課題に取り組んだことが、賢治の特徴と考えられる。

#### (1) 親子関係

賢治は母に十分愛されたと確信できなかったのではない。母イチは慈母として伝えられているが、病弱でもあり、次々に生まれる妹弟の世話、舅と姑の看病さらに家業の手伝いに忙殺されていたために、幼い賢治は母に甘えたいという気持ちを抑えていた。賢治の入院に母が付き添わなかったことや犬に怯えた賢治が夜中に1人で恐怖に耐えていたというエピソード等から、そのことが伺える。また、母の「ひとの役にたたなければならない」という教養は、条件付きの愛情の示し方であり、賢治は人の役に立たなければ、母に愛され

ずに見捨てられるのではないのではないかという不安を抱いたと考えられる。

父政次郎は厳父として伝えられているが、むしろ母性的な配慮や愛情を示している。それは賢治が大人になっても続いたことは、研究生の時、薄荷糖を荷物に入れておいたりや雨具の心配をしたエピソード等から伺える。さらに表面的には家長として君臨していたが、父性的な厳しさには欠けており、家出した賢治を勧奨することもなく、旅行に誘うという懐柔策で家に戻そうとしたこと、賢治の死後、天馬が飛び立たない役割を果たしたと述べたこと等から伺える。

賢治は父に囲い込まれていたために、父に同一化することも、反抗することもできず、結局は父から自立することができなかつたと考えられる。賢治は父に対抗するために、実業の計画を立案するが、父には認められなかった。また、宗教で理論武装した賢治は、父と対立して家出も試みたが、父から逃れることはできなかった。

しかしながら、父が賢治を囲い込み、経済的な援助を行っていたから、青年期、前成人期の課題を保留したまま、成人期の課題に取り組むことが可能だったとも言える。職業を得て社会に参加することは、経済的な自立につながり、このような経済的な基盤がなければ、親密性や生殖性の課題に取り組むことは、現実的に困難であろう。賢治は経済面での心配がなかったため、売れない童話や詩を書いたり、羅須地人協会の活動ができたのである。ただ、生前、賢治が評価されていたならば、文学者としての地位を築いていたかもしれないと仮定すれば、社会が賢治を受け入れなかったという問題も大きいだろう。

#### (2) アイデンティティ拡散の危機と回復

宮澤家の人々は、賢治が長男として家を継ぐことを当然のことと考えていた。父が賢治に小遣いの報告を義務付けたのも、商人として育てようという気持ちがあったからだろう。しかし、賢治は家業を嫌い、家業に傾倒することができなかった。そのために、職業選択の時期になると、進路を決定することができずにアイデンティティ拡散の状態になり、危機的な精神状態に陥った。中学卒業後は、進学してモラトリアムを延長することで危機を切り抜けた。高等農林卒業後、一旦は研究生になるが、病気を理由に辞職し、その後、実業の計画を父に却下されて家業を手伝うことになった賢治は、危機的な状況に陥った。この時は、宗教的アイデンティティを獲得することで立ち直っている。

家業の手伝いを始めると、精神的不調に陥る賢治に対して、父もどのように対応してよいか悩んだであろう。時には叱責したこともあったが、結局、賢治に家

業を継がせることはできなかった。また、賢治には商人として家業を切り盛りする才覚が乏しいことも、父は見抜いていた。賢治が立てた実業の計画も、父から見れば、危ういものであり、容認することはできなかったのであろう。つまり、家業への意欲も才覚も乏しい賢治が、家業を継がなくてはならない立場であったことが、賢治をアイデンティティ拡散へと追い込むことになったのである。

その背後には家長から長男へと継承することが、重要視される家長制度があった。大正時代、政府は天皇を父として国民を子とみなす家族国家主義を推し進めようとしていた。そのような社会的背景もあり、長男を跡継ぎとなることは当然のこととされていた。賢治は家長制度や家の重圧の中で、もがき苦しんだと考えることもできる。現代は家長制度もなくなり、家に対する意識も変化している。家から自由になったかもしれないが、家のモデルを喪失したために、家をどのように築いてくのか、新たな各自の課題となつてのしかかってくるのではないだろうか。

### (3) 社会参加への不安

社会が賢治を受け入れなかった一方で、賢治も社会へ参加することに、気後れと不安を抱いていた。高等農林卒業後、関教授に実験補助として推挙された時、引き受けることをためらっていたし、就職後も賃金に見合う仕事ができるか不安になっていた。保阪への手紙では、「やはり陰しい世界へ入れればそれにばかり気を取られたしまします」（書簡 93）と社会に参加することの不安を述べている。

しかし、賢治は宗教に傾倒するようになると、人目も気にせず、題目を唱えて歩いたり、家出後は職を見つけて自活をしたり、作品の売り込みに出かけたりしている。また、教師時代や羅須地人協会時代も社会に貢献しようとしたし、東北砕石工場の技師になった時には、有能な営業マンであった。

前述したように、賢治には人の役に立つ人間でなくてはならないという不安と人の評価に敏感に反応する過剰な自意識があったと考えられる。特に、自分は何ができるのか分からない時には、不安が強かったのではないだろうか。職業選択に直面すると、精神的な危機に陥ることもあって、職業選択を回避していたことも、社会参加への不安の原因として考えられる。しかし、賢治は宗教的アイデンティティを獲得したり、教師、農業指導者、技師というアイデンティティが保てる時には、社会に参加することができた。年齢的にも大人になり、経験を重ねたということもあるだろうが、賢治は人の役に立つと思えば、社会に参加できたのではないだろうか。

また、人の役に立つかどうかは賢治の思い込みが優先し、他者の気持への配慮や共感性が乏しいため、現実場面では、賢治の思い描く通りには進まないことが多かった。他者が受け入れてくれなかったり、拒否したりする状況に直面し、自分が役に立っていないと感じると、賢治は挫折感を味わい、役割を担えなくなったり、病気に倒れてしまったのである。その後、賢治は新たなアイデンティティの模索を始めることになる。賢治にとっては必然的な変容であったかもしれないが、このことが、アイデンティティの形成を困難にしたとも考えられる。

賢治は「自分の願いを貫くことが周囲からも期待され、自分の才能を発揮することが、そのまま社会的にも評価される」<sup>191)</sup>ことを望んだのだろう。しかし、このような状況にあるのは、少数の恵まれた人だけではないか。多くの人は、自分の願いと現実との間で折り合いをつけたり、才適度な評価でも満足したりしながら、自らの社会的な立場を受け入れてアイデンティティを確立していくのである。若者は賢治のような思いを抱くかもしれないが、理想と現実の間で妥協点を認めることが、成人には求められると考える。

### (4) 対人関係

人は他者との関係性の中で生きており、成長に伴い、対人関係も変化していく。対人関係の発達過程において、思春期以降の友人関係が重要なものとなり、Erikson, E.H.の理論によれば、前成人期の課題が親密性であるように、成人になるためには対人関係においても成熟することが求められる。

大人しい良い子であった賢治は、小学校高学年になると、同級生と徒党を組み、時には悪戯をしたりして遊んでいた。いわゆるギャングエイジと呼ばれるものであり、親からの分離を促進するという役割を持ち、子どもの発達には必要な体験である。

中学校時代、賢治は一緒にふざけたり、悪戯をする仲間はいたが、自分の趣味や興味のある世界に没頭したり、変人扱いされていたというエピソード等から、仲間はいても特定の友人はいなかったと推測される。

盛岡高等農林で出逢った保阪が、賢治の親友となり、影響を受けたり、支えられたりする存在となる。特に賢治が 22 歳から 23 歳の頃、危機的な状況に陥るが、保阪との手紙のやり取りが賢治を支えたと考えられる。そのような保阪に、賢治は改宗を迫り、すべてを受け入れてくれる同行者になることを求めた。保阪宛ての手紙には、相手にしがみつき、怒らずに自分を受け入れて欲しいという懇願が綴られている。

賢治は同行者になるよう何とか説得しようとしたが、結局、二人は決別してしまった。賢治は自分を認めて



受け入れてくれる人を求めるが、それがかなわないとなると、見捨てられる前に先に見捨てようとする。このような対人関係は、関教授との間にも見られた。賢治には見捨てられ不安が強かったと考えられる。その後、賢治は、学校の同僚を同行者の候補として接近したが、相手の拒否感を察知して諦めている。

賢治はくたったひとりのみちづれとして妹トシを選んだ。トシをみちづれにすることで、賢治の人間関係はトシとの関係に留まり、友人関係や異性との関係に発展しなかったと考えることができる。特に賢治は異性との関係を拒否していたが、異性と関わる時に、トシとの近親相姦の禁忌が呼び起こされるために、禁欲を課していたのではないか。トシは亡くなり、賢治を理解してくれる人はいなくなったのである。

その後、賢治は教師仲間や文学を通して知り合った友人と、ある程度の距離を置いてつき合うようになった。保阪とトシを失った賢治は、他者との関係を築くことに臆病になり、みちづれを求めることができなかつたのではないだろうか。この対人関係の変化は、大人として成熟したものにとらえることもできるが、賢治を孤独にしたという面もあった。

教師以降、賢治は弱い立場にある人に我が身を投げ出そうとした。万人を愛することは、誰1人も愛していないことではないだろうか。人を求めながらも特定の人のとの関係を築くことを避けていた賢治は、孤独であったと考えられる。

#### (5) 理想とする自我像の追求

賢治は気高いが、到達できそうもない理想を掲げては、その目標に向かって突っ走り、挫折しては新たな理想を目指した。理想を追い求める姿は、現代の若者の自分探しにも通じるのではないか。この心性を Kohut, H. の自己心理学の理論から説明を試みる。

Kohut, H は人の心を「双極性自己」として捉え、心には才能や優秀さ等に関する能力的自尊心を中心とする「野心の極」と正義感や公平さ等に関する道徳的自尊心を中心とする「理想の極」がある。「野心の極」には「鏡自己対象」、「理想の極」には「理想化対象」が対応すると考えている。「野心の極」に動機づけられた行動を、鏡自己対象が認めたり、賞賛すると、「野心の極」が強化されるが、満たされないと、「理想の極」へと向かうと言う<sup>192)</sup>。

乳幼児期には密接な母子関係の中で、子どもは「何でも思い通りになる」「世界は自分を中心に回っている」という幼児的万能感を持つ一次的ナルシズムの段階にある。幼児期から児童期にかけて、子どもは親が「理想化対象」と「鏡自己対象」になり、自己万能感から親万能視へと向う。理想とする親からほめられ

たり、認められると子どもは満足感を得て、一次的ナルシズムから脱却して健康的な自己愛へと変化していく。しかし、厳しい躰を受けた子どもは、いつまでも幼児的万能感にしがみつき、表面的には従順で大人しくなるが、こころの中には現実離れした誇大自己を抱くという。賢治は幼児的万能感から脱却できず、潜在的な自己愛を抱いていたと考えられる。

賢治は作家になることに野心を燃やし、「もしこれが出版されたら、いまの日本の文壇を驚倒させるに十分なのだ」と童話について語っている<sup>193)</sup>。また、「歴史や宗教の位置を全く変換しやうと企画し、それを基骨としたさまざまな生活を発表して、誰かに見て貰いたいと、愚かに考へたのです」(書簡 200)と、詩集『春と修羅』について書いている。賢治は内心ではこのように誇大的な自己万能感を持ち、大きな野心を抱いていた。しかし、それ程、自信のある童話集は売れ残ってしまったし、詩集も一部の知識人や詩人からは高い評価を受けたが、一般には認められることはなかった。

賢治は「野心の極」を満足させる「鏡自己対象」を得ることができなかつたために、「理想化自己対象」を求めて「理想の極」へと移動したのである。賢治は作品を理解しない日本人が問題だと考えていた節がある。羅須地人協会時代、賢治はエスペラントを習ったが、それは、自分の作品が日本で認められないために、エスペラントで世界中に出版しようと考えたからである。日本では認められないが、世界のどこかには自分を認めて理解して励ましてくれるような「鏡自己対象」があると考えて、それを求めようとしたのである。エスペラントとともにチェロやオルガンを習った時、先生に誉められたり、励まされたが、この体験は傷ついた自己愛を回復させた。自己愛を取り戻した賢治は再び、「野心の極」へと向かうことになる。さらに、賢治は多才であったために、文学だけではなく、農業指導者としても大きな野心を抱き、羅須地人協会の活動を始めたり、東北砕石工場の技師になったが、同じようなことが繰り返されたと考えられる。

賢治自身、「慢」という言葉で表しているように、賢治は誇大的な自己愛から脱却できなかつたと考えられる。そのために、特別な自分には、他者のために何か壮大なことができるという思いを抱き、果敢に挑戦したのである。しかし、周囲に認められなかつたり、拒否されたりして挫折すると、賢治は撤退してしまう。自分を評価して認めてくれる「鏡自己対象」が見出せないために「野心の極」は満たされず、「理想の極」へと移動することになった。つまり、挫折と理想像を追い求めることを繰り返すことになったと考えられる。賢治は他人のために働いたが、内面の誇大的な自己愛によって動かされたと捉えることもできる。

賢治の求めたものは、「まことの言葉」や「ほんたふのしあわせ」であった。理想を追い求めることが賢治の人生そのものであったと言われる所以でもある。そして、最終的に賢治の理想像は「デクノボー」であった。「デクノボー」は、無力であり、欲望からも、他者の評価からも超越している。つまり、「鏡的自己対象」を必要としない存在である。賢治は「野心の極」と「理想の極」を止揚して人格的な統合を図れたならば、「デクノボー」となれたかもしれない。

#### (6) 時代性について

大正時代は、第一次世界大戦の勃発により、経済や政治、それに伴い文化や生活も大きく変化した時代である。富国強兵という国家の目標がある程度達成したために、国家主義から個人主義へという流れを生んだ。経済の成長は資本主義を発展させたが、一部の富裕層と庶民との格差を生み出し、都市への人口流入は、都市を発展させたが、地域社会の崩壊と地方の疲弊へとつながった。大正デモクラシーの中、大衆文化が開き、教育制度も拡充されたという面もあるが、戦後の不況の中で庶民の生活は苦しくなった。不況の中で、学歴インフレが起こり、大学を出ても、職に就くことができないう若者が増加した。啄木の言うように閉塞した社会であった。

賢治は東京での生活を夢見た時期もあったが、結局は、都市化の波とは反対に故郷に根を下ろすことになり、立身出世や金儲けには背を向けて、弱者である農民や農村に関心を向けていった。もし、賢治が明治の富国強兵の時代や昭和の軍国主義の時代の人間であったならば、羅須地人協会のような活動ができたであろうか。おそらく、時代の波に飲み込まれてしまい、できなかったのではないかと推測される。大正という変革期であったために、賢治の実践活動は成り立ったと考えられる。

#### (7) 現代の青年期の問題との類似点について

大正時代と現代の若者の類似点については、前述したように長山が「大正青年の心性には、今日のフリーターやニートとほとんど変わらない傾向がみられる」と指摘している。その理由として長山は「時代の転換点には価値観の混乱が生じる。それまで常識だった考えが、なぜか適用しなくなる。『大人になったら働くのは当たり前』という常識が、あの時代、そして今、若者から消えた。これはもちろん、単純に若者の怠惰や甘えのせいではない。彼ら自身にも把握できない社会の変質が起きているのだ。それは意識的な思想潮流や制度改革で対応できるような表層の出来事ではない」と述べている<sup>194)</sup>。長山が指摘するように、現代の青年

は社会の変化の中でアイデンティティを確立し、社会に参加することが困難になっていると言えよう。

大正時代の青年であった賢治と現代の若者との間には類似点が見られる。山下は賢治の人生を「フリーター、自分探し、パラサイトシングル、シスコン」と現代のキーワードで捉えている<sup>195)</sup>。吉田は『くう・ねる・あそぶ』という<飽食時代>のバブル感覚、高等遊民感覚を経験している現代の私たちにとって、賢治の『遊民』性はとても身近で共鳴できる部分が多い」と述べている<sup>196)</sup>。賢治同様、現代の青年も成人期へ移行することが困難であり、賢治に共感する部分があることを示唆している。

現代は青年だけではなく大人になっても、自分の生き方に惑い、悩む者が少なくない。価値観、規範等の変化に伴って「大人」概念も変化してしまったからである。金原瑞人は「かつては『大人』になる前段階で誰もが渡らなければならなかった川が、ある意味ですっかり干上がってしまい、昔のやり口では、大人になろうにもなれない状態が生じた」と述べ、「大人になれないまま、同時に成熟もしなければならぬような、複雑な事情が出現してきています」と現代社会の問題を指摘している<sup>197)</sup>。つまり、大人と言われる世代になっても、大人とは何かという明確な基準を喪失し、どのように大人にならたらよいのか、どのように大人として生きていくのかが分らない混沌とした状態が生じているのである。

賢治は、金原の言うように「大人になれないまま、成熟した」のではないだろうか。自分を犠牲にして人のため働いたことも、言い換えれば、自分とは何かというアイデンティティを確立しないままに、次世代の人を教え育てる成人期の生殖性の課題に取り組んだと考えることができる。その生き方は、危うい基盤の上に築かれ、自己破滅に至る危険をはらんでおり、それ故に、魅力的で美しく見えるのではないだろうか。

#### おわりに

宮澤賢治の伝記資料を辿ることで、青年期の心性とアイデンティティ形成過程を考察してきた。伝記的研究では主に Erikson, E.H. の理論に基づいて分析が行われてきた。青年期の発達過程を理解するためには、彼の理論は有益ではあり、本論文でも Erikson, E.H. の理論に依るところが多い。

しかし、事例研究ととらえるならば、他の理論からの視点も必要ではないだろうか。本論文でも Kohut, H. の理論からの検討を加えることで、賢治の心性を別の角度からもとらえることができたと考えている。ただ、伝記的研究と事例研究を有機的に結びつけるまでに至らなかったため、今後の課題としていきたい。

賢治の青年期心性とアイデンティティ形成過程について取り組む中で、特に「青年期から成人期への移行」の難しさについて改めて考えさせられた。現代でも、大人になれない若者や成熟できない成人が問題になっている。本論文が、「青年期から成人期への移行」を考える一助となれば幸いである。

【引用・参考文献】

引用文献については、原文の表記に従って旧仮名遣いや旧漢字のまま記載した。また、本文は「宮澤」で統一したが、引用文献については「宮沢」と表記されているものについては原文に従った。

書簡については、宮沢賢治著『【新】校本宮澤賢治全集第十五巻 書簡 本文篇 筑摩書房 1995』、短歌については、宮沢賢治著『【新】校本宮澤賢治全集第一巻 短歌・短唱 本文篇 筑摩書房 1996』より引用した。詩については、宮沢賢治著『【新】校本宮澤賢治全集第二巻詩Ⅰ 本文篇 1995』及び『【新】校本宮澤賢治全集第二巻詩Ⅲ 本文篇 1995』より引用した。

- 1) Erikson, E.H. : Young Man Luther - A study in Psychoanalysis and History. Norton, New York, 1958 (邦訳 西平直訳 青年ルター 1. 2 みすず書房 2003)
- 2) Erikson, E.H. : Gandhi's Truth. Norton, New York, 1969 (邦訳 星野美賀子訳「ガンディーの真理」みすず書房)
- 3) 西平直喜 : 生育史心理学序説 伝記研究から自分史制作へ 金子書房 1996 p 28-40
- 4) 前掲書 3 に同じ p 41-54
- 5) 鎌幹八郎著 : 森有正の「経験の哲学」の契機とアイデンティティ形成について 鎌八郎・岡本祐子・宮下一博編『アイデンティティ研究の展望Ⅵ』 p 1 - p 26
- 6) 大野久 : ベートーヴェンのハイリゲンシュタットの遺書の「自我に内在する回復力」からの分析 青年心理学研究 8 1996 p17-26
- 7) 前掲書 6 に同じ p18-19
- 8) 宮下一博 : 青年心理学の研究法としての伝記資料利用 (伝記研究法) の意義 青年心理学研究 9 1997 p57
- 9) 福島章 : 宮沢賢治 芸術と病理パトグラフィ双書③ 金剛出版 1980
- 10) 矢幡洋 : 賢治の心理学 献身という病理 彩流社 1966
- 11) 白石秀人 : 銀河鉄道の夜一限りない透明な完成を追い童話の深層 創元社 1989 p42-89
- 12) 白石秀人 : 異次元夢旅行—宮沢賢治のリアルをはしる 春風社 2004 p118-154
- 13) 森恭子 : セロ弾きのゴースト—大人になる上での出会いと人格の変容— 森省二・橋本和明・森恭子「童話と心の深

- 層 創元社 1996 p263-292
- 14) 福島章 : 不思議の国の宮沢賢治 天才の見た世界 1996 日本教文社 P197
- 15) 見田宗介 : 宮沢賢治—存在の祭りの中へ 20 世紀思想家文庫 12 岩波書店 1984 p230-231
- 16) 吉田司 : 宮澤賢治殺人事件 太田出版 1997 p189
- 17) 佐藤通雅 : 宮沢賢治から<宮沢賢治>へ 學藝書林 1993 p139
- 18) 吉田和明 : FOR BEGINNERS シリーズ (日本オリジナル版) 宮沢賢治 1992 年 現代書館 p 4
- 19) 山下聖美著 : 新書で入門 宮沢賢治のちから 新潮新書 280 新潮社 2008 p 3
- 20) von Franz, M.L. : The Problem of Puer Aeternus Spring Publications, 1970 (邦訳 : 松代洋一・椎名恵子訳「永遠の少年」紀伊国屋書店 1982)
- 21) Erikson, E.H.・Erikson, B.H. : The Life Cycle Completed Review Expanded Edition W.W.Norton & Company, Inc. New York 1997 (邦訳 村瀬孝雄・近藤邦夫訳 : ライフサイクル、その完結<増補版>みすず書房 2001 p97
- 22) 前掲書 19 に同じ。 p 133
- 23) 菅原千恵子 : 宮沢賢治の青春 “ただ一人の友” 保阪嘉内をめぐって 宝島社 1994 p266
- 24) 前掲書 10 に同じ。 p61-62
- 25) 山折哲雄 : デクノボーになりたい—私の宮沢賢治 小学館 2005 p33-34
- 26) 前掲書 17 に同じ p19
- 27) 境忠一 : 宮澤賢治の愛 TOMO 選書 主婦の友社 1978 p195
- 28) 千葉一幹 : 賢治を探せ 講談社選書メチエ 278 講談社 2003 p 8
- 29) 山内修 : 宮澤賢治研究ノート 受苦と祈り 河出書房新社 1991 p272
- 30) 小沢俊郎 : 弱虫論—宮沢賢治と太宰治 栗原敦・杉浦静編「小沢俊郎宮沢賢治論集 1 作家研究・童話研究」有精堂出版株式会社 1987 p21
- 31) 佐藤隆房 : 新版宮澤賢治—素顔のわが友— 富山房 1994 p 9
- 32) 宮澤清六他篇 : 【新】校本宮澤賢治全集第十六巻 (下) 補遺・資料 年譜篇 筑摩書房 2001 p16
- 33) 前掲書 32 に同じ p 23
- 34) 森莊巳池 : 宮澤賢治の肖像 津軽書房 1974 p 253
- 35) 前掲書 10 に同じ p 37-38
- 36) 前掲書 32 に同じ p38
- 37) 前掲書 32 に同じ p37
- 38) 前掲書 32 に同じ p37
- 39) 高山秀三著 : 宮澤賢治 童話のオイディプス 未知谷 2008 p111
- 40) 前掲書 32 に同じ p45

- 41) 前掲書 10 に同じ p33
- 42) 前掲書 32 に同じ p40
- 43) 前掲書 31 に同じ p19-20
- 44) 前掲書 32 に同じ p 50
- 45) 前掲書 31 に同じ p13
- 46) 前掲書 32 に同じ p93
- 47) 前掲書 32 に同じ p94
- 48) 米田利昭：宮澤賢治の手紙 大修館書店 1996 p 8
- 49) 前掲書 32 に同じ p 93
- 50) 前掲書 32 に同じ p 69-70
- 51) 前掲書 32 に同じ p 72
- 52) 前掲書 31 に同じ p 31
- 53) 前掲書 32 に同じ p 70
- 54) 前掲書 32 に同じ p 82
- 55) 前掲書 32 に同じ p 93
- 56) 山内修編著：年表作家読本 宮沢賢治 河出書房 1989 p 26
- 57) 小川達夫：盛岡中学生 宮沢賢治 河出書房 2004 p 40
- 58) 前掲書 32 に同じ p 82
- 59) 前掲書 56 に同じ P 32
- 60) 前掲書 31 に同じ p 31
- 61) 前掲書 9 に同じ p 77
- 62) 前掲書 14 に同じ p 93
- 63) 前掲書 14 に同じ p 82
- 64) Erkison,E.H.: Psychological Issues Identity and The Life Cycle, International Universities Press, Inc. 1959 (邦訳 小此木啓吾訳編：自我同一性 アイデンティティとライフサイクル 誠信書房 1973 p 115
- 65) 前掲書 64 に同じ
- 66) 前掲書 32 に同じ p 99
- 67) 前掲書 32 に同じ p 116
- 68) 前掲書 32 に同じ p 116-117
- 69) 前掲書 32 に同じ p 95
- 70) 前掲書 23 に同じ p 21
- 71) 長山靖生「大帝没落—大正という時代を考える」新潮社新書 新潮社 2007 p 150
- 72) 前掲書 32 に同じ p 101
- 73) 前掲書 32 に同じ p 172
- 74) 前掲書 32 に同じ p 142
- 75) 前掲書 34 に同じ p 119
- 76) 前掲書 16 に同じ p 105
- 77) 前掲書 32 に同じ p 144
- 78) 前掲書 10 に同じ p 59
- 79) 前掲書 32 に同じ p 157
- 80) 前掲書 32 に同じ p 157
- 81) 前掲書 9 に同じ p 90-91
- 82) 堀尾青史篇：未発表資料宮澤トシ書簡集 ユリイカ第2巻 8号 青土社 1970 p 162
- 83) 福島章編：精神分析の知 88 新書館 1996 p 163
- 84) 西平直：魂のアイデンティティ 心をめぐるある遍歴 金子書房 1998 p 43
- 85) 前掲書 32 に同じ p 210
- 86) 前掲書 32 に同じ p 18
- 87) 前掲書 34 に同じ p 118-119
- 88) 前掲書 39 に同じ p 47
- 89) 前掲書 10 に同じ p 74
- 90) 前掲書 10 に同じ p 74
- 91) 前掲書 23 に同じ
- 92) 前掲書 10 に同じ p 90-91
- 93) 前掲書 32 に同じ p 215
- 94) 前掲書 84 に同じ p 94
- 95) 前掲書 58 に同じ p 72
- 96) 宮澤清六：兄のトランク ちくま文庫 筑摩書房 1991 p 89
- 97) 前掲書 9 に同じ p 102-103
- 98) 前掲書 17 に同じ p 52
- 99) 前掲書 32 に同じ P 225-226
- 100) 前掲書 10 に同じ p 88
- 101) 前掲書 19 に同じ p 98-99
- 102) 前掲書 34 に同じ p 53
- 103) 前掲書 34 に同じ p 119
- 104) 前掲書 17 に同じ p 67
- 105) 前掲書 32 に同じ p 237
- 106) 前掲書 31 に同じ p 137
- 107) 前掲書 32 に同じ p 259
- 108) 前掲書 34 に同じ P 59
- 109) 前掲書 32 に同じ p 254
- 110) 前掲書 10 に同じ p 96
- 111) 前掲書 34 に同じ P 59
- 112) 前掲書 31 に同じ p 86-87
- 113) 前掲書 31 に同じ p 204
- 114) 前掲書 10 に同じ p 98
- 115) 前掲書 39 に同じ p 190
- 116) 前掲書 39 に同じ p 190
- 117) 前掲書 31 に同じ p 110
- 118) 前掲書 19 に同じ p 120
- 119) 押野武志：童貞としての宮沢賢治 ちくま新書 筑摩書房 2003 p 167
- 120) 前掲書 39 に同じ p 117
- 121) 前掲書 34 に同じ p 108
- 122) 前掲書 31 に同じ p 204
- 123) 前掲書 31 に同じ p 154
- 124) 宮澤賢治：【新】校本宮澤賢治第十一巻童話IV本文篇 1996 p 167
- 125) 前掲書 32 に同じ p 311-312

- 126) 前掲書 31 に同じ p 163-164
- 127) 関登久也：新装版宮沢賢治物語 学習研究社 1995 p 362
- 128) 前掲書 127 に同じ p 363
- 129) 前掲書 32 に同じ p 320
- 130) 宮沢賢治：【新】校本宮澤賢治全集十三卷(上)覚書・手帳 本文篇 筑摩書房 1997 p 9
- 131) 前掲書 10 に同じ p 145
- 132) 前掲書 34 に同じ p 180
- 133) 前掲書 31 に同じ p 210
- 134) 前掲書 34 に同じ p 196
- 135) 前掲書 96 に同じ p 260
- 136) 前掲書 96 に同じ p 260
- 137) 宮沢賢治：【新】校本宮澤賢治全集第十三卷(下)ノート・メモ 本文篇 筑摩書房 1997 p 202
- 138) 前掲書 32 に同じ p 419
- 139) 前掲書 32 に同じ p 150
- 140) 前掲書 127 に同じ p 265
- 141) 前掲書 56 に同じ p 102
- 142) 前掲書 34 に同じ p 56
- 143) 前掲書 32 に同じ p 414
- 144) 前掲書 34 に同じ p 119
- 145) 前掲書 17 に同じ p 228
- 146) 前掲書 96 に同じ p 261
- 147) 前掲書 130 に同じ p 306-309
- 148) 前掲書 96 に同じ p 261
- 149) 前掲書 10 に同じ p 32
- 150) 前掲書に同じ p 95
- 151) 前掲書 119 に同じ p 147
- 152) 前掲書 32 に同じ p 468
- 153) 前掲書 130 に同じ p 468
- 154) 前掲書 32 に同じ p 471
- 155) 前掲書 130 に同じ p 516-518
- 156) 前掲書 130 に同じ p 524-525
- 157) 佐藤竜一：宮澤賢治あるサラリーマンの生と死 集英社新書 0461F 集英社 2008 p 162
- 158) 前掲書 48 に同じ p 287
- 159) 前掲書 32 に同じ p 518-519
- 160) 前掲書 32 に同じ p 520-521
- 161) 前掲書 127 に同じ p 204
- 162) 大正時代については、前掲書 71 および速水融 小嶋美代子：大正デモグラフィ 歴史人口学で見た狭間の時代 文春新書 358 文藝春秋 2004 を参照した。
- 163) 前掲書 71 に同じ p 35-36
- 164) 竹村民郎：大正文化帝国のユートピア 世界史の転換期と大衆消費社会の形成 三元社 2004 p 168
- 165) 神島二郎編：近代日本思想体系 8 徳富蘇峰集「大正の青年と帝国の前途」筑摩書房 1978 p 70
- 166) 前掲書 71 に同じ p 94
- 167) 前掲書 165 に同じ p 80
- 168) 前掲書 165 に同じ p 324
- 169) 湯沢雍彦編「大正期の家庭生活」クレス出版 2008 p 77
- 170) 前掲書 169 に同じ p 71
- 171) 山田恵吾・貝塚茂樹編：教育史からみる学校・教師・人間像 梓出版社 2005 p 40
- 172) 長島裕子：「高等遊民」をめぐる一『彼岸過迄』の松本恒三―石原千秋編「日本文学研究資料新集 14 夏目漱石・反転するテキスト」有精堂出版 1990 p 223
- 173) 前掲書 172 に同じ p 221
- 174) 石川啄木：時代閉塞の現状 現代日本文学全集 15 与謝野寛・与謝野晶子・石川啄木・北原白秋集 筑摩書房 1954 p 203
- 175) 前掲書 174 に同じ p 203
- 176) 原子朗：(新) 宮澤賢治語彙辞典 東京書籍 1999 p 259
- 177) 前掲書 30 に同じ p 21
- 178) 前掲書 16 に同じ p 39
- 179) 前掲書 71 に同じ p 85
- 180) 比較家族史学会監修 永原慶二・住谷一彦・鎌田浩編：シリーズ比較家族 1 家と家父長制
- 181) 有地亨：日本の親子二百年 新潮選書 新潮社 1986 p 72
- 182) 前掲書 34 に同じ p 254
- 183) 前掲書 34 に同じ p 215
- 184) 前掲書 169 に同じ p 56
- 185) 前掲書 29 に同じ p 44-45
- 186) 前掲書 34 に同じ p 256-257
- 187) 前掲書 164 に同じ p 169
- 188) 前掲書 96 に同じ p 126-127
- 189) 上田哲：宮沢賢治 その理想世界への道程 改訂版 明治書院 1998 p 376
- 190) 前掲書 96 に同じ p 89
- 191) 前掲書 84 に同じ p 94
- 192) Heinze Kohut, M.D. : The Restoration of The Self, International Universities Press, Inc., Madison, Connecticut, 1977 (邦訳 本城秀次・笠原嘉監訳「自己の修復」) みすず書房 1995
- 193) 前掲書 56 に同じ p 72
- 194) 前掲書 71 に同じ p 200
- 195) 前掲書 19 に同じ p 3
- 196) 前掲書 16 に同じ p 46
- 197) 金原瑞人：大人になれないまま成熟するために 前略。「ぼく」としか言えないおじさんたちへ 洋泉社 2004 p 36

図表1 宮澤賢治年表

年	年齢	出来事	詳細	心理的影響	作品	歴史的出来事
1896	明治29年	0歳	出生 父の不在	父の、父親になることへの無意識的な回避	父と賢治の複雑な関係の始まり	
1897	明治30年	1歳				
1898	明治31年	2歳	トシ出生			
1899	明治32年	3歳	父母の熱心な仏教信仰	母の「ひとというものは、ひとのために何かしてあげるために生まれてきた」という教え	自分を犠牲にしても、人のために役立つ、体感幻覚	
1900	明治33年	4歳				治安維持法
1901	明治34年	5歳	シゲ出生			
1902	明治35年	6歳	赤痢で入院	看病中、父が感染	父への罪悪感	
1903	明治36年	7歳	尋常小学校入学	礼儀正しい大人びた子ども	良い子を強いられ、親の支配下	
1904	明治37年	8歳	清六出生	品行方正、成績優秀		日露戦争
1905	明治38年	9歳				終戦
1906	明治39年	10歳				
1907	明治40年	11歳	クニ出生 餓鬼大将になる	仲間関係の成立 ギャングエイジ	親からの分離、一方で父への同一化	作文 「立ばな質屋商人になる」
1908	明治41年	12歳				
1909	明治42年	13歳	盛岡中学入学、寮生活	いたずら好きの少年	父の支配から逃れ、自由を満喫	
1910	明治43年	14歳				
1911	明治44年	15歳				短歌制作開始
1912	明治45年	16歳	仏教、趣味への傾倒、成績低下、舎監排斥騒動	進学できないことへの不満	自暴自棄、注釈妄想置き換え	
1913	大正2年	17歳				
1914	大正3年	18歳	盛岡中学卒業、入院、失恋	看病中、父の感染。進学希望、家業への拒否感 初恋の人との結婚への反対 進学の許可	アイデンティティ拡散 抑うつ的、体感幻覚 危機から脱出	第一次大戦
1915	大正4年	19歳	盛岡高等農林学校入学	モラトリアムの延長	精神的に安定	
1916	大正5年	20歳	保阪との出会い 独逸語講習 (東京)	親友関係の成立 病気の母を置いて上京	精神的な支え 母の看病を回避、東京への憧憬	丹藤川
1917	大正6年	21歳	アザリア発刊	作品の発表 実業の計画	保阪からの影響 アイデンティティの模索	秋田街道、柳沢、沼森
1918	大正7年	22歳	盛岡高等農林学校卒業 保阪の退学 研究生、徴兵検査 トシ入院、看病のため上京	進路で父と対立 退学を考えるが、卒業 研究生になるが、病気になる 辞職 家業手伝い 実業・東京移住への模索	進路への迷い 保阪への罪悪感、しがみつき 役に立たないことの恐怖、見捨てられ不安 アイデンティティ拡散	青びとの流れ、復活の前、蜂や谷は
1919	大正8年	23歳	家業手伝い	家業への嫌悪 法華経の布教への意志	精神的な危機、内的世界での闘い	猫、ラジュムムの雁、女、うろこ雲、龍の話、ガンジス河の姉妹の話
1920	大正9年	24歳	国柱会入会、布教活動	花巻の町を題目を唱えながら歩く。父を改宗させようとする。	信仰における父との対立	家長制度、猫、女、うろこ雲を改稿
1921	大正10年	25歳	家出上京 印刷所勤務 宗教活動 創作活動 父と関西旅行 保阪との決別 トシの病気で帰花 花巻農業高校教諭	家の帰正を願ひ、国柱会へ。自活し、法華経文学を志す。父の懐柔策に従うが、帰花拒否 保阪に入信を勧めるが、決別 トシの病気を契機に帰郷 教諭として就職	自立への試み。そう状態になり、活発に創作活動、過剰な自信。父の支配が及ばなくなり、父子関係の変化。同行者として保阪を求めたが、喪失。挫折感から帰郷。	短歌から詩作へ。かしばばやしの夜、月夜のでんしんぼしなら、鹿踊りのはじまり、どんぐりと山猫、注文の多い料理店、狼森と箕森、盗森、雪渡り、鳥の北斗、七星海部の川 (童謡)
1922	大正11年	26歳	教諭としてのアイデンティティ、同僚への接近 トシ死去	熱心で温かい先生、画期的な授業 同行者として接近するも、諦める たったひとりのみちづれの喪失	次世代を育てることへの情熱 対人関係の変化 悲嘆、喪失感	心象スケッチ、春と修羅、小岩井農場、永訣の朝、松の針、無声嘯哭、水仙月の4日、山男の四月、独蝶、貝の
1923	大正12年	27歳	北海道經由樺太旅行	生徒の就職活動のための出張だが、トシの死を悼む傷心旅行	トシの死を受け入れられず、1人残されたことへの嘆き	風林、白い鳥、青森挽歌、津軽海峡、オホーツク挽歌、冬と銀河鉄道、やまなし、シグナルとシグナレス
1924	大正13年	28歳	心象スケッチ「春と修羅」刊行、イーハトブ童話「注文の多い料理店」刊行	変革をもたらす壮大な企画と位置づけ、出版。一部では評価されたが、認められず。	喪失感を補うための出版に失敗し、挫折感。	津軽海峡、函館港春夜光景、比叡、風の又三郎
1925	大正14年	29歳	退職の決意	農民、農村の問題に直面。	生徒に農業を薦めながら、自分は教師であることの矛盾。本当の百姓になる決意	異途へ出発
1926	大正15年	30歳	退職 別宅で独居自炊生活 羅須地人協会活動 上京(セロ、エスペラント学習)	自立への試み 農民と同様な生活をするが、受け入れられない。 作品のための学び。	農民との隔たりを実感。肥料設計でも不作になる。挫折感。 野心の極と理想の極の往復。	雲、孤独と風童、岩手軽便鉄道の一月、風と反感、オッセルと象、農民芸術概論概要
1927	昭和2年	31歳	警察の事情聴取 女性の出現	羅須地人協会への打撃 接近する女性を拒否	理想的と現実の葛藤 全ての人を愛するために、1人に固執しない。	冬と銀河ステーション
1928	昭和3年	32歳	伊豆大島訪問 肺浸潤	農学校を開校する伊藤の招き。調査、助言。妹との見合い不成立	「兄妹のような夫婦」という結婚観。トシへの想いを引きずる	台地、三原三部、疾中詩篇
1929	昭和4年	33歳	闘病生活 鈴木東蔵と出会い、	羅須地人協会の終焉 砕石工場の仕事への関心	死の予感と闘う。挫折感 東蔵と意気投合する	夜
1930	昭和5年	34歳	回復、新しい道を模索	闘の激励、父が資金援助	新たな理想を見つけ、昂揚する	まなづるとダリア
1931	昭和6年	35歳	東北砕石工場と契約、病床	営業の仕事に心身をすり減らす	理想とは違う厳しい現実に悩む	雨ニモマケズ、北守将軍と三人兄弟の医者
1932	昭和7年	36歳	病床	出版への意欲、新たな計画の模索	デクノボーという理想像	祭日、母、グスコブドリの伝記
1933	昭和8年	37歳	死去	人生を総括する	慢を反省。人生を受け入れる	